

川柳塔

平成元年六月一日発行
創刊大正十三年
通卷七四五号



日川協加盟

No. 745

六月号

西尾 葉 叙勲記念川柳大会

日 時 平成元年 7 月 9 日(日) 午前11時開場

会 場 なにわ会館 4 階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 TEL 06 (772) 1441
但し、地下鉄谷町線・谷町九丁目下車5分 近鉄上本町下車スグ

司会 西 田 柳宏子

開会の辞 橋 高 薫 風

祝 辞……………日本川柳協会理事長 山 田 良 行 氏

題と選者 (各題2句 ☆締切 12時 ☆欠席投句拝辞)

「初 恋」 小 出 智 子 選

「挨 拶」 波多野 五楽庵 選

「慌 てる」 黒 川 紫 香 選

「 絵 」 寺 尾 俊 平 選

「町 内」 広 瀬 反 省 選

「 旅 」 小松原 爽 介 選

「 顔 」 去来川 巨 城 選

「 杯 」 磯 野 いさむ 選

事前投句 「自 分」 西 尾 葉 選

閉会の辞 野 村 太茂津

事前投句はハガキに2句・締切 6月20日

(宛先) 〒545 大阪市阿倍野区三好町2-10-16

ウエムラ第2ビル 川 柳 塔 社

会 費 2,000円 (昼食・記念品・作品掲載誌呈)

祝 宴 8,000円 (同会場にて午後5時～8時の予定)

主 催 川 柳 塔 社

一円玉

西尾 葉



私らが川柳を習い始めた頃は、時事川柳は命が短かく、後世に残る句が非常に少ないと言われて、敬遠されたものであるが、その後、時事川柳はニュース川柳とか何とか言われて随分、発展したものである。そして、『庶誌』、『版』は月刊雑誌としてその地歩を確定して、読売時事川柳は仲々意気軒昂たるものがある。私は、川柳塔誌の同人吟十句を毎月、選んでいるが、投句の中には時事川柳の句が沢山あって、リクルート、消費税となってくる。一円玉云々の句が始末に困る程に出てくる。そもそも、川柳は世の中を批判し諷刺することから始まった。だから昔からよく言われる

役人の子はにぎにぎをよく覚え
という句があるように、袖の下の行為が当然のようである。

そんなことされては嬉し袖の下
という、大矢十郎さんの佳句があるが、当世流行の汚職を詠い得ている。
今、手元の塔誌を見てみると、仲々面白い

句があるが、何時何時までも人口に膾炙されるような命の長い句であることを祈りたい。

リクルートどこまで続く泥濘ぞ 芳仙

昨日も今日もリクルート明日もさうだろう 千代

リクルート一人挙つて美味いめし 耕花

羅漢さま消費税をどう思わはる 杜的

胃袋で消化の悪い消費税 与根一

物を買う度に怒髪消費税 鬼遊

平成元年忍の一字と怒の一字 〃

エイプリルフルでなかった消費税 英子

消費税ユーモアのない一円貨 笛生

小銭入れがふくらんでゆく漫画 荒介

選をしていても、時事吟の方がピンとくることが多い。それは、事実が新しいからである。だから表現で勝負しなければならぬ。

消費税について、一円玉が何十回何百回と顔を出したが、似たりよったりであった。

この頃、川柳大会の一題に時事吟という題が出るようになった。大いに批判と諷刺の句によって、世の浄化を計つてゆきたいものである。

座右の句

道問へば一度にうごく田植傘

(柳多留)

私の句

汚すまい地球にスヘアありません

谷口次男

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

一円玉

川柳塔あおもりの目標

西尾 栞 ……(1)

波多野五楽庵 ……(2)

川柳塔(同人吟)

西尾 栞選 ……(4)

自選集

■川柳太平記(133) 川柳の群像 山田祥園

東野 大八 ……(34)

■連載 俳風柳多留廿六篇研究(四十一丁〜四十二丁)

黒川紫香選 ……(36)

水煙抄

秀句鑑賞

「同人吟」

田中正坊 ……(33)

水煙抄

田形美緒 ……(57)

89年度 路郎賞・川柳塔賞候補作品中間発表

愛染帖

橘高薫風選 ……(61)

〈女性コーナー〉苗香の花

小出智子選 ……(64)

川柳塔あおもりの目標

波多野 五楽庵

『川柳塔あおもり』栞先生に題字を書いていただいた手造りの小冊子を眺めながら、一粒の種が東京を飛び越えて本洲最北端に着床した不思議な絆を考えていた。

川柳塔同人工藤安亭と言っても、今はもう思い出す人もいないが、工藤甲吉さん同様に路郎先生に心酔して、青森からはるばる川柳塔の門をたたいた川柳探求者がいた。工藤安亭は私の伯父であり、私に川柳を勧めた人であり、私の柳号の名付親でもある。伯父安亭のことは、私の尊敬する東野大八さんが『川柳総合事典』に執筆されているが、齒科医を開業した満州での酒がうますぎたのか、帰国してからの津軽の酒がうますぎたのか、酒が起爆剤になって、雪の降る朝に忽然と西方へ旅立った。

私を長男のように可愛がった安亭は、私に川柳を残してくれた。したがって私の川柳は路郎先生が伯父を通して私に教えて下さったと考えるのが至当である。

最近、青森県に吹き出して来た新川柳と言うか感覚川柳と言うか、言葉遊びの波にとまどいを感じていた私が、伯父の親友であった甲吉さんに、川柳塔入会と指導をお願いした

一路集「ホテル」……………	山川克子選……………	(66)
「近い」……………	両川洋々選……………	(66)
初歩教室……………	岩本雀踊子選……………	(67)
高鷲亜鈍さん さようなら……………	阿萬萬的……………	(68)
亜鈍君を偲ぶ……………	東野大八……………	(70)
高鷲亜鈍さんを偲ぶ……………	大坂形水……………	(71)
父亜鈍への追憶……………	里小路……………	(72)
中田白李さんを悼む……………	藤村亜成……………	(73)
柳界展望……………	吉原紅月……………	(74)
■ずいそう 神泉苑の雨乞いくらべ……………	布施幸子……………	(76)
本社五月句会……………		(78)
各地柳壇（佳句地10選／西村早苗）……………		(82)

■6月各地句会案内／95

■編集後記／97

座右の句

裁かれているのだからか寒すぎる

(河瀬芳子)

私の句

幾部屋も空いて夫婦の夜の長さ

園田 獏 杳

のは五十九年の正月のことである。栗先生、薫風先生のご指導をいただいている内に、青森県からも投句をしている方々がいることに気がつき、この人達と一年に一回でも句会を開けないものだろうかと思いをはせるようになった。丁度その頃、東奥日報社主催の県川柳大会特別選者として、来県いただいた栗先生と特別御参加の薫風先生をお招きした一夜の宴の席上で、川柳塔あおもりを結成させます、とお話したのがきっかけで、昨年七月三日に創立総会を開催することができた。十二人の会員が十八人になり、十八人が二十一人になり、月に一度の研究会と年三度の句会、年三度の機関紙の発行、あれよあれよという間に走り出したのである。

会員は少ないけれども、みちのくに路郎先生を尊敬してやまぬ川柳塔のともしびがともされ、春には春の酒を酌みかわしながら川柳を楽しんでいる。甲吉さんがいて、あさんがいて、叶さんがいて、その小さなともしびの次の目標は、川柳塔あおもり第二号の発行と栗先生叙勲記念大会に青森の会員の多数参加を計画している。第二号は校正が終り、今日の編集会議では七月の大阪行夜行列車の話になるだろう。新しいすてきな友情を求めて、川柳塔あおもりは歩いてゆく。かたつむりのように遅くても、皆様の友情を求めて着実に歩みつつける。



西尾 葉 選

悼 高鷲重純氏(二句)

八尾市 高 杉 鬼 遊

春の宵冥途へ急ぐ白い杖
物を買うたびに怒髪消費税

気に食わぬ閣僚ばかり雨季に入る

政治家になるほど浅ましくはない

平成元年忍の一字と怒の一字

竹やぶを素通りできぬその日以後

春なれや隣の猫も家出する

松原市 谷 垣 史 好

桜散る男尊女卑も美事散る

夢の一つに君と時計のない暮らし

脳髓にきつと溜まっているヘドロ

おじやま虫が体内にいてシヤンとせぬ

体温計買いに西日の町を行く

カネの重みでおや列島が沈みだす

大阪市 西 出 楓 楽

マイカーを降りて青竹踏んでいる

三つ指を夫についたことがない
強烈な個性とおもう没個性

長男結婚(三句)

幸せが続き足りなくなる花瓶

よろこびをふるまいたくてしゃべり過ぎ

花束抱くきのうきょうあすしかと抱く

奈良市 宮 口 笛 生

反主流派で赤いネクタイしめている

消費税にユーモアのない一円貨

簡単に金もうからぬ父の靴

亡母の日の仏間に好きなさくら餅

ナス・キュウリ・トマト・ピーマン五月の田

悠々自適明日は雨の方がよい

米子市 林 瑞 枝

やわな子よ無人島暮らしさせようか

未知数のホープのスポンサーになろう

叛かれてみても酸素と水がある

ポケット瓶 ピンクの季節愉しもうよ

コーラスの声から娑婆の風は消え
お医者さんの澄んだ言葉に救われる

桜井市 岩本雀踊子

身勝手な世間を知りたい両の耳
おじいちゃんに会いたくなつたかくや姫

騙された数をかぞえる針坊主

平社員似合う勤続四十年

男の意地が少し背のびする

たよられる父になりたい歯をみがく

兵庫県 遠山可住

実年へ残る自由の絵を画こう
絵が好きで貧乏神と暮してゐる

心配はいらぬ子宮がとつてある

一杯の酒へ貧しく寄る味方

合格を一番風呂へ入れて酒

お互いの齢のはなしをして別れ

宇部市 平田実男

トビがトビ育てて恙ない我が家
肩の荷がおりて真昼の月になる

リクルート自分の網にひっかかり

舌二枚ないから大臣にはなれず

女房の尻の重さがある安堵

二人三脚でも三十年続き

米子市 林荒介

ローソクの消えれば見えるむかしの絵

インク壺むかし嘶にすぐ溺れ

小銭入れがふくらんでゆく漫画

雑音を届けてならぬ石の下

湯舟からは剥離してゆく鱗

四捨五入弱者に味方してしまふ

平田市 久家代仕男

浅学非才などと新任教師どの

はこ舟の雛は汐路を北にとり

夏柑一つ川の淀みがもて遊ぶ

自閉児がおたまじゃくしを飼っている
陰口にしゅうと感度のいい鼓膜

コーヒーに募るおもいが滞り

和歌山市 西山幸

運命線の細くて暗いのに気づく

割箸がまっすぐ割れる日に賭ける

ひとりぼつちを確かめている爪楊子

やる気出そうと鉛筆をみな尖らせる

母の忌や菜の花漬のほろ苦し
ときめくと匂い袋もよく匂う

松原市 玉置重人

ラッシュユまで英字新聞読まんでも
ワープロで打つと冷たくなる手紙

ステーキを厚めに切った還付税

ギックリ腰これが私の四月馬鹿

恍惚の兆し探しているめがね

ダンボール坪何千万のところで寝る

八尾市 宮西弥生

この壁も柱も女手で光る

青春をしてます天も地も五月

不自由せぬ程度のくらし衣裳箱

友達の雀もいる日向ぼこ

勝ち負けはどうでも男と女の世

来世もまた女でいたい髪をすく

潮どきを逃した貝の独り言

温い掌がほしくて散れぬ玉椿

疵負うているから強がりまだ言える

エイプリルフルで無かった消費税

考える人を見てきたマンガ本

それらしい顔になりきり美術館

風呂の湯を溢れさせてる旅帰り

花のころは花に流れてゆく命

風よ吹け春の名残のあるうちに

海女たちの溜息をきく珊瑚礁

幸せな一日でした花づかれ

窓いっぱい開けて誤解を解いておく

自画像をすこし理想に近づける

美容院しらがぞめもう奨めない

人間の天敵人がつくり出す

目分量手量りうちの味になる

敵なんか居ないと思っていた不覚

和歌山市 福本英子

松原市 佐藤藤子

大阪市 本間満津子

連休はおみやげ待ってるほうがよい

悪女にも良妻賢母にもなれず

悪女にもなれず漬物きざむ日々

病む床に夫が洗う皿の音

幸せが逃げそうだから窓しめる

言葉飾ると猫もするりと膝を下り

スイトピー飾りひとりの誕生日

大阪府 坂口公子

見ん事な蜘蛛の巣払っている自責

小癩にも潰瘍と腓炎握手する

畏くも点滴・絶食陛下並み

三分粥目ん玉はつきりうつります

終焉も女で居させて神さま仏さま

「元氣ですか」は病窓より夫へする打診

下関市 石川侃流洞

妥協して自己採点が甘くなる

過去形の話で和む老人会

甘やかすと雑草すぐにつけあがる

舞台暗転父の端役はそのまんま

先生の目に少年は老い易し

岡山市 嘉数兆代賀

大会反省跨行(三句)

春息吹く潮戸の白百合も躍動す

心の和固く明日へ手を握り

民宿はよしおふくろという温味

深情一期一会は風の中
節くれた指で倅せ握りしめ

竹原市 小島 蘭 幸

夜桜の白き涙が出て困る

洗濯機の渦に桜も浮く春よ

缶ビールの小でよろしい僕の春

手を抜かぬ男 六十歳となり

明日へ明日へと川は流れてゆくのなら

竹原市 森 井 菁 居

これからが人生 靴のひもを締め(先輩勇退)

二女はまだスペインに居るエアメール

父倒る(八十歳)

父危篤激しく回る走馬灯

スピードが何とも遅い救急車

長男として平静を装いぬ

弘前市 波多野 五楽庵

P音の口笛春の幕が開き

バスを待つ傘がゴルフの真似をする

贗作を信じてしまふ応接間

贈答の干物が続く夫婦箸

二日酔げに腑抜けともあわれとも

倉敷市 野 田 素身郎

花の下幹事が先に酔いつぶれ

幾らかの憎しみをこめ棺の釘を打ち

駐車場も満車うどん屋も満員

子ができて腕を組まなくなった妻

籠の鳥 銃の怖さを知らず逃げ

美禰市 安平次 弘道

アドリアの中に本音が秘めてある

甘い水君は蛍を笑えるか

くすり指女の運命かいま見る

不整脈笑い袋が止らない

脛に傷たとえ話が気に入らず

兵庫県 辻 文 平

勝ち越して明日の仮面をより分ける

相談ですかと躊躇のない歩幅

真四角のまま父さんの馬鹿囁

折れた矢へ母は静かに忍を説く

伸び切ったゴム不器用なる笑顔

大阪市 津 守 柳 伸

三月の切符で旅行する四月

団体のレールで昼の露天風呂

卑屈にはなれぬ白髪を抜いている

君子蘭きつちり咲いた思返し

奔放な恋で祝福されぬ猫

大阪市 河 井 庸 佑

短くて実のある祝辞考える

節々にのぞく自慢が嫌になる

前へしか進めぬ香車にある不満

苦勞して座った椅子が軋みだす

似て欲しくないとこばかり似て生まれ

大阪市 江 城 修 史

報われぬむなしさ夕日が赤すぎる

踏台で終る人生それもよし

明日があるなどと言えない賢不全

引き止めて止まらぬ命をいとおしむ

着ぶくれて心貧しき饒舌よ

雑草も精いっぱいの花をつけ

流れ矢にときどき当るお人好し

流される憎悪さくらと一緒なら

人生を半分生きて迷いなし

正直に生きてラベルに騙される

大阪市 黒田 真砂

自史の余白へ印す童唄

あせらずに行こう夫との二人旅

昨日今日明日へ向つてはずむ夢

胸ふるう恋の記憶も遠くなり

紅唇より胸さす言葉ほとばしる

大阪市 藤田 頂留子

高安城趾ひと時老いを忘れ果て(八尾句会吟行)

七割引それでも宝石ゼロ四ヶタ

ガス水道道路普請は年度末

ストローが何本もあるリクルート

粗品つき封筒デパートとのきずな

大阪市 古川 美津枝

一億円みんなでわけよう竹やぶへ

塩ゆでのそら豆好きな花の下

置こたつ我が家のおもろい生字引

保護外泊笑顔をもせる通り抜け

髪染めて三十路の亡夫にもの申す

大阪市 大塚 節子

瞑想が並んだ春の通勤車

良いことがあるよう好きな袖着る

なめんなよ猫の気持が分るのか

褒賞も妻のお陰とふりかえり

通勤車 紺の背広が弾んでる

米子市 石垣 花子

輪の中で母がいつでももしゃがんでる

本当のことは明かせぬ袖だたみ

釘はまだ女を小馬鹿にして困る

転任が近い男の胃が痛む

どの子へも無事か無事かと震度3

米子市 政岡 日枝子

弱点を知りぬいている床柱

デートした余韻花を活けかえる

洗いなおして母とは違う顔をする

わずかばかりの水で仏とつながれる

仏花人の記憶もちりぢりに

米子市 青戸 田鶴

この春に逢わずに逝った仏たち

今日の約束は今日で終えたい春の道

一人ではないと夕陽が語りかけ

表向き反対裏で手を握る

巢立たせて遙かな祈り欠かせない

米子市 菅井 とも子

声だけで満足出来ず汽車に乗る

反対方向に行けば実家が待っている

人の和を少し覚えた幼稚園

二日制妻が疲れる日曜日

文面はどうあれ老母の便り来る

米子市 寺 沢 みどり

よそ見した隙に夕陽が落ちていた

進化論信じた朝は気がかるい

カーネーション母の噂が咲き揃う

通過駅思い出ばかり強くなる

日曜のひとり芝居に飽きてくる

米子市 田 中 亜 弥

友の数吟味してから増やさねば

椿ぼとり絆のこして行きました

忘れっぽい鍵ですポチに預けよう

秘密まだ知らぬオウムでよくしゃべる

美しい生まれでいいな母さん

米子市 野 坂 なみ

進むのは今大台が見えている

試運転その原点到還ろうよ

下町に温いうわさが咲いて春

哺乳瓶触れて人肌たしかめる

廃屋の季節に素直椿咲く

鳥取市 両 川 洋 々

祈る手の指の隙間に鬼が棲む

詰め腹を切る日影武者飼っておく

最後には造花よ散ってみたかろう

恩赦など不倫の罪へあるもんか

バズル解く鍵を人妻からもらう

鳥取県 川 崎 秋 女

どうしても妥協をしない父の庭

泥水を黙って呑み込む母の川

いまここで話すと私負けになる

国会中継晩のおかずを考える

一億円ポイ捨てにする人もいる

鳥取県 松 下 たつみ

歳時記はハウスの花に見せられぬ

冬のハウスは異端者ばかり育ててる

母の名で解けぬ頑固な荷がとどき

裏返す枕に秘策などはなし

笑ってすむことへ歯切れの悪い嘘

鳥取県 土 橋 螢

ひとりよりふたり歩いて砂が鳴る

警察を味方にすれば大丈夫

幸福をくださるまでは無理もする

父よりも大きな足の靴を買う

ミス日本よりもやさしい妻がいる

西宮市 林 はつ 絵

独り住まいパントマイムで日が昏れる

百枚に悪女のざんげ書ききれず

悪でない少し鋭いだけである
民族の帽子の飾り血が通う
自惚れが貧しい影を離れない

西宮市 西口 いわゑ

秘密一つ守り続けていて悪女
悪人も善人もなし花の下
やぶ椿一輪という玉子酒

一鉢の花と安らく齒科の椅子
あの話酔うてた事にしておこ

松江市 恒松 町 紅

田も山も荒れてピアスが流行り出す
孫がいてまだ姑へ紙オムツ

老人手帳見せてはならぬ春の宴
若者が戻って来ない田舎道
平凡な余生だ名刺などいらぬ

松江市 柳 楽 鶴 丸

ファイティーファイティーで妻と僕
横好きでへのへのの描いてます

日本海喜怒哀楽を知っている
県民の心を六道湖知っている
未完成だから未完成が好き

松江市 舟 木 与 根 一

春陽遅々悠々自適万歩計
あり余る百姓一揆だつてある

宅地化へ肩肘張つてねぎ坊主
人間であつては困る公務員

消費税他人行儀な冷やつこ

倉吉市 奥 谷 弘 朗

金婚をチャンスと決めて出す句集
逆転のチャンス最後まで捨てず

中流と見せたい雛壇かもしれず
逃げ腰の男は追わぬことにする

甲の上なんて見たのが甘すぎた

倉吉市 渡 辺 独 歩

教育が病んで登校拒否が出る
その中に渡り鳥も居た天下り

古稀という節目に何かを模索する
自販機が卑弥呼の里だと呼んでいる

クレジットカードに中毒した女

島根県 小 砂 白 汀

旅衣空似の女と乗り合わせ
愛極まれば咬みつくバラの棘

タラップを降りて地球の懐かしや
しとしとと前立腺よ菜種梅雨

釈尊も使えと言われた二枚舌

島根県 堀 江 正 朗

音頼りながらいちばん嫌な音
人さまを賞めるゆとりは耳の幅

忘れない文字でのひらに妻と書く
うかつにも僕の秘密を聞いた壁
盃の底に僅かな意地を溜め

島根県 堀 江 芳 子

失明の夫に濁りのない笑顔

つれ添うてさらさら悔いのない寝顔

酒好きへ話し上手に酌ぎこぼす

研ぎ味をせせら笑ったカットバン

顔剃りに行くお化粧に念入れて

豊中市

安藤 寿美子

謙譲の美德をいつも自己主張

穴を出た蛇消費税知ってるか

肩書は愚妻とかいておけばよい

エンマ様に申告する事もう一つ

かあちゃんもピリを走った運動会

豊中市

田中正坊

王様が狙われている紙つぶて

紙バッグ今日も善人演じきる

紺花さんを悼む

彼岸桜 武蔵の里は春浅し

野辺送り董タンポポつくしんぼ

さらばさらばもう戻らない奴唄

仙台市

川村 映輝

あくびするひまなし八十越えてから

遺言状消したり書いたり抄らず

悪口の上手な奴が当選し

花だより朝の散歩もまわり道

老い二人 一人になった夢でさめ

和歌山市

若宮 武雄

別れたい別れともないおぼろ月

逃げるより楽だ白旗ふりかざす

生存競争なら雑草の思いつけ

竹藪がちつとも揺れぬ不気味さよ

妻という支え覚った手向け花

和歌山市

松原 寿子

思いつく指の先から呼び戻す

髪を梳くしきりに君を追い求め

バッグを肩に愛の微熱は避け切れず

合せ鏡のなかではぐくむ夢がある

冒険を真紅の薔薇にさそわれる

和歌山市

内芝 登志代

世につれて牡丹しやくやくしたたかに

百点の妻から逃げたい時もある

針一本糸一寸を大切に

びん型が似合う眉毛の濃いむすめ

山男登りつづけて妻を恋う

和歌山市

福井 桂香

花暦めくれば青葉みち溢れ

何のため口があり何のために耳がある

春の闇ぬくい言葉をまざぐれど

水中花春風吹こうと吹くまいと

回り道べんべん草がいとおしい

和歌山市

後藤 正子

溢れるほどの春たけなわと歩を合わす

小川さらさら胃の中にある刺激物

笑う事でバランスをとる朝の道

生い立ちを聴かせあげ小糠雨
優しくなつてふつと消えたらどうしよう

八尾市 宮崎 シマ子

さくらさくら今年も皆に逢えました

犬も行く桜並木のたこやき屋

とつくにに娘はハネムーン春の宵

すずらんの鉢植えをかう誕生日

ゆるめたり締めたり夫とつなぐ紐

八尾市 鷺見 章

源流を辿ると過疎の湧清水

喰へ歩き花の道なら許されて

青春記ハイネを知りし兄の書架

町工場桜の昼に誰も居ず

ジョギングの後は団地のエレベーター

寝屋川市 江口 度

良い出逢いだつたと思うフルムーン

夫婦して悩みの花は咲かせない

折れるとも知らず天狗鼻で受け

急用で呼ばれ二時間待たされる

あつさり峠を越えた花だより

寝屋川市 稲葉 冬葉

イントロを歌手さながらの上機嫌

虎の子が消えた話を笑われる

水に流して良いことと悪いこと

無い袖を振れぬ胸中風が抜け

傷の深さを知っているお月様

尼崎市 春城 武庫坊

大和魂抜けた桜が美しい

春の宵少し甘えた鐘がなる

春の風ステンドグラスに夢集め

画一な着付け女子大謝恩会

辞書が重くてカタカナ混じりの文を書く

尼崎市 春城 年代

老いた証拠にかごめの輪から出たがらぬ

友達のおつとおどろくのがねらい

真正正銘みんな老女になったので

あの友がまさかと話もえてくる

趣味多彩少し身勝手過ぎないか

京都市 松川 杜的

何となく記念切手にある温み

居士大姉デートは三途の赤い橋

実行はともかくたてる旅プラン

百人一首のような恋もたまによし

男とは哀れなものよ濡れ落葉

京都市 都倉 求芽

散る花へ誘われて鳴る鐘ひとつ

散る花へ女は自画像ひとつもつ

のんのんとただ春風に包まれる

ひとりずつ三人が遊ぶ団地の子

人情のうすさへ怯えるマスケット

堺市 中川 滋雀

紙礫 勝負を急いだわけでない

塩まいてやりたいことが多すぎる

春臙ろ人生観がまた変り

味方にも敵にも妻はなりたがる

待合室いつもの顔という安堵

堺市 高橋 千万子

留守三日花満開に迎えられ

嫁に城ゆずる離れの地鎮祭

決断に血のつながりが汚なすぎ

用意万端花も実もありお待ちする

落し主二人茶の間に札一枚

守口市 羽原 静歩

幼稚園(二句)

幼稚園の終日仮面などはなし

父の日の父より長く父を知る

馬鹿一の心の底に神が澄み

ブランドで飾る女の隙だらけ

平成の代も雪舟の墨絵かな

今治市 越智 一水

内職を休めと花見誘われる

南国の風吸うてよし飲んでよし

洗濯岩 波を洗濯してるよう

砂風呂や生き埋めにされ嬉しがり

極楽へこのまま行けそう砂かけ湯

七尾市 松高 秀峰

母の日の母へ長距離電話鳴る

暗算の速い男で貯めていす

許されぬことを許して母の忍

焦る程一つのミスがミスを生み

花見客元祖と本家の旅土産

宝塚市 丸山 よし津

パチンコ屋孤独が欲しく音の中

離別する決め手言葉で語れない

すつきりしないハンパが多くなる時代

親しくても一線を引くおつき合い

駅からは遠いがうぐいす鳴く目覚め

西条市 片上 明水

内職の賃と比べるコーヒー代

ジェスチュアを蓄へ見せる蝶の羽根

生垣のまるさを丸く蝶が越え

絵馬堂へ黒髪を吊り仕合せか

金魚鉢置き場が家でみな違い

富田林市 藤田 泰子

敗者復活 花を咲かせたこぼれ種

コツコツと私を刻む夜の時計

遠近両用その中程にある死角

エプロンを外して頭切り替える

夫婦して失くした鍵を探してる

富田林市 田形 美緒

手の届く高さに咲いている桜

実らぬもいっそさばさは花吹雪

長男に進む時計を買っている

砂時計愛の告白手短に

春四月ゼンマイ一杯巻いておく

寝屋川市

柴田 英壬子

食餌療法のきついパンチへ荒れている

らんまんの桜をよそに細い食

しわなどは一笑に付しやせること

うるおいを枯らしたくないペンを執る

弁解は今夜ゆっくり飲んで聞く

寝屋川市

岸野 あやめ

タイミングさすが女将は褒め上手

上役の妻が見ている闇魔帳

ゲームセットで気づくそよ風

税務署へ行くのに古い服を選び

相続税われ関せずと団地の灯

高槻市

河瀬 芳子

ドライブフラワー昔語りが続きます

赦すものかと大根の首切り落す

愚かさを演じて生きてひとりたり

素直になろうなろうと思うほんのくぼ

万歳をした掌の後のまが持てぬ

高槻市

川島 颯云児

虫のいい話補聴器OFにする

末席の意見が的を突いてくる

聞こえない振りしてピンチ切り抜ける

檜山へ行く順番が近くなる

善人を保つ仮面が重すぎる

奈良県

長谷川 春蘭

息災の老いが見つめる庭椿
信楽の狸の傘に散る桜

春蘭の花芽数うる日ののどか

検査結果恙なかりし四月の陽

自動扉遅々と開閉春なかば

奈良県

田中 紀美代

潔癖症一度脳みそ洗いたい

面白い母ではみ出す子がいない

春さなな美人好みの風になる

ストレスを食って生きてるらしい妻

海菜の優しき色にはずむ妻

町田市

竹内 紫鏑

顔写真複写と共に恐くなり

腰痛をしのぐ起き方やってみせ

教授らの排号当てる校友誌

コンタクト拾わせ仲のよい月日

イヤホン垂れ吊革で若返る

高石市

浅野 房子

情け無用足手まといの絆絶つ

あの日からあなたの席は空けてある

いつ噴くか弱い男の火山脈

守れない約束をした花の冷え

愛憎はもう越えました花吹雪

藤井寺市

吉岡 美房

地に満ちて天に溢るる桜かな

菜の花の一畝残る造成地

白旗を掲げ逆転打をねらう
タレントの近所に住んでいる自慢
人間に定価をつけた初任給

岸和田市 植山武助

ワープロを始め雑用多くなる
無口な息子だまって孝行してくれる
先生が何人もいる話の輪
裏話聞いて真面目な嘘の顔
出来のよかつた順から孫の通知表

東大阪市 森下愛論

胃の中で泳いでいるのはストレスだ
盃を重ねる背中丸くなり
散り終えた花の生命のさりげなき
雨だれと木魚が交ざるご命日
美辞麗句並べて見合のお席です

高知県 赤川菊野

激動を生きたしわです白髪です
正論を吐いて孤独に甘んじる
失ってはじめて判る大切さ
誰がために生きる命か毛糸玉
寡婦として働き通した此の十指

岡山県 小林妻子

池の鯉今日の喪のことなぞ知らぬ
風消えた様に恩師の葬送る
涙なぞ見せなと言われても泣ける
インターバル上手い子供にしてやられ

大学を出てアドリブが上手くなる

茨木市 井上森生

銀婚の過去をけげんに指を折る
人情は八重のトンネル通り抜け
ほどほどがよい肩書も血圧も
坂道の坂の具合いを見て登る
一面の菜の花畑釈迦の声

出雲市 吉岡きみえ

針さびて男やもめに通せんぼ
重箱の隅に溜めてるプライバイシー
からたちの夜目にも白きロマン咲く
花びらを流し水子に逢わせしめ
ママごとの傷が意外に深かつた

十和田市 斉藤 効

新任地の人皆優し梅の花
校長の椅子に馴れるも新任地
作業着が好きでたまらぬ榎の殻
自己紹介隣が少し長過ぎて
先輩に追いつきました孫の数

静岡市 蘭田 獏 脊

停年後小さな虫も見えてくる
眼帯をされて舗道を斜に歩く
芽柳の僅かな影に陽を避けて
グルメには遠い味です離乳食
流されて中洲で柳春を知る

伊丹市 樫谷 寿馬

応援歌人それぞれの甲子園

花冷えへマフラー深くおでん食う

進学へ金属バットを買う躊躇

水虫と静かに対話する深夜

柳井市 弘津柳慶

土筆坊季節変調に周章たり

素足で下駄の感触を味わって

順番に足弟次々墓の人

お隣のウツ病へ神経使わされ

倉敷市 稲田豊作

精勤賞農夫は太陽から貰う

守銭奴と蔑む奴に金を借り

本心を明かそうなどとそれも嘘

正直で貧乏神に愛される

名古屋市 越村枯梢

老人後期迷い子札を売りにくる

グルメ悲し四季の花まで食べつくす

散り際にふと思ひ出す花言葉

コーヒー豆一つ転げていったきり

笠岡市 松本忠三

ご主人と奥様なんて柄でない

只という言葉に仕掛けがあるらしい

車座になり船頭が多くして

適当が嫌い困った性分

岡山県 川端柳子

戦争をたしかめた目が減っていく

心までうつす鏡を磨いている

若いほほえみ花になったり陽になったり

愛ゆたかやっぱりチューリップは赤に

寝屋川市 宮尾 あいき

風流かなこの犬花の道散歩

びっこ引く犬よお花も神経痛

早起きの蝶にタンポポ起されて

手折る気の指先アザミにさとされる

奈良市 天正千梢

一日生きたら一日余禄とする暮らし

見落しが多い足の早い旅人で

男にはだまされまいぞつけまつ毛

とは言うものの色は褪せ

高槻市 辻 白溪子

ひとり酒飲みたい事がある悩み

お値打ち品ですとバーゲン嘘を売る

診断書痛さにまでは触れていず

厄除けのお札が泣いてる事故現場

玉野市 小谷 仙山

濡れ落葉私に座る椅子がない

森の向うが見たくて辞書を引いて見る

病院まで押しかけて来る趣味の友

一日をうっかり老いの影法師

大和高田市 岸 本 豊平次

子が金で育つつもりの共稼ぎ

ラッシュアワー欠伸うつされうつつしたり

東大出東大出にしか釣り合わず

春の雨ひと雨ごとの山の色

今治市

矢野佳雲

草の芽の踏まれる覚悟出来ている

時計屋はいくつ鳴ろうと聞いてない

猿山に戻ると猿の芸が落ち

閉めて開け二人の仲は蝶番

唐津市

田口虹汀

春雨と言うけど濡れる齡じやない

春と言うのに女のプラグ濡れている

雷の義侠話が通夜に出る

もう一度騙されて見る親心

唐津市

仁部四郎

デパートのコロッケ五時になって買い

デパートへ着けば夫も元氣出し

デパートの食堂妻に友がいる

デパートを回って一つ春財布

唐津市

久保正敏

パトロンの合鍵鈴の音を殺す

誹謗にも耐えて放さぬドンの椅子

M寸の年金削る消費税

保釈金の出所訊かぬ裁判所

唐津市

筒井朴竜

吉野ヶ里太古の夢を掘り起す

吉野ヶ里俄ブームの考古学

立ち入るな札も此処其処蟻の列

大和から山門へ歴史夢拓け

和歌山市 堀端三男

色即是空和尚も酔うた花の下

紀元二千年に開けるカプセル埋めてある

手を離し目を離さない子の躰

別れ際のひと言いたく胸に棲む

和歌山市 牛尾緑良

ホワイトデー妻にも安いチョコレート

新しい視野確かめる哲学書

初つばめ何度も下見して帰る

無職なりパチンコの腕などをあげ

和歌山市 神平狂虎

亡父を捜して何処まで奔る花筏

行き先の識れない笹の舟に乗る

雨は優しく男を駄目にしてしまふ

花の季や命を越えていた情け

和歌山市 垂井千寿子

チューリップ楽しさだけを抱くような

天職と申うて農を守る腰

何となく悟りの心花吹雪

亡母に叱られている耳が鳴る

和歌山市 桜井千秀

ポロポロの切り札そろり出してくる

焚き火する海女は岬の風物詩

あや取りの紐に残っている絆

思いやり手枷足枷かも知れぬ

和歌山市 山川 克子

右左どちらに転んでも悩み

口紅を赤く過去を塗り遺す

そうですね柳の枝に学ぶもの

心にもシートベルトを忘れずに

米子市 小西 雄々

バラよりも花瓶の方を褒めておく

震度三別れ話が煮つまらぬ

ふくれてる顔みあたらぬ蟻の列

言い勝ったあとの寂しい日記書く

米子市 澤田 千春

古里の川のやさしさ持つ人で

閑のない植木屋さんで頑固です

染井吉野日本列島走りぬけ

峰はるか亡父の背がゆく消えてゆく

米子市 茂理 高代

善人の心の鍵はすぐはずれ

鐘一つ撞いて自分をとりもどす

鍵の束一つは赤い嘘が好き

叫んでる山彦だけは裏切らぬ

大阪市 西森 花村

恋敵商売敵にも死なれ

ありがとう友も私も喜寿米寿

政敵の楯張り込んだきました

何時見ても狒犬何も食べていず

大阪市 北勝 美

靴下の繕いさせる消費税

早口について行けない老いの耳

医者通い話相手が欲しいから

残業をせねば食えない時間給

大阪市 吐田 公一

悪友と呼べる身近な友が出来

定退という連休が怖くなる

もう一人の自分見つめる定休日

気短かな子で貧乏も俺に似る

大阪市 井上 白峰

十ヶ月振りに退院(二回)

ご指名が無くて三途で回れ右

凱旋の様に我が家へ迎えられ

忍の字を書く熟年の原稿紙

折れ釘は折れ釘なりの自己主張

大阪市 町田 達子

関西の水蓑荒す魚まで

頼まれた釣書へ一つ苦を増やし

自画像に少し明るい彩足そう

通り抜けの帰路は財布の通り抜け

島根県 西村 早苗

ネエネエと甘えた声で聞きたがる

チャンスがあつたが振られてばかり居る

良し悪しをはっきり言うてお気に入り

風呂上り眉毛をかいて居る化粧

島根県 榊原 秀子

依怙地さを許しかねてる木瓜の花
おすしなど如何ですかと山椒の芽
どっちみちあなたの声に負かされる
悲しみを少し追いやる桜草

鳥根県 石田 清泉

春一番遠くに聞いている炬燵
たばこ断つ誓いを破り胃を切られ
ワープロに過去の秘密を記しとく
老人控除なく三%支払わせ

鳥根県 松本 はるみ

てんてまりひらりと越えた水溜り
ときめきを胸にたたんだ花言葉
いやですと言えぬわたしは子供好き
アドリアの中で生れた名せりふ

羽曳野市 榎本 吐来

花便り去年の傷がまだ癒えず
リクルートの網にかからぬ半端者
詩人から酔漢になる花の下
したたかに残るいのちへ指を折る

羽曳野市 田中 隆二

金権に負けたらあかんお父さん
シナリオの通りに行かず途中下車
夫婦喧嘩の訳を知ってる夜の雨
もう一声あれば調子に乗れたのに

羽曳野市 吉川 寿美

数え唄十で終らぬ母の枷

隠しごと下手なわたしの猿芝居
なるようにしかならぬと思う木の枕
病みぬけた生命一つの重さかな

鳥取県 林 露杖

爛漫の花の息吹に月も酔う
柚人の唄万緑を唸らせる
あのときの必死の嘘が風化する
これからはおつりの如きいのちなり

鳥取県 新家 完司

たこやきの好きな味方で頼りない
白鳥になると思ってたが
右も左もお金の欲しい人ばかり
和菓子屋の店先で逢う春の彩

鳥取県 土橋 はるお

皆が寝てから一人相撲を取ってみる
鬼は外チャンと合鍵持っている
水虫を社長夫人も飼っている
姑さんの愚痴に音符をつけて解く

鳥取県 谷口 次男

片手間に生きているのかきょうも暮れ
頼まれてこの世にいるんじゃありません
砂山にダンブショベルがトグロ巻く
センセイも総理大臣も嘘ばかり

岸和田市 福浦 勝晴

気位が高くてパチンコこっそりと
銀めしの威信地に墜つコメ離れ

夏祭り素朴な味のかき氷
手形期日延期たのもう梅雨近し

岸和田市 古野 ひで

春ですぬ古稀にも古稀の物思い
満開の花へ心を開け放ち

咲き誇るスターは明日を見失う
隙ひとつ見せぬ老母の束ね髪

岸和田市 清野 こう

大ちゃんの引退花の咲く春に
車椅子押して花見の夫という

天国の師に語りかけ城祭り
卒業と入学年金飛ぶ出費

出雲市 園山 多賀子

春の泥足袋の汚れに病んでいる
象の鼻程の演技は真似られぬ

夢二の絵好きでコスモス種を蒔く
埴輪にも土の絆は深いはず

出雲市 久谷 まこと

おおっぴらに今日は許せるチョコレート
底辺で生きて明るい月がある

我が家には高嶺の花のコマーシャル
足早に歳を重ねる亡父の忌

姫路市 人見 翠記

間違つて話の進まぬ出会かな
健康を過信して翔ぶな翔ぶなと天の声

わが肚は人の悩みで膨れてる

お相手は分裂症だから悩まされ

瓜の蔓へ生らぬ茄子を責める親
嘘混ぜたCM猫も聞いた餌

赤鬼も舌抜けません四月馬鹿
消費税知らず桜花が咲き競う

箕面市 坪田 紅葉

思わぬにメッセージそえ胡蝶らん
親と子のきずな堅くてもろいもの

ふる里のなまりなつかし梅匂う
ここまでが自分の力とふと気づき

ぐみの実が熟れて婚期が訪れる
喜びも悲しみもある飾り窓

わだかまり流してくれる雨が降る
雨が降る昨日のことを言いながら

喪に服す庭に桜の花吹雪
下町の祈りが生きている地蔵

裏切りをおそれ本心ひめたまま
主なき庭にも春のたたずまい

苦の種がお腹に宿るいかず後家
のろし台忍者の里で今も生き

奥伊賀の忍者出そうな春がすみ
反戦の仲間が一人昇天す

尼崎市 奥山 美智子

東大阪市 崎山 美子

八尾市 山下 美津留

静岡市 渥美弧秀

バイテクの蘭輝いて師を囲む

詩と音楽暮らしのリズムリードする

梅雨晴れ間モーツアルトが躍る朝

若葉ゆれ視野一ぱいの散歩道

松山市 谷 信夫

南国土佐を寝言で歌った友の訃や

酢大豆を噛み血圧は気にしない

鯛焼く煙で非常ベルが鳴り

貯めるのは下手でつかうのも下手で

熊本市 永田俊子

春おぼろ記憶おぼろの数え唄

水中花 水の情に心解く

句読点打ちそこなつた春の風邪

風呂しきの妥協に温く包まれる

高槻市 竹内花代子

シヨルターバッグに焼芋詰めた待合せ

友と逢う楽しみカルチャーへ朝の靴

万歩計に歩数聴いてる別れざわ

市場籠回り道した火事現場

妻に歩を合せ桜の通り抜け

歯を抜いて父は淋しい顔になる

平成へ変りばえせぬ老夫婦

今日吉日家紋の袱紗出番来る

有田市 松井かなめ

ノブ受話器キルティンク着て春になり

試歩の杖桜満開酔うている

黄桜の味を忘れた長闘病

若布売り浜の言葉にある魅力

竹原市 岩本笑子

幸福の一步手前で深呼吸

しよもないことよと女房に言われ

手負いグマの心に恐れがあるばかり

無為無策妻が拍手をしてくれぬ

広島県 藤解静風

義理立てて足袋のうえから搔いてくれ

別れ話喫茶店から駅が見え

一言へ妻が仇の目に変る

戒名は酒呑童子になさいまし

藤井寺市 福元みのる

答えないそこにまるしたアンケート

地鎮祭すんで神主のコマーシャル

株下がり僧侶読経がつまりがち

頼みごととするならせわしい人が良い

倉敷市 田辺灸六

気の弱い人が女神に見放され

年輪は数えていない誕生日

年頃で見頃の桜あと僅か

妻の愛小言で聞かす齢となり

高知市 北川竹萌

空気とも思つた誤算大火傷
三猿になれず口先から走る
散る花の風情に酔うたいける口

広島県 田村新造

赤紙が来たので戦友会へ行く
戦友会臨時召集などと来る
後継ぎが出来てはためく武者のぼり
番付の順に汽車から降りて来る

吹田市 茂見よ志子

胸に飼う鬼がツノ出す低気圧
良い姑と嫌な姑住む腹の虫
煮つまつた頃に外野の衆を呼び
冠婚葬祭議員たらずも足が出る

黒石市 相馬一花

鯉のぼり女系家族の空に掲げ
酒呑みの詭弁は酔いの醒めるまで
書道塾へのへのもへじ巧くなる
目出し帽被つて預金見合わせる

弘前市 小寺花峯

裁かれてゐる農業に罪はない
考える時間が欲しいからトイレ
遅く戻るだけの嘘なら許される
ガンになる煙草を吸つて死んでみる

海南市 三宅保州

瓦より重いローンがある我が家

ほんとうの友だち妻の味方する
逃げ水に風の便りが浮いている
胃カメラは礼儀作法をわきまえぬ

大田市 藤田軒太楼

お互いの真意が解り先ず安心
殆どはついて流れた拍手です
気の乗らぬ客筋嫌な選挙戦
図書館で暫しデートの待ち合わせ

倉吉市 渡辺菩句

自動ドアあくとおバタリアン四人
欲の皮脱げるものなら脱いでます
表札はないけどここがお天気屋さん

羽曳野市 佐野白水

幼な馴染みに奇遇のバスマア
消費税を噛みしめているも駅弁
サクラ並木太陽の塔の裾模様

豊中市 上田登志実

気の毒だけれど是々非々割り切ろう
年甲斐もなく雑念が多すぎる
共通の話題ではずむOB会

貝塚市 行天千代

仏壇に一枝欲しい桜花
花時計三色すみれに風薫る
暖かい冬来る夏がおそろしい

弘前市 真喜内實

朝一番妻焚きつける真赤な火

ストレスの角見せるまいあせるまい

ミルクよりビールにはしゃぐ仔牛達

羽咋市

三宅ろ亭

田舎にも政治批判が口に出る

スポーツに青春賭ける子らの幸

目ところ白熱戦で洗われる

島根県

錦織文子

故里の老母お月さまと仲がよい

信心の坂道長し花の風

そんなことあったかしらと嬉しそう

島根県

藤原鈴江

証しなど要らぬ只今生きている

満天の星が私を離さない

病院のベッドも初夏の風もらう

島根県

松本文子

花の絵が書きたくなった自閉症

散る花も咲く花もあり無人駅

栄転も左遷も花に見送られ

島根県

小田川智重子

鶯が嬉しい朝にしてくれる

そして今あの日の姑の歳になり

孫がいて大変ですと嬉しそう

富田林市

松本今日子

たつぷりと使っておこうこの命

やすらぎと沈痛の渦渥繫絵図

スランプをじつと耐えてる水溜り

富田林市

新開千代女

肥後椿亡夫が特に愛でし花

木の芽あえ喜ぶ夫もういない

花一ぱい咲かせストレス散らしてる

富田林市

片岡智恵子

有頂天まわりに人の影見えす

先頭のメダカはうしろ振り向かず

初対面もう目の位置で負けている

富田林市

中西兼治郎

食い逃げが野球ルールに有る不思議

おこたから父はチャンネル権行使

かあさんに十円のうそ赤電話

大阪市

渡部さと美

夫婦げんか卒業しました豆ごはん

出世には遠く空きかんポイと捨て

思いがけぬ別れみかんの花が散り

大阪市

松尾柳右子

おむすびがこんななうまい花の下

消費税取らぬ貼り紙したのれん

昭和史に温い風ある園遊会

大阪市

板東倫子

お互いが唯我独尊の老夫婦

ぼっくり寺おばたりあんの大悲願

実感はないがボソボソ生きている

大阪市 宮下とし

和歌山県 天満三千代

出世には遠いが父の後をゆく

山露の消費税など知らん顔

年金へおそいかかった新学期

和歌山県 寺田裕美

芽が伸びる土の匂いで小糠雨

やせ細るつかいかい棒の年金が

検診にひっかかかってるまずい酒

和歌山県 青枝鉄治

合格へ又一枚の美田消え

のし袋開けばポロリ義理が落ち

お若いと言われムダ買う試着室

和歌山県 田中輝子

玄関に見馴れぬ靴の何事か

ひと声が欲しかったのに発車ベル

美女の皺少し拡大して見詰め

鳥取県 清水一保

死火山と言われ炎を抱いて生き

消費税進軍ラッパ吹いて来る

嫁にいびられ姑帰る家がない

鳥取県 羽津川公乃

肩書きの順に祝電披露され

倅せな陽射しを南窓がくれ

離婚歴男の骨はもろくなる

鳥取県 津村八重子

子と別居老いぬくぬくといと平和

乾杯の一杯だけでは本音出ず

ラブレター返事待つ内花も散り

大阪市 山田妙子

桜咲く嬉しい便り多かりき

満開へあの子もこの子も合格で

免許証叱られ上手になって来る

大阪市 松永すすむ

鮫鱈鍋久しぶりだよおとつあん

田舎者と言っあんだのくにはどこ

卓袱台に驚草の鉢三羽咲く

大阪市 富岡温子

望まれた自惚れが邪魔嫁姑

お互いのルールを守るべアを組み

神様も聞かれることと聞けぬこと

静岡市 永倉僕川

古傷に触れると貝になる女

跡継ぎをほしくて女燃えている

高笑い重い空気を軽くする

静岡市 安本晃授

ためらいの傷が急かせる女坂

火の川を渡る覚悟の女下駄

播いた種摘まねばならぬ神の前

漁火の燃える故郷の夏を恋う
出来心神よゆるして上げますか
意地悪な砂よ風紋消さないで

岸和田市 原 さよ子

孫達の笑いが満ちる春休み
捨てようと思う古着を又しまう
怠けたらあかんと天から師のお声

岸和田市 芳 地 狸 村

入選のよろこび弾んでくる手紙
返り咲きする特訓へにぎりめし
午後三時コーヒータイムのチューリップ

唐津市 浜 本 義 美

浜へ出て汀に風を見付けたり
春うららビールちよっぴり安くなり
とつおいつ妻の意見を一寸借り

唐津市 山 口 高 明

条件を付けて出戻り薦められ
満たされぬ女の指に光る宝石
スタンプを押せばこの町サヨウナラ

唐津市 浜 本 ち よ

文化住宅漢方薬が干されおり
福耳の女で福に遠く居る
代筆しのしも中身も貸す羽目に

岡山市 井 上 柳 五 郎

古傷もちよっぴり法螺の懐古談

栄光の道がだんだん重い枷
思い出に傷あとだけがついて来る

岡山市 花 田 たけ志

喝采へ義理の拍手は音がせぬ
見栄よりも欲に駆られてさらす恥
ガタガタのレールに乗った消費税

岡山県 荻 野 鮫 虎 狼

老人の話へ娘無関心
負け犬となり三度目の職に就き
福財布他人の金を当てにする

岡山県 二 宗 吟 平

九十が近い地球のよく回り
菊の間でほのぼのとした夢をみる
お早うさんむっつりの口開けさせる

岡山県 山 本 玉 恵

本音ころころ転び出て来る花の下
裏話の方へかたむく風の音
利口にもなれずさりとてバカでなし

岡山県 矢 内 寿 恵 子

耕花さん追悼句(二句)

御浄土の句座へいざなう花あらし
極楽の句座の笑いが聞こえそう
輪廻とや喜劇悲劇の彩模様

米子市 白 根 ふ み

まっ白な皿にこだわる苺です

漁火は岬のあかり信じきる
向い風ライバルの帆がふくれたす

米子市 金山夕子

面白い話になると聞く耳

泣き事は言わずに鐘を響かせる

いい天気鬼の枕も干しましょう

米子市 小村てい子

逢いたいと言う手紙くる木の芽あえ

修羅ひとつどこまで抱いてゆく気かよ

逃げるのびた女だろわか不如帰

出雲市 板垣夢酔

パンザイを聞いた昔の無人駅

炊飯器わが家を今日もなごませる

墓地買った途端頭痛癒えてくる

出雲市 石倉芙佐子

悶々と愛の抜け殻捨てきれぬ

いさぎよく脱皮をせねば春はゆく

シグナルは赤軽い眩暈におそわれる

出雲市 小玉満江

忘れ得ぬ人あり桜散りいそぐ

言うべきを決心した日仮面ぬぐ

疲れても横になれない武者人形

出雲市 園山良子

角砂糖こじれ話の中で溶け

結局は起きねばならぬ鍋の音

アルミ貨の少し気取って消費税

出雲市 小白金房子

草焼きの匂い日暮れの風をよぶ

聞き上手話上手な春こたつ

沈丁花匂う亡父の七回忌

姫路市 大原葉香

肩書きを捨てたらうまいホルモン屋

車いすピカピカ泣いてなどおれぬ

腰ひもの数で花嫁出来上り

姫路市 都里遊光

精神科で泣くだけ泣いて気が晴れる

遠く遠く見つめ一人の孤に籠る

愛らしいあんたがなんで木瓜の花

神戸市 山口美穂

蝶の舞春ののどかさ演出す

口喧嘩忘れて老母娘お茶にする

ユニークな人だと敬遠されている

神戸市 仲 どんたく

清濁を合せて飲めば胃の謀反

通夜の座の仏のこのこ輪にはいり

一票へゲートボールも相いつとめ

寝屋川市 平松 かつみ

お大事にしてます保険の無い夫

似た者の夫婦がすすのお粥さん
一円の出番待ってたわけなし

寝屋川市 堀江光子

雛の席おしやまな声を取りしきり

燕来て弾みのついた旅心

終着は椿の駅の縄電車

豊中市 吉田 あずき

再会に過去はいらない今でいい

喜びに隣の前も掃きに行く

相席のバッグブランド負けており

豊中市 辻川 慶子

さりげなく好きと言われた四月馬鹿

火葬場の桜ちりぢり花の雨

急かされる返事があした又あした

倉吉市 野中 御前

ゆく雲と野原でたべるにぎり飯

顔配るむこう三軒両隣

主婦の座をしばし忘れる旅の宿

諫早市 原田メイシユン

たんぼぼもれんげも咲かぬ道になり

年度末道路工事は花ざかり

思春期へ叱る言葉を考える

西宮市 瀬尾 六郎太

豊かなり心の豊か尚大事

お隣は何する人ぞ知っておこ

情なやはした金にてリクルート

土佐市 中内 朱坊

休日のない母さんの束ね髪

お別れの涙出合いも花の下

藤の花咲いて花見も忙しい

竹原市 石原 淑子

春の曙体操始めてみましたの

廃屋になったは知らずチューリップ

赤い花心に一輪咲きつづけ

川西市 松本 ただし

株高下足下の梯子外される

ハードルがまだ待っている放れ駒

菜の花の道を歩いてニユータウン

奈良県 宮川 古都路

耳うちはふすまの影で胸さわぎ

朗らかに集まる老いの福祉会

地下鉄へ地上の雨にぬれて来る

守口市 森川 まさお

雨の日の桜がよいとガイド言う

茹玉子駅の時計が二時を指す

ほめられてまた持ち直す赤い箸

竹原市 信本 博子

アングルを変えさせた日の黄水仙

遣唐使船港にロマン置いて去る

オンリーユークすぐらわれる君子蘭

和泉市 西岡 洛醉

レモンティー一六十一歳皺がある

月を背によいしょと老いの職帰る

加賀市 細呂木 魯 木

伝説の謎解きもせず言い伝え

補聴器を掛けて雑音倍に聞く
日和よし桜で延びる万歩計

岡山県 池 田 半 仙

謎解きへ先入観がじやまをする

鳥取県 森 田 布 堂

苦の娑婆に子だけ残した事故悲惨

不意の客野草が応援してくれる
ピンチになると父の絆が浮上する

米子市 川 上 よ 子

次々に秘密がばれて撒く波紋

鳥取県 さえき や え

お見合いの苺がふいにしゃべり出す

桜並木速度落した運転手
来年の夜桜約し散会す

守口市 結 城 君 子

日曜は妻のさかなになつてやる

鳥取県 乾 喜 与 志

年金を受け取りに足はずませて

約束をしたのにあっち向いたまま
昨日春今日冬戻るお水取り

河内長野市 植 村 喜 代

春闘にゆけないアルバイトしてる

大阪市 横 山 為 子

公園の鳩もはなやぐ会話きく

一人ひとりの自画像を抱くクラス会
日曜日家族全員粗大ごみ

倉吉市 淡 路 ゆ り 子

空気のような貴男の存在忘れがち

大阪市 北 山 悟 郎

君が代を受け継ぎ反対ある世論

いんぎんに最後の客は見送られ
知られてはならぬ病名口に出し

茨木市 堀 良 江

善人が何の科なのか眠れない

大阪市 塩 田 新 一 郎

マンウーマンこれがドラマの種となり

陽の光あまねし春は春となり
絵心のきざせば花に花ごころ

吹田市 栗 谷 春 子

孫の守りもう化けられない狸

岡山県 岩 道 博 友

明日がある希望を持って注射打つ

あんな事もあったと父母は娘を思い
冬の夜の岬の姿祖父に似る

奈良市 米 田 恭 昌

能弁な女が邪魔な美術展

和歌山市 山 田 高 夫

椅子とりに虎視眈々の平社員
ヤジロベエ支える父の太い指

箕面市 椎江清芳

街角の易に迷いの手を開き
金魚鉢一匹だけの淋しい眼

豊中市 一瀬福一

かいつぶり一羽潜れば一羽浮き
引つ張れば逆さに転ぶ毛糸玉

姫路市 中塚遊峰

掌を合わす母の姿がまな裏に
体力は弱って来ても口達者

東京都 吉川一郎

ずる休み電話の嘘が胃にたまる
目と耳と足とハートで記事をか

岡山県 直原七面山

灯を消して気を静め
無造作に生きて来て

お願い

- 一、本社同人の方は、「川柳塔」欄に毎月、必ず出句しましょう。
- 一、出句締切日(毎月15日)を厳守し、所定の「川柳塔用箋」を使いましょう。

川柳塔社編集部

第4回川柳塔勉強会

瀬戸大橋・四国と道後温泉

とき 7月9・10・11日(2泊3日)
日程

- ・9日(日) 記念川柳大会後、大阪または神戸港から乗船(船中泊)
- ・10日(月) 松山港からバスで松山市内観光(松山城・石手寺・子規堂)、道後温泉古涌園で宿泊
- ・11日(火) 観音寺琴弾公園から琴平へ、坂出からマリノライナーで瀬戸大橋を観光、岡山から(ひかり6号)で新大阪へ

勉強会 川柳談義(船中)句会(宿舎)

兼題 船・坊ちゃん 囀目吟(各3句)

経費 約三五、〇〇〇円(交通費・懇親会
宿泊費・昼食代など)

定員 五〇名(先着順)

申込 川柳塔社事務所へ

主催 川柳塔社

自選集

黒川紫香

人も犬も黙々散步する野原
嫁に行く姉から父を頼まれる
大声の父が迷い子になっている
歩兵とは悲しきものよ成れば死ぬ
つけ黒子人の噂を聞きたがる

小出智子

友達も子に孝行をしてなさる
迷信と割り切ってから歩きだす
庭掃除ぐらいはさせてもらいます
左の耳に変な噂がこびりつく
笑ってる顔の写真が見当らぬ

小林由多香

中流にくらしだんだん腹が出る
パチンコに凝って息子に叱られた
肩書の重さ小回りできかねる
ひよっこりと顔出し痛い風に合い
左遷地の税金少し安かった

児島与呂志

賞状の昭和をむなしくするなかれ
のれんもう守れぬビルを高くする
過去帳の朱を知っている瞳が許す
子放れの出来ぬ女の預金帳
孫からも嫌われてるのに買ってやり

工藤甲吉

友情のしるし黄砂が飛んでくる
逆風の中で奥歯を噛みしめる
よいこらしよ老人無料乗車券
妻の忌へたつぷり水を供えたり
人間が面白くなる花の山

大矢十郎

高官は皆恐ろしい人と知る
ふと淋しゲートボールに誘われて
大臣の首へ当然顔が来る
敬老日どこに敬う人がいる
二重では足らぬ人格座禅くむ

一枝のさくらをもらう

まんかいの花へひと部屋閉めておく
岬まわれば独断の海になる
喜んでくれている顔とは限らない
香水の瓶にわびしく陽があたる

中田白李さん逝く

ふるき柳友白い李にうずまれる

正 本 水 客

夢中で積んだ嶺で目覚めた天の声

有 働 芳 仙

人の上に人をお金が作りあげ
振り出しに戻り賽コロ妻と振り
日の丸が日本の空を忘れかけ
トンネルを抜けても抜けても雲がある
親馬鹿を積んで終うと呆け始め

藤 村 女

金 井 文 秋

季節ぼけの野菜がいつももある八百屋

健康がおいしいものにする粗食

田舎者とは思っていない大阪弁

花屋より遅いがうちもやつと咲き

渡り鳥平和使節の貌で来る

八 木 千 代

ローカル線れんげの花に窓を開け
忘れたい事あり女のひとり旅
ふる里の山の青さと人の情
鈍行でよし人生の長い旅
夢で逢う母にまめだと励まされ

山 内 静 水

種風船の季節がやってきましたよ

笛太鼓 風船買いに面買いに

お祭りが続く蛇口を光らせる

蛇口からノーといわれたことがない

そして変わらぬ朝をしずかに炊いている

野 村 太 茂 津

春探る暑からず寒からず
土のついた箱留守へ置いてある
山畑で食う弁当に散る桜
いまやつと十年鬼に付き合つて
やれ秘書が妻がと政治家のたまわく

本 田 恵 二 朗

琴線に響かぬ依怙地アドバイス

ありがたく握り潰したアドバイス

先入観で批判されてる立ち眩み

消化して効かねば直ぐに胃を洗う

表あり裏あり金は魔物めく
山頭火彼も変人かも知れず
無欲淡々ぐつすり眠る術おぼえ
一と吹きてローソク消して達者翁
鼻唄で作句街道漫歩する

むらくも四十年

感謝感激 言葉にならずひとしづく

舞い終る神楽は若い顔のぞく

金の成る木を裏口からもらう

審議拒否歳費日給改正案

世相悪へにほん気質見あたらす

栄転も左遷も同じ酒さくら
月原宵明

まつとうな仲と思えぬ伝言板

藪椿咲かせ恩師は老い給い

借金という実感がないローン

鉛筆と消ゴムが好き主義が無い

還る日へ木陰やさしき沙羅双樹

母さんのおんなを愛す薄化粧
水粉千翁

振り向かぬ輪廻の遠く近く消え

鳥の歌春の笑顔にとどきます

松園をめくればいのち語りかけ

大ふぐり人も花より実が大事

湖の雨を水底から見たら
橘高薫風

悼 土居耕花さん

藤の花わが背わが妹子死語ならす

白黒の次の世へこそ立たせけれ

高鷲亜純さんを悼む

藤井明朗

初代川柳二〇〇年忌

奉納作品募集のご案内

奉納作品 一句 (旧作品可)

課題 各題(各選者) 二句 同一作品(未発表作品)

「川」 山田良行 野村圭佑

「無」 磯野いさむ 渡邊蓮夫

「芽」 吉岡龍城 越後黙朗

(各題・字結び・読み込み・表現自由)

応募方法 便箋型(B5)または同型の原稿用紙に各題・

各選者別に各二句・無記名

奉納作品・一句は、住所・氏名記入のこと

応募料 一口一、〇〇〇円(発表誌呈)

お一人で何口でも可(作品の応募ができます)

応募料(定額小為か現金)作品に同封

締切 平成元年八月末日

投句先 〒190 東京都立川市幸町四一五二一―一十一

賞 六―四〇二 竹本方 川柳人協会川柳忌係宛

課題・各選者の特選一句、準特選五句に川

柳二〇〇年忌特製記念品贈呈

●雑詠(全句) 課題(入選句)

竜宝寺(初代川柳・菩提寺)に奉納されます。

主催 川柳人協会

後援 日本川柳協会

— 同人吟

秀句鑑賞

— 前月号から

田中正坊

春の雪絵になりたくてなりたくて

小池 しげお

冬の日の晴天に雪を舞わせる風花は美しいが、春の淡雪もまたなかなか風情があるものです。暖冬でほとんど雪が見られなかった今年だけに、しげおさんの心象風景に降った春の雪を樂しませていただきました。

春の海沖へ沖へと漕ぎ出でん

小出 智子

人を寄せつけない冬の海とちがって、おだやかな春の海を見ていると、はるか水平線の彼方まで行ってみたいような気がします。私にとって大先輩の智子さんの新しい船出を祝って、あえて「自選集」から拾いました。

羅漢さま消費税をどない思わはる

松川 杜的

ほんとうにアレ、腹が立ちますね。買物をしてレジで金を払う段になると、合計額にポイントとパーセントを掛け、あたりまえのよう

に請求される。誰彼となしにつかまえ、「どない思わはる」とはやきたくもなりません。言うだけは言わして貰う一円貨

中川 滋雀

そこでいちばん怒ってるのは一円玉。今までは無用物扱いにしておきながら、さあ釣銭に困るとなるとチャホヤする。人間とは勝手なものだが、その勝手の最たるヤカラにいずれ一泡吹かせてやりましょう。

父ありき観艦式と特高と

江城 修史

芦屋の山手の家のペランダから、阪神沖に観艦式のため勢ぞろいした「帝国艦隊」を見た思い出があります。そして間もなく警視庁はじめ全国の警察に、特高（特別高等警察）が設けられたことを覚えていきます。

あるだけの勇氣使って生きている

新家 完司

そうなんですよ、男はみんな。なんて言ったら女性のみなさんに叱られるかしら。でもこれはやっぱり男の句ですね。女性は女性らしい、男性は男性らしい川柳もあつていいですね。「平成元年」の刊行おめでとつ。

留守番電話話せば台詞のようになり

岸本 豊平次

実は私もアレ苦手です。ゆっくりと機械にしゃべられると、こちらの方があわててしまいい、ガチャンと電話を切ったことも。思い直して受話器をとり、話すというよりも吹き込

む調子で用件を言う。正に実感の句です。老夫婦どちらからともなく眠る

松本 忠三

真珠婚、珊瑚婚も過ぎ、ほとんど一日中、顔を合わせている夫婦にとつては、もう寝物語の話題もない。今日もまた静かな一日が終わって寝に就く、満ち足りた老夫婦の生活が目に浮かぶようです。

睦まじく夫婦別々の事想う

田中 紀美代

それが夫婦というものです。やはり男と女、お互いに分かりきっているようできて、意外に分かかっていない。想いもまた別々だが仲は良い。もし二人がいつもおんなじことを考えているとすると気味悪いですよ。

露の世と思えば嘘も美しい

岸野 あやめ

嘘をついた大臣が次々とやめ、とうとう親玉の竹下総理も。こんな嘘はいかんが、生きていくために、嘘をつかなかつた人は一人でもいるでしょうか。その中には美しい嘘もあはります。それが人の世です。

ジャンケンポン勝つても負けても何もなし

奥山 美智子

何かを決める時、ジャンケンする。誰がいつ考へ出したことでしょうか。長い人生道中では、右か左かの決着を迫られる場面があるかも知れないが、どっちへ転んでも所詮、人は露のように消えていくものなのです。

川柳の群像

山田 祥園

東野 大八

名古屋中心の中部川柳界の草分けは、中京川柳社で、大曾根大吉、岡本映系、齋藤旭映らで明治43年に『柳』という柳誌が発刊され、大正元年『鯨鋒』と改題された。

この『鯨鋒』を母胎に鈴木可香の『紫』が昭和3年から同9年まで、丹羽のぼるの『草薙』が昭和9年から同16年まで、加藤彩華の『あかつき』が昭和21年から同26年まで活躍した。その中には新興川柳系の第一号誌として森田一二の『新生』が大正11年に発刊、田中五呂八の『氷原』がこのあとに続いたのだが、『新生』は数字で休刊、昭和六年には平野扶桑らの名古屋番傘川柳会も生れている。

由来、名古屋柳壇は三河、尾張の歴史的風土性によるものか、排他的な保守性に徹し、

一本筋の通った川柳の土地柄を形成したこと

はよく知られている。そのカナメの役割を果たしたのが『鯨鋒』であった。伝統純正川柳を掲げた大吉、映系らによって、いわゆる『鯨鋒調』と地元で呼ばれた平板な作品傾向であったが、編集の主調はむしろ古川柳研究にあり、阪井久良伎、今井卯木、西原柳雨、岡田三面子はじめ井上剣花坊、西田当百、椋元紋太、岸本水府、前田雀郎等の東西の指導者たちから惜しみなき支援をうけ、鯨鋒の中京川柳社としての存在価値は相当なものであり、

全国の柳界から大きな注目を浴びていた。しかし昭和七年主宰者、大吉の死去によってその追悼会を期に、『柳』以来二十六年間の中京川柳社の社史を『鯨鋒』二十周年記念号

によって終止符をうった。(齋藤旭映著『中京川柳社26年史』)。

右の中京川柳社大山支部を昭和5年に設置したが、荒田練屋丁こと山田有町、のちの山田祥園である。練屋丁は彼が居住していた町名で、有町は鶴の町の意である。

山田祥園は本名庄一。明治38年9月25日愛知県犬山市生れ。昭和2年ごろから『鯨鋒』に投句。昭和10年ごろ『ふあうすと』同人に推され、紋太に師事した。

昭和21年2月『すげ笠川柳社』を創立、総合誌月刊『すげ笠』を発行した。表紙題字は水府で、表紙は二色刷り20頁活版。カストリ雑誌、タブロイド版日刊紙時代の紙不足の中を「敢然」と毎号三千部を印刷し、日販を通じて全国の主要駅にも並べた(すげ笠同人稲垣正穂ふ誌祥園悼文)というのだから相当なものだ。祥園の家業は戦前が印刷業、戦後からは日刊新聞販売店であったことが幸いしたようだ。つまり日刊新聞社が使用する輪転機用巻紙の剝損紙の廃紙活用によるものがそれ。

ともあれ『すげ笠』誌の誌面構成も、市販に耐えるだけの強力な布陣をとっていた。すなわち染句苑椋元紋太選、人間抄岸本水府選、百花園西島○丸選、新風集川上三太郎選、雀

郎点前田雀郎選、明眉集伊志田孝三郎選の諸大家を動員していたことだ。これには初めに麻生路郎も参加していたが、路郎は「こんな女郎の張り店みたいなものに出たくない」(筆者あて書簡)と降りている。

終戦一年後そこそこに、多大の犠牲を払ってこれだけのものを発行したことは偉とするに十分なものがあろう。

「祥園さんが理想に向かって思う存分働けたのは家族の理解と地元の人諸氏の協力があったからで、その上初期には三重県上野の八木辰子氏、後期には東京の三条信子氏の御援助が有って随分励まされていたらしい。そして昭和31年通巻百二十八号を以って『すげ笠』を初期の目的を達したから、と廃刊してしまった」(稲垣正穂博文)。

戦後の動乱期に便乗した柳界制覇の野望？

といった風評が一部柳誌に流れたが、

「そうとられても仕方がないが、中央A級柳誌が再建軌道に乗るまでのそれはつなぎにすぎない。だいたいそれた野心などはない」と筆者も直接祥園から聞いている。これが本

意であることは、川上三太郎が「祥園というのはエライ男だ」ともらしている言葉も筆者はじかに耳にしている。

『すげ笠』はその本業として、昭和21年10月往時二万にも満たぬ大山町(市制以前)で、盛大な全国川柳大会を開いている。参加者百三十余人、投句者六十余人という当時としては破天荒の催しを断行している。東西著名柳人がごとごとく参加し、食糧難と交通不足のにもめげず、これだけのことを断行した勇氣と決断はけだし相当なものだ。「このとき昼食に出たイモの味はいまだに忘れられない」と筆者も数人の人から聞いている。

このあと昭和22年にも名古屋市でも全国大会を開催したほか、祥園は名古屋短詩型文学祭や川柳講演、ヤング対象の川柳講座を設け、JOCKのラジオ柳壇、名古屋新聞や新愛知新聞等の川柳欄、川柳文芸欄を担当、岐阜、愛知両県の国立療養所等の川柳慰問を熱心に続けている。

『すげ笠』は同人制をとらず、会員制名目の購読料で、いわゆる多柳誌集約柳誌一元化が趣旨であったことが、各大家連の選をあてることがになったが、世相の落ち着きと柳界の環境整備につれ、水府、○丸、雀郎らがはずれて次第に廃刊に向っていたようだ。

だが、この誌上で各大家たちの柳論、柳文で賑わったなかに、特に柳界を席巻した柳

論に石原青竜刀が昭和22年夏の誌上における川柳非詩論は多大の反響を呼び起こし、沈滞した柳界に大いに活況を与えた。

この非詩論は、川柳は非詩的諷刺文学として、穿ちを本質とする否定的批判性によって俳句の肯定的詠嘆性と区別されなければならぬというもので、戦後、柳界に盛んになりつつあった柳俳無差別論に一石を投じ、これが他面、柳俳論争の口火となった。この論旨が柳人であり、同時に俳人であった青竜刀の立場を鮮明にした最初のエッセイであり、のち個人誌「諷詩人」を主宰する。

祥園は昭和50年ごろから体調を崩し、昭和61年5月24日死去。享年81。柳法院祥園。

山田祥園川柳集『微笑』(昭44)があり、そのあとがきで「私は学もなく才もない平凡な一市井人である。それが川柳にとりつかれてかれこれ四十年にもなる」と淡々と綴っているが、その川柳人半世紀余は終始、初心の頃の鯨鋒調で一貫している。

深川が一つ踊れて馳り出され 祥園の句碑が犬山市に61年建立されている。

★次回は「野口北羊」

誹風柳多留廿六篇研究

(四十二丁〜四十二丁)

石田晋一・南 得二・小野真孝
本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木 黄・多田 光

故岡田 甫

701 おほろ月壁へ立テかけ下女ハぬり

石田晋一「朧月」はくもった鏡で、下女の化粧はそんな鏡を立てるものもないので、(手鏡のようなものか)、壁に立て掛けてするといふのではないか。

南〓贊

朧夜を加賀ものが名月にする 第四二六
日しよくのよふな鏡で下女作り 四三三三

多田〓贊

702 お袋が出て神さびる神楽堂

石田晋一「神さびる」は、本来神々しいとい

う意味だが、ここでは「寂しい」の意を含ませている。

若い子が踊る場合は客も多いが、その子のお袋が踊ると、神々しいかも知れないが、客もめつさり減るの意。

神さびるはづ此頃はば、あ舞 一三一九
多田〓贊

703 真わたて首を包れるはつかしき

石田晋一「真綿で首を締める」を逆に使った句。婚礼で嫁がかぶる丸綿を言う。「真綿で首」とおそろしい事を言っかわした句。

丸綿をきせせぬと顔がやき切れる 傍一八

多田〓贊

704 めかけのは干シふへのする土用干シ

石田晋一普通は干すとへるが、妾の場合は土用干しで、その品のたらぬことを申し増やしてもらうため、こんな言葉はないが、「干増」ということになる。そんな意味の句と思う。

南〓贊。妾の場合は、遠慮とねだり下手で、新調が少なく、または全羨なく、減る一方であるのに較べて妾はねだり上手で、どんどん新調して土用干のたびに衣裳が増えているというところ。「干減」の語はあっても「干ふえ」は造語である。

干しへりが立ツとハ姫のいしやうなり

明七智2

多田〓贊。

705 俄雨子のある處と引キ合せ

石田晋〓本句、種々な状況が考えられるように思われる。

(A) おひさしぶりでございます。少し雨やどりさせて下さい。それからこれが私の嫁で、子もございます。

(B) 雨やどりさせている家で嫁を見せている状況。

その他考えられるかも知れないが、いわゆる「動く句」であろう。

本多〓いずれの場合ともとれる。

多田〓私としては(B)と取りたいが、(A)も十分考えられる。

四十二丁

706 桐に巢が出来て御家中あんど也

南〓「桐」は琴として奥様とつながって正室を、「巢が出来て」は巢籠りで妊娠の意をあらわす。

句意は、正室の御懐胎、これが男児出生となれば嫡出子で文句のない御世継が定まり、

誠にお家安泰、万々歳であつて、家臣一同そろつてはつと安堵といふところ。

桐に実が入つて安堵の一家中 四七三五

桐に実のやつたら出来るおめでたさ 二七13

多田〓「桐に巢が出来」は、鳳凰の宿ることを意味し、奥様の懐妊を暗示。

707 歌人八居ながら一チ城持こたへ

南〓関ヶ原合戦前、家康の上杉攻めの間の出来事を詠んだ句。歌人細川幽斎が古今伝授者であり、そのために勅命によつて城攻めの囲いが解かれ、留守を預かつた田辺の城を持ちこたえたということ。

本句は、「歌人は居ながら名所を知る」の諺を踏まえての句。

歌人八居ながら日ニ焼けて空をつき 三四二二

鈴木〓贊。

哥をよまないと火せめにあふ所 天八・十二・五

多田〓同。

708 桃の花見い〜張飛引ツかける

南〓「桃の花」と「張飛」で、本句は「三国志」第一回「桃の園に、宴して豪傑三たり義を結び」の場面。

張飛には元來、酒乱の癖あり、種々の失敗談多く、そのために不慮の死にあつた程の酒豪、桃園の宴でも、桃の花を見い見いさぞ痛飲したであらうとのこと。

「引ツかける」は俗にいう酒を引ツかけるの略。

たのみある中の酒宴ハ桃の下 三三39

約束が済とどぶ六張飛吞ミ 八五12

石田晋〓贊。「普通の人なら桜の下で引ツかけるのだが」の意味含まれるか。

多田〓同右。

西日本文字放送作品募集

題「雨」 森中恵美子選

3句 縮切 6月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20

大手前ウサミビル3階

西日本文字放送 川柳係

水煙抄

黒川紫香選

富山市 舟渡 杏花

中途半端な枝は選ばぬかたつむり
カルチャーにあやつられてる余命表
子のイメージひっそり抱いた遍路笠
ブレーキが利かないままの子沢山
取っておきの声で詐欺師の谷渡り

兵庫県 森 脇 和 子

泣けるのはあなたの故と困らせる
吹き溜りつついてみたい好奇心
ほほえみを刻んだ仮面持っている
仏飯を大盛りにして亡夫の忌
遠まわりする楽しさよ花の道

今治市 野 村 京 子

影武者の方が修羅場の貌に合い
売れない絵画鋳でとめてある故郷
花明り女の心聞きたがる
花占い胸に消せない人が住む
愛はまだ序章会話が途切れがち

静岡市 沢 田 き ん

電話口時には嫁と間違われ
和服着て春一番にいじめられ
腰紐で女を見せる着付け技
お早ようの一言今日が動き出す
しとしとと降る雨もよし再会日

広島市 流 奈 美 子

若竹の青き息吹きよサクラサク
新風を入れて惰性の目を醒ます
埋立地こころ辺りがもと港
豆腐屋のラッパ時報のように来る
タイミングずれて頼みが切り出せず

八尾市 高 杉 千 歩

試すのに何ためろうて虹の帯
クイズ解答無職五十と定めてある
歯車の合わぬ日もあり花茨
修羅抱いて何所まで歩む女坂
ていねいに噂の種も掃いて去に

名古屋市 藤井高子

小鳥ほろろと森の詩人を呼び醒ます
いいことがあって星座もみな晴れる
恋をしていなさるとかで美しい

勝算があつてシグナル待つゆとり
隊列を組むと天狗の鼻が邪魔

徳島市 宮武まつ女

花いちもんめ緩むいのちにある重さ
修羅ひとつ蹴つてたましい緩む風

内幕はどうあれ根性には負ける

この土地へ来て聞く鐘のあたたかさ
腹のうち読んで吐息がこぼれ出る

和歌山市 堀畑靖子

大安の日は空欄のない手帳

消去ボタン押して一からやり直す

レジを打つ指が愚痴聞く消費税

愛少し冷めたと思う弁当箱

嫁さんが欲しいと薬買いにきて

西宮市 秋元てる

出遅れも気にはならない葱ぼうず

跡始末物わかりいい叔父がいる

平和平和平和を飾りにしないよう

野いばらの花で飾ろう秘めた恋

胸飾る豪華な花に立ちくらみ

熊本県 大川幸子

心配で嫌われながらついて行く

汽車の窓まだハンカチがゆれている

一病とどうやら仲良く暮らしてる

見晴らしの良さで淋しさまぎらわす

夢で見た彼と違ったプロフィール

鳥取市 小谷美つ千

少年の目が悲しみを忘れさせ

ネオンの波が気楽な恋をけしかける

皿割れて今日のストレスひとつ消え

枝折戸をくぐり抜けると花に逢う

四十路坂まだまだ欲とふたりづれ

長岡京市 木本如洲

屑籠に言葉を今日も捨てている

夕焼けの花壇に午後の絵が落ちる

抒情の海曇らせて雪が降る

知りすぎた街を走って鬼に逢う

よりみちをしてスポーツ紙買うてゆく

大阪市 上田柳影

下心コーヒー茶碗に浮いている

長患いはいやと糟糠の妻が言う

それとなく分るカルテの字が寒い

肩パット強い男を待っている

涙止める喪服の帯は固い目に

熊本市 宇野昭代

逢いに行く鏡きれいと言ってほし

毛虫にもなれず卵のまま焼かれ

世辞言えぬ夫で記念日忘れない

物売りが覗いただけで通り過ぎ
思い切り蛇口を開けて憂さ晴らす

尼崎市 野瀬昌子

石一つ投げた波紋が大きすぎ
計算がどう狂ったか子沢山

病葉の落ちて青葉の沁みる朝
チヨコマカと動く孫です達者です
根気よく同じ話を聞く名医

伊丹市 山崎君子

友情にすぎる電話は話し中
また一つ情を貰う旅の宿

自画像に若さが欲しい雨の夜
玉の興夢半分で暮してゐる

兵庫県 酒井靖子

能面が恐いと泣いた日を想う
やっぱりと言わずに済んだ赤電話
ご破算が恐い笑って同意する

雑巾をきつく絞って自我を捨て
孤に生きる女にもある設計図

島根県 高野律子

吹き抜けた風が残した安堵感
嬉しさが今日の色紙の彩に出る
身内でも本音は少し残します

春が来たひびある皿は捨てました
苦労した老母は黙して笑ってる

懸命に春を咲いてる黄水仙

一回り子守りして来た無料パス
京都府 松川芳子

薬害のテレビへ薬恐怖性
ところと煮つめて女策を練る
踏張った過去に優しい影が無い

虚と実の谷間で噂ゆれ動く

岡山県 千原理恵

病床へ励ます固い握手する
想い出がくるくる回る走馬燈
頂いた序文を胸にひしと抱く

未完の句集柩に贈る悲しい日
祭壇に輝く受賞の金メダル

久留米市 鶴久百万両

花吹雪の下で昭和を語ろうか
人の上に人をつくった罪に哭く

草津 伊豆 熱海と派手な恋の旅
逆縁のはなしに哭いたのは乳房
点鬼簿の末尾は俺の名で締める

吹田市 井上照子

初恋の先生喜寿の知らせ来る
答弁は肩書でする赤絨毯
オヤスミと切った電話にある未練

狙のリズムが誘うリバイバル
発車ベル再会約す声切れる

京都市 木村たけし
妻の言う通りに走り森を出る

石段に献燈つづく花曇り
毛糸玉にからまれ猫が逃げてゆく
もどり寒昼餉は餅を焼いている

出雲市 金村青湖

緑摘む手からこぼれる童唄
花散つて肩凝る職の花冷えよ
追伸の方で言いたいことにふれ
寝返れば昼の痛みが腰に住む

吹田市 山本希久子

敗者復活一円玉が廻り
妻だけに手紙来ている日々平和
あの世へは順不同ですかきつばた
だんだんと短かくなつた母の文

熊本県 高野宵草

懸命に仕事をしたと寝ておもう
うらぶれた花ゴミ箱によこたわり
化粧品ワンスと持つて娘の帰省
お菓子より箱の豪華な方を買う

熊本市 北川一進

いたずらの積り本気になつちまい
本番にしゃっくりが出る慌てよう
現金で買った車の乗り心地
大口をたたいた程に無い利幅

尼崎市 森安夢之助

口紅が剥げて来ましたししゃべり過ぎ
表より裏町が好き旅の人

結論は流した汗が知っている
渦を巻きながら流れている噂

尼崎市の場 十四郎

きめたのは心の深さ知つてから
孫かえる可愛さおまけのポチ袋
キャンパスに春を描いている若さ
流れつくりに心の種を播く

鳥取市 萩原美雪

妻いつも味方するとは限らない
札束で無理やり神を味方にし
無理は承知でも働かな食えませぬ
敵同士に頼まれ神も悩んでる

和歌山市 田中みね

またへまを母さんあなたの娘です
きく耳を持たず話の腰折られ
一言が多くはらはらさせられる
福袋開ける顔には罪がない

旭川市 朝倉大柏

朝を出る靴も軽い日重たい日
父だけは笑わずに聞く子の希望
まっとうに言つてもピエロ笑われる
名の知らぬカクテル高級だと思ひ

和歌山市 森茜

断つたお花見一点雲もない
丁重なお辞儀へそっぽむかれたり
いつからか悟つたような古時計

ふところの深さへ揺らく自尊心

熊本県 岩切康子

水道を田畑に付けてピニハウス
酔ったふり本音を吐いて苦笑い

雨模様今宵しかない花見する

花吹雪街にじゅうたん敷いて行く

西宮市 松本一郎

裏切りを許して春の風に逢う

猫なで声その機をねらう目の光り

身についた安物買いをみじめとも

童謡のテープに妻と口ずさむ

尼崎市 尾宮弘治

不動産屋が歩いた土地の値が騰る

コーヒーで聴くには惜しい艶話

指を噛む私を笑う棚の辞書

母の指老いてもツボを外さない

尼崎市 木下義嗣

春の音桜を咲かせ消えて行く

酔って来て父はきまって子を叱る

似顔絵にはくろが二つも書いてある

嫁までが夕食ビール飲む平和

鳥取県 西浦小鹿

父と子が方程式を解いている

切札のカードをもって出勤す

四面楚歌私は笛を吹いている

無理のない形となって水流れ

尼崎市 鈴木良征

耳にペンはさんで課長怒り出す

虚勢張る割りにふところ淋しすぎ

月並な言葉で瘦せろと医者は言う

その先を言えぬクシヤミが癩の種

兵庫県 東浦砥代

女ですないものねだりばかりする

言い訳は皿を洗ってからにする

神参り母の気休めかも知れぬ

人見知りして風船がふくらまぬ

東子市 小山悠泉

ふる里創生一億円へ村がもめ

泣き虫を笑い袋が又泣かせ

転校の子に友達が出来安堵

だまし船と知りつつのつてやる自信

岐阜市 渡辺杏村

五月雨に黄色い傘の列が行く

部屋中を満艦飾に雨の朝

雨雲を眼下に青い空を飛ぶ

郵便受べそをかいてる手紙来る

鳥取県 鈴木芙美

歯こぼれをゆっくり研いで明日を待ち

成り行きは知らぬデマだけ飛んでゆき

鬼の首取った娘が帰らない

ベル押して今日の戦さは始まりぬ

鳥取県 今本早笛

燃えつきぬ心のようにマツチ折れ
心を図るさらさらと砂時計

野いちごに乙女心を詰めました
ほほえみをキャツシユカードで引き出そう

河内長野市 大西文次

研修という名で羽根を伸ばす会
手について謝ることに慣れてる

新聞にのらないことを聞いて来る
引越しの荷物に匂う沈丁花

堺市 神原文

どうしても切るに忍びぬ蘭の花
花の下くぐって一枝欲しくなる

花かすみ回り道して別れよう
山つつじ過保護の庭で拗ねている

出雲市 金森知恵子

ストレスのタネ新聞に拾う朝
かいくぐる荒波磯の丸い石

眠られぬ焦りはよそう明日がある
合槌を打つに微妙なタイミング

佐賀市 江口万亀子

精神をうたがうようなニールック
無農薬の野菜へ泥もつけて売る

腕組んで大地に試歩の青い空
余生いま残る頁を愛で埋め

酒田市 永沢裕子

煩惱があるからくぐる寺の門

花冷えの膳は湯気たつ物を選び
幸せを分けたい宿の湯が溢れ
閉じ籠る友に心が届かない

尼崎市 山田保蔵

優先座席若い娘の喋る席

おでん鍋深い話はあとにする
愛想よりおまけではやる主婦の店
せまい庭小鳥は差別などしない

貝塚市 池田寿美子

人気を取ろうという気の無いパンダ
無責任に笑ってられない経験者

花筏流す命は惜しみもなく
玉子焼花見の席に彩添える

尼崎市 新井泰子

短命な桜大きく見えを切る
我が娘にも悩みあるらし春の風

雀らが小さく大きく春の歌
三輪車幼児のすり傷新しき

守口市 森川春子

外国人米の七福神を買い
体操してから足腰痛み出し

キリストの幼稚園で雛祭り
箱の底一円玉が光り出し

出雲市 森山健歩

試算表お粗末でした人生譜
騙されてもだまされても性善説

ひらき直る女の凄さ見てしまふ
昔から机のない子良く出来た

島根県 菅田 かつ子

酔客の尻に敷かれる雑草よ
花吹雪化粧うすめにして歩き
心配をさせて嬉しい千鳥足
話好きの老母は私のお茶が好き

尼崎市 明壁 敏之

週休二日財布の中身軽くなる
陰口を言えばすぐにも風に乗る
輪の中がみんな味方とかぎらない
腹いせに小石をけつて吠えられる

鳥取県 太田 幸枝

砂浜にロマンの跡と黄昏と
手造りのケーキへ苺ポイントに
日曜は遊び呆けてから眠る
ひっそりと心を炎やして蛇いちご

岡山県 松本 元江

耕花翁逝く

あの世とやらへ笑いの種をまいて逝く
モナリザを愛し続けたやっこ風
花の生涯閉じる舞台も花ふぶき
想い出の中に息づく耕花調

枚方市 森本 節子

お彼岸におはぎを買って花忘れ
小商いお構いのない消費税

水溜り吸殻一つ浮いている
駐車した屋根に散りしく花吹雪

京都市 小林 英子

美しく明日を約束する夕陽
おこぼれに雀も窓の客になり
善い事をした一日が弾んでる
兎小屋に住んでシャネル買っている

豊中市 三宅 つえ子

南風吹いてうれしい車椅子
貝殻の殻を並べてみるメニユー
貝殻に名前書かれた雨の夜
ひな壇に伏し目で並ぶ玉子雛

大阪市 吐田 純子

トイレにも一輪活けて春の朝
過去捨てて簡易ホテルに住む孤独
貴婦人を気取りホテルの豪華シヨ―
借傘に情が通う俄雨

尼崎市 吉永 伊三郎

夜昼かまわずに泣く脚も身の内
寺町を歩く女の白い襟
花冷えを堪えて歩く松葉杖
高齢化基準看護で押し出され

鳥取県 木下 芙葉

あの顔でえくぼが憎いことを言い
何も彼も忘れて花見車椅子
車椅子病忘れて花の中

肩書を取れば普通の人の顔

大阪市 亀井 円女

孫だから無責任に愛してる

花と蝶のなんと見事なデュエット

幸せなこと夢も血の気もたつぷりと

寝屋川市 太田 藍子

寅さんにちよつと似ていていい夫

研修のようにはいかぬ初仕事

雨子報はずれて傘の重いこと

川西市 野村 静雄

仲直り出来て夫婦の顔になる

退院のない病人を慰める

先生の奥さんで来るクラス会

藤井寺市 楠 昭子

鬼さんこちらお金と女揃まらず

蝶ちよつとたわむれ隠す花吹雪

立ち止まりキスをされてる梅の花

鳥取県 黒田 くに子

麦笛を吹いて夕陽の絵にとける

こつそりと足へお灸をすえている

待ち呆け十字路へける石がない

静岡市 宇佐美 寿美

そよ風のささやきに舞うイヤリング

孫の涙乾かぬうちに蝶を追ひ

言の端に漂う心身に沁みて

豊中市 滝北 博史

梅雨どきの地球はすこし重くなる

家中で一番元氣妻の母

よく眉の動く男にだまされる

尼崎市 中澤 向西

衛星放送世界がチヨット近くなる

夕陽さす瀬戸大橋は絵の如し

活け花に鉢を入れる母正座

米子市 小塩 智恵

隣から回覧板と噂くる

座つてはおれないほどのいい天気

仕送日もビールも妻のパートです

大阪狭山市 桜井 莊次

強情を素直に写している鏡

ライバルが手をつないでる影法師

気まぐれな風に噂をまく女

出雲市 岸 桂子

星のない夜が嫌いなにぎりめし

灯を消せば今日一日が浮ぶなり

夫の手が欲しいと思うサロンパス

寝屋川市 河合 時弘

薄化粧まだする妻がいて平和

ビル街の角に孤独の寒い風

お愛想に言うた言葉に縋られる

鳥取県 武田 照女

父と子の対話に戻す火灯石

住みなれて人にまじわる下駄の音

上等の茶菓子に話畏まり

島根県 松本聖子

難問に出合ふと父の威を借りる

楚々と咲く蒲公英末は風に乗り
今日も亦義理包み込む熨斗袋
朝靄が立ち込め邑が消えて行く

静岡市 小木久子

目をむいてみたが所詮負け犬で
野を山を春の匂いがかけめぐり

鳥取県 西川和子

雲つかむような話にまどわされ

亡姑の匂い袋がまだ香る

病院の匂いを持って帰宅する

十和田市 阿部喜久江

主催者のリボンが来賓よりでかい

飲み足らぬ顔が出揃う三次会

山の湯で海の幸だけ食わせられ

倉吉市 橋本さつき

智恵の無い分だけファイト溢れる

ふるさとの星に手ほどきされた恋

マンネリの旗手では何時か褪せてくる

寝屋川市 井上すみれ

自然にもかけひきあって花と蝶

おとなしい人おとなしい犬を伴れ

留年と決め父の白髪気にかかり

流山市 神田治

童心にかえれば飛んでくる蛍

ジーパンを入れればさぼる洗濯機

薬局の薬は効かぬ腹の虫

熊本県 増田一乗

二歳児が突風のように来て帰り

結納の手順中人慣れたもの

歯に衣を着せない友で好きな人

句集むらさきは御飯の味がいたします

ユーモアの道連れがある新橋山

申し訳だけの花見の夫の杖

ちっぽけな足跡残して役終る

温顔のユーモア悲しい雲を追う

やっこ凧抱いて師は天翔ける

愛情のかえしを望む黄水仙

切実な愛情の花ゆきのした

紫のあやめもたらすよき便り

寝屋川市 豊福路子

岡山県 福原悦子

京都市 渡辺圭坊

枚方市 山崎彩子

赤道通過思わず拍手したくなり

目をむいた神像花のイヤリング

あこがれの十字の星を今視野に

大阪市 今西静子

大阪府 今西静子

耕花さんを悼む

バリ島紀行

— 46 —

組板のくぼみに母の歴史あり
家柄が話のはしに匂う人
夢のような話が好きな風鈴屋

和歌山市 山口 三千子

勝手な時の猫撫で声に身構える
沈黙は金口下手の処世術

平成の画布へ構図まとまらず

鳥取市 武田 帆雀

いたずらに撮られた顔が本物だ

望郷の手紙いちごが熟れている

孫が来てガラスの指紋拭かずおく

岡山市 河野 青銅

鬼の目に涙鏡は知っている

母思うスーブの冷めぬ位置に住み

お人好しチャックの目線に気付かない

伊丹市 猪原 石莊

相客へミルクを回すコーヒの香

カタカナの宛名ばかりを受け取る日

流行のバッグ自分がいれそう

鳥取県 石尾 かつ乃

咲ききった花の鼓動に触れてみる

生きている素晴らしさ日々天仰ぐ

土の道が好きだからする遠まわり

豊中市 村上 とく子

叱らずに包帯きつく巻いてやる

写真より逢えば笑顔が気に入られ

大阪市 島路 太郎

テレビから雑学うんと詰め込まれ

八戸市 島田 昭治

あきらめを伴せとじて暮し向き

妻好きなお金に僕は縁薄い

バカ陽気桜をその気にさせている

広島県 森川 抜智

広島弁つぎは岡山弁が乗ってくる

夫婦喧嘩するかと友に尋ねられ

ラーメンも石やきいもマイカーで

和歌山県 森 三枝子

老人会すこし濃いめの紅をひく

無口とは何処にも書いてない釣書

口ぐせの多忙を忘れ花の下

枚方市 中山 おさむ

手づくりの夏を彩る主婦の店

舞台装置の蔭から孫の手が覗く

エンジンアの眼で割り切ったおつき合い

唐津市 入江 喜久夫

ふるさとがグムの底から顔をみせ

添えぬ身と知りつ未練の残る女

絵羽織の袖に残りし亡妻の香よ

鳥取県 山根 八重

チューリップ真っ赤にお洒落して並ぶ

新緑がキラキラ光る朝だった

鬼の面はずした顔はやさしすぎ

大阪市 島路 太郎

永々と生きて昭和を愛してる

きなくさい話に蓋し花紀行

ハンカチを握りしめてる主義主張

寝屋川市

宮崎菜月

恋々と桜のトンネルくぐり抜け

ためらって女おとこに負けている

スタミナはこれ中流の焼ギョーザ

兵庫県

奥野テル

地獄からぼろい話の使者が来る

白くしろく辛夷が咲いた無縁墓地

幸せは職もつ老いの軽い足

唐津市

福島紀一

遠吠えに終ってならぬ野党連

遠くてもあの人一番近い人

鋤き残す土に蓮華が生きていた

香川県

上藤多織

妹が相談に来る走り梅雨

友の計にうまく繰れない時刻表

控えめに要所へ母の知恵袋

岡山市

中嶋千恵子

祝合格嬉しい便り届く朝

私の余生の地図は神の手に

胸かりて泣いても見たい浮気虫

神戸市

岩田信義

たんぼぼの綿毛を吹いて消えた夢

ええかっこし過ぎてなった歩の餌食

春の日の匂う布団で母の夢

岸和田市 岩佐ダン吉

明日という快い字に縋ってる

パートに出女房ひと言多くなり

廃屋にツツジが咲いただけの春

和泉市

中川楓

花一字たいさん木の花のいろ

誤字のある手紙が母の形見とは

気短かと添うて返事が早くなり

泉南市

坂根流水

ひと押しが足らず逆転うちやられ

屈託のない顔つらねて施設の子

野のはてに老人病院ひとたち

青森県

荒田つる

置物のようにテレビでねむる猫

ゲートボール振りむくひまのない六十

切り出せぬままに手を振る汽車の窓

岡山県

森下正子

亡父の影踏台にして越す峠

断りに行く仮面を考える

主婦として休日の無い米を研ぐ

鳥取県

乾隆風

ひざ枕しびれぬように小言いう

阿呆になれるライバルが憎い

嫁はんの留守に雨漏り直しとく

南国市

窪田和広

恐つても泣いても強いのは女
隙だらけの女に声をかけた悔い
片想い女が日記ばかり書く

島根県 加本義良

夜桜を一人占めして露天風呂

天気図か明日のドラマ読んでいる

番犬も客を選んで尻尾振る

鳥取県 石谷美恵子

裸一貫築いた城に子は住まず

笛吹けば踊ってくれる妻がいる

名前とは似つかぬ顔で畏まり

十和田市 阿部進

ふとところで落ちつきのないあぶく銭

夫婦喧嘩時々やるが仲が良い

割り込んだ軽四輪はまた女性

鳥取県 伊吹富恵

鍵っ子へ母は匂いを消しはせぬ

反抗へ心のベルが見つからぬ

頑張れと只一言につきる愛

米子市 新正子

楽しくておちよこ二杯で酔っちゃった

六法全書救急箱と同じ棚

髪を切り君を忘れることにした

静岡市 西村千代

誤解され背中合せの夜が続き

長電話犬が死んだの生れたの

作業衣を着るとおちつく貧乏性

鳥取県 山内芳江

振れば出る小槌のようなカード持つ

その人の温もり色紙からもらう

背伸びした暮し日銭が追いつかず

富田林市 大澤三四子

辛きこと耐え野すみれそつと咲く

デートには時計を持たぬことにする

木枯しの人待つ時計止まってる

羽曳野市 福田満洲子

丹念にちらし読ませる消費税

帰任する夫婦見送る雪の富士

諦めを感謝に変えて木魚打つ

岡山県 福原辰江

爪染めて台所には遠く居る

見送りの母の影が点となる

妥協など出来ぬ女爪を研ぐ

奈良県 横井都姫子

人生の匂いがします演歌節

桜舞う中へ園児のバスが着く

よかったよかったみやげ話に眠くなり

相生市 中塚礎石

檀山へ振る賽ころは急がない

喋らずに歩く二人へ愛のピラ

飽食のナイフへヒフテキ薄すぎる

岡山県 清水悠貴女

饒舌のあとが淋しい影法師

逢うだけのときめきもある藤の下

笑いジワたんとあるので気を許し

代表がやつと決まったあみだくじ

摺鉢に手を添えて聞く母の歌

胡麻の香に母のすりこぎ速くなり

四角四面ポストは丸い方が好き

見栄捨てて父の作務衣よく似合う

一途さに聞く耳持たぬリングたち

又昭和書いて平成書き直す

空襲下ハネムーンもない式でした

昼寝した一円玉を起こす税

来年の指切り曾孫とランドセル

洗濯機フルに回転子の帰省

湯の花で吾が家の温泉風呂に入り

苦しんだ試験合格した笑顔

寝たきりが年金枕の下に入れ

一番の列車が時計の母の朝

花薫る砂丘の園児粒になる

堺市 近藤 豊子

佐賀市 古川 一徳

唐津市 野田 旭恒

岡山市 牧野 秀香

岡山市 伏見 すみれ

鳥取県 美浦 美代子

父を語るととても悲しい海となる

カセットで祭囃子を聞かされる

平成も良いが昭和にみれん有り

川柳に追われて仕事手につかず

一日のつかれを湯舟において来る

うぐいすの声で目覚めるお仕合せ

町工場立直ったか壁に求人

玄関を開けたら花より蜂が逃げ

親のゆめまゝくらくらむランドセル

満ち潮に川の流れもさからえず

夜桜を一人占めた春の宵

腕時計はずして共にリタイヤ

長電話黙ってきいてる砂時計

冬山から無事を知らせる走り書き

国会に春の足音聞こえない

通信簿みたいな年度末辞令

三%のへそくりせねばならぬ主婦

静岡市 柳沢 たま

吹田市 山田 里子

和歌山市 前田 美子

富林市 楠 美子

奈良市 井上 大

岡山県 後安 ふさえ

お月様一緒にまたぐ水溜り

紫の句集時間を忘れさせ

夕鳥をやさしく迎える森の枝

岡山県

後安江山

姫路市 谷

清柳

明るくて物やわらかな友が好き

誇らない父の机にある重み

花束よ今日は嬉しい卒業式

宇部市

中村三良

藤井寺市

高田美代子

余生に乾杯地球は明日も回る苦

三面鏡に百面相して孤独

もの言わぬ老樹歴史の修羅を知る

大阪市

尾崎黄紅

笛吹いても金をつけねば踊らない

金があり錆びた鉄も切れてます

愛犬という程でない餌をやり

静岡市

三浦つね

頼まれぬ心配をして笑われる

床屋さんうつらうつらでもう終り

祖母の膝かわりばんこに孫曾孫

静岡市

青柳金吾

酔った真似出来る男で出世する

大学を出て後継ぎは村を捨て

どう見ても異常に見えるピカソの絵

堺市

井上たかし

読めもせぬ横文字なんでメガネなど

子に加減されて侘しい腕相撲

鯉幟りおしめと泳ぐ五月晴れ

焼却炉心残りで読みなおす

泉佐野市

大工静子

花よりも月を選んだ別れ際

リングの皮つづけてむいただけのこと

酒瓶に封してからの失語症

花開く瞬間に逢うときめきよ

ふところに辞表を抱いて口火切る

胸に住む亡父が時々進路指す

生き残りそんな感じのクラス会

学歴は重視されない二度の職

セールズに組し易いと粘られる

吉と出たおみくじうれしい春の風

雑草に花咲く春の日の温さ

宿命と片付けられて運不運

ゴキブリよ今年も同じ貌じやのう

子育てに塗りつぶされた母の地図

思い出を老眼鏡で読みなおし

萩屋市

根来敬

鳥取市

岩原喬水

泉佐野市

大工静子

ほけ姑鬼千匹にはほけ見せぬ

焼却炉心残り

読みなおす

読みなおす

読みなおす

読みなおす

今がチャンス野党がつるべ打ちにする
政治家は得体の知れぬ花咲かせ
松江市 豊田 巡歩

善人と言われ毎日肩が凝り
娘がみんな美人に見える春の朝
青森県 波 ただお

女房と言われあぐらをかいている
故郷の山けずられて行く不安
富田林市 浦田 トシエ

仁徳陵摩天楼氏が番してた
小銭入れ買って一円又貰い
大阪市 平井 露芳

あひるの子散り敷く花に道をつけ
講演会眠りをさそう流暢さ
静岡市 中西 雅

心の鐘まだ鳴り止まぬプロポーズ
じゃじゃ馬もやる気になった薄化粧
和歌山県 西口 忠雄

人を斬るなんともきつい舌の先
強がって見ても心に冷風が
鳴門市 八木 芳水

君に似た人が隣の席にいる
桜並木で老人不意に立ちどまる
豊中市 小林 一夫

鳥取県 中瀬 さつき

水平線遙かに山の子に育ち
掃除洗濯日曜の主婦となる

子供育てて来たからやはりやさしい眼
定年の人生社史にも残らない
檀原市 西本 保夫

タイミング噂の男ベルを押す
家並みが不揃い人もそれぞれ
米子市 大田 みさと

達筆を自認ワープロを好かぬ人
振りかえる危ない橋の二つ三つ
豊中市 みき わきみ

独断を袈裟斬りにして席を立つ
四分咲きに花だ酒だと浮かれだす
吹田市 西岡 豊

春眠を小鳥が起こす山の家
売上げを苦しめている消費税
高知市 山崎 一求

三坪の庭もつつじの花盛り
観光に一役買って地引網
唐津市 中村 順子

健康がタンスでねむる保険証
いたずらな言葉大好き南風
岡山県 富坂 志重

代表と呼ばれて上げる重い腰
寝屋川市 北岡 波留吉

湯けむりに途中下車して宿さがす

鳥取市 森山豊子

弱点を妻が後ろでカバーする

これからの自分史赤いバラ添える

兵庫県 倉垣恵美

白い皿いちごミルクを恋しがる

ポケットへ一円玉を馴染ませる

鳥取県 幸家單車

方言が出せぬ異郷で孤独かむ

住む人の彩で咲いてる庭の花

岡山県 大石あすなろ

童心にかえしてしまふ森の道

片言が聞えて来ます垣根越し

鳥取市 松本伊都子

願望も伝言板に書き添える

すさまじいいびきに夫の労思う

大阪市 乾哲静

気がつけば年金生活板につき

食卓に出揃う珍味待ちかねる

藤井寺市 武部敦子

朝寝して雨戸の音も遠慮がち

亡き母の形見も似合う齢になり

出雲市 高橋きよし

抵抗も出来ず減反増すばかり

先頭に歩調が合わぬ長い列

単身へ春を届けたさくら草

鳥取県 西原艶子

冥土への道は若くて見づからぬ

愛想のよい返事だがおもしろい腰

生返事三面記事を読みながら

堺市 船越重子

向き合って皺を数えている平和

味方にも敵にもなつて嘘をつく

鳥取市 前田一枝

茶畑にジュース自販機光つてる

ひたすらに網を繕い漁を待つ

静岡市 増田扶美

ブラウスの春幸せが歩いている

本当の味方はあまり喋らない

愛媛県 八塚三五島

極楽に往ける法話に金が必要

失意の日しみじみ妻のありがたし

大阪市 山北三三三

瀬戸の橋あかりの下を船くぐる

夜桜で宴会するらし陣取つて

大阪市 平山登代

写真とはちょっと違った顔が来る

母さんが疲れ添い寝が先に寝る

茨木市 藤井正雄

羽曳野市 麻野幽玄

夫婦して同じ咳する花の冷え
離婚して元の勤めの紅を引き

奈良市 米田芳子

トイレにも四季の詩ありカレンター
梅見頃あとはうぐいす待つばかり

静岡市 丹羽定次

カラフルな肌着が目立つ春一番
人形を抱いた子供は母の真似

今治市 渡邊伊津志

間髪を容れぬ答の出る余裕
何時来てもお買得ですグイヤ売る

川西市 田中喜俊

札よりも小銭で重いがま口に
春や春入学祝がどつと出る

静岡市 久保きぬ

口止めをされてストレス胃にもたれ
飽食と共に平成動き出す

青森県 木村喜峰

風邪を引き季節はずれの旬を食べ
オフクロの宅急便で季節知る

大阪市 榊本落児

御座候なんで女の子がならぶ
落人は必ず平家と決まってる

唐津市 浜本治幸

ああ空は大きく晴れて新芽吹く

大安の良き日に救急車が走る

鳥取県 横山房子

雑草の強さ病む身は羨まし
一本の歯も抜かずして夫は逝き

河内長野市 岡崎実

終列車国訛りふえ帰省する
幻想をよぶ漁火の数無数

静岡市 大石たき

絵馬買って孫の出世を願いごと
振られても知らぬが仏達いに行く

豊中市 額田明吉

トンボ切る孫悟空等に大喝采
猪八戒法師のそばでブーブーと

八尾市 片上英一

梅コマでサブちゃんを観て色紙買う
てんのじ村ビルと高架で息つまる

藤井寺市 中島志洋

口喧華絶えぬ二人で共白髪
同情に甘えたくない車椅子

静岡市 大村正雄

一見は紳士風にと髭をおき
しまったと気付いた時は法の庭

鳥取市 西村黙光

南京虫虱退治がしてみたい

このごろは舌のスペアも売っている

鳥取市 近藤秋星

天気晴朗なれどふところちと淋し

菊の芽をつんで挿してさつき雨
めおと傘飛ばさぬようにただ祈る

いつも居る場所にあの娘がいる安堵

新潟県 高野不二

煙草吸う方が気兼ねの少数派

里帰りみやげの風邪が重かった
砂場から村の幼い芽が伸びる

単身にちよっぴり夢を見て赴任

和歌山県 田中隆積

飲み食いは梅田の方が性に合

気晴らしに妻と二人の通り抜け
カラフルな色が目立ってきた心ブラ

いささかの畑にしがみついている

富田林市 山原昭水

青年よ国語辞典を持つてるか

痛いとこ突いた投書がもてている
勝ち負けは別にエールは爽やかに

大安で嫁入り荷物よく出会う

藤井寺市 菊地繁男

閻魔様次はどなたの犯科帳

八十路越え未だ有る次の坂が待つ
責任を逃げるようでは頼りなし

曲り角どんな出合いか興味湧く

神戸市 石神草風

死んだ児の瞳が責める無為の日々

共白髪話は弥陀の許へゆく
善人と呼ばれて欲も加減する

幾星霜祖国を睨む髑髏

東大阪市 大平太一郎

日溜りで老人会は嫁談義

オーイと言ひ眼鏡とわかる老夫婦
打明けてしまつと月が丸く見え

桜散り筍味わい春惜しむ

倉吉市 青砥菊枝

子育てが終り子供をうるさがり

オバタリアンも単車で飛ばす夢がある
そろそろ脱皮せねばと赤い服を着る

いい姑になりたい そうねとオバタリアン

米子市 服部朗子

八尾市 向井しづ子

久野野草

鳥取県 清水利武

真崎浪速子

静岡市 浅子まつゑ

前田嘉津江

大阪府 家村高雄

田辺市 染道佳明

青砥菊枝

米子市 服部朗子

いい姑になりたい そうねとオバタリアン

米子市 服部朗子

一步退き順番を待つ春の道
仕込まれたおうむ挨拶がお上手

大阪市 堀口欣一

東京の中に江戸あり本牧亭
駐在所誰も居らずに世は平和

岡山市 土居ひでの

時雨忌や芭蕉の徳が偲ばれる
国境を越えて世紀の喪に集う

鳥取市 美田旋風

楽しみに播いたタネみな時季はずれ
失敗も友のジョークで軽くなり

島根県 兒玉幸子

よろよろと仔牛牛乳吸うて立つ
チューリップ出雲平野を七色に

静岡市 山中竹野

幸運のはかりは誰が持つてしよう
労わりは言葉に出して言つて欲し

大阪市 川原章久

豆腐南禅寺芋鱈円山京の春
ワープロが記憶してますラブレター

呉市 岡田寿美礼

歌好きの桃色ペリカン園児室に
秀句ばかり整理暇どりよみ返し

弘前市 肥後和香子

欲望と私のピンポンまだ続く

欲望のサイズ近頃Mとなり

広島市 名和喜一郎

シーソーが上がらぬままに定退す

良子嬢

忘れるな好かれた癖と角隠し

島根県 岩田三和

春の草山の香りの詰め合せ
子供たち野外で勉強カエル追う

島根県 山根峰雪

身代りに割れた成田の守り札
峰寺から遙かに招く白木蓮

川西市 西脇富美

雨宿りお茶を出される低い屋根
筋書がまだ狂わない白昼夢

唐津市 山口ふさ子

春の野や袴をつけて土筆待つ
大空へ背のびしている旅立つ子

富田林市 加藤ミツエ

春風や千葉の孫から花便り
横臥の乙女気になる庭の落ち椿

◆ジュニアの部

シャボン玉はかない夢を映して消える
音楽に包まれページめくる夜

尼崎市 新井朋子

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

田形美緒

勝目ない喧嘩を妻としてしまふ

大西文次

始めから勝目ない知りつつする喧嘩、それもコミュニケーションの一つではないでしょうか。それとも甘え？ いつまでも喧嘩でさる夫婦であってほしいと思います。

軒先を貸すのは燕だけにす

新正子

燕は何を基準に営巣の場所を決めるのでしょうか。訴訟ばやりの昨今、主客転倒にならぬよつ。

巢の中に抱いているのは不発弾

松本元江

雛鳥の成長は頼もしくある反面、不安もどうか素直に育つてと願う親心でしょうか。子のくれた周遊券の温い旅

松本一郎

超豪華でなくとも、兄弟で出合って贈ってくれた旅。これに勝るものはないでしょう

ね。本当に温い句と思います。

真つすぐな道しか知らぬ急ぎ足

桜井莊次

真面目一途に送って来た人生。ここらでちよつと辻を曲ると美しい花に出会えますよ。

粗品進呈なるほどに粗品だな

尾崎黄紅

新装開店、今朝もチラシが入っています。

貰って重宝するほどの品じゃないけれど、やっぱり足が向きます。

掌中の珠もそろそろ持てあまし

楠美子

のびのび育てられた娘、今や青春まっさかり。居こちが良いのか、嫁く気も見せず、親の方が氣を揉んでいる様子ですね。

逃げ道を一ツ残して叱る父

中川楓

叱り上手なお父さん。お母さんはつい感情をむき出しに怒りますが、親子断絶など考えられない家庭ですね。

折り返し過ぎて景色が見えはじめ

山本希久子

がむしやらに走った折り返し点、景色が目に見えるようになったゆとり、若い頃の自分がおかしいくらい生一本であったと思います。

ちよつとだけ惚けて家族の和を保ち

坂根流水

老いては子に従えとか、気付かぬふりをするのも大切。可愛いおばあちゃんになりたい

と思つています。

御馳走のように煮えている注射針

江口万亀子

食欲が出て来たらしめたもの。あとは日にち薬ですね。

風圧へ揺らぐだけですおじぎ草

舟渡杏花

心も身体も柔軟に生きるのがコツですね。

どの道もやがては墓地に辿りつく

金村青湖

人それぞれの生き方があります。ただ平等なのは、必ず墓地へ入る日があることです。

その日が分らないのが嬉しいですね。

善人になろうなろうと化身する

鶴久百万両

性善説を信じています。

舞扇髯の一字のありつたけ

山崎君子

舞扇を持つと別人のようになる。糠味噌くさくならないように年を重ねたいものですね。

パチンコの好きな男のかい夢

井上たか

大きな夢を持っている。しかし、チャンスはまだ来ない。パチンコで運だめしを。

浮き雲の自由のつてみたくなる

高田美代子

青空にボカリと白い雲。誰にも干渉されず、風の吹くまま気ままな暮し、どんなに憧れて

1989年度

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自 89年1月号

至 89年4月号

路郎賞候補作品

正本水客

尼さんの手にかき餅がよくふくれ

遠山 可住

すこし頑固で老人会に籍がない

買うはめになったというて買うて来る

玉置 重人

お祭りのあと露天商掃いて去に

春城 年代

美容院男に髪を洗わせる

佐藤 藤子

座布団を干すと野良猫来て座る

寺田 裕美

ラーメン屋ダシの話はしたがらぬ

江原とみお

削り節調子を合わせ過ぎないか

残り福などある筈がない老後

西出 楓楽

高い鼻 劣等感も持ち合わせ

奥田みつ子

葬式へ行くときだけの夫婦連れ

高杉 鬼遊

お見舞に行くしあわせを噛みしめる

津守 柳伸

肚立てる程の値打ちは無い相手

僕だつて灯りをつけて妻を待つ

家計簿を強行突破の冠婚葬

野村 太茂津

ロボットよお前に草鞋編めまいて

久家代仕男

言いつのる女あしたの日本だな

裏切られ裏切る枯葉舞う街に

どの駅に降りてもそれは君次第

自負も自我もいっばいあって生きてる

懺悔する視線伏せたりなどはせぬ

静中動の真ん中に俺がいる

煙草吸うぐらい気兼ねをしなさんな

文鎮に胸の乱れを諭される

人間が好きで疵つくことはかり

切腹もいいなと思う花吹雪

辻 白漢子

土橋 蝸

玉置 重人

西口いわゑ

河瀬 芳子

桜井 千秀

辻 白漢子

堀江 正朗

都倉 求芽

都倉 求芽

山川 克子

西山 幸

時末 一灯

江城 修史

久家代仕男

山川 克子

西山 幸

時末 一灯

江城 修史

山川 克子

西山 幸

時末 一灯

江城 修史

山川 克子

西山 幸

時末 一灯

江城 修史

山川 克子

西山 幸

落ち着けば宿命という言葉あり

掌中の玉が時々する謀反

石二つあれば火種に事欠かぬ

死にそこなつてこそ本当の悪党だ

林 はつ絵

奥田みつ子

田中 正坊

谷垣 史好

正確な時計で後悔ばかりする

紙コップとつても寒いひとり旅

行く時の元気で帰つて来ておくれ

好きだから騙し舟など折りましよう

ピー玉の転げ続ける身の証し

口紅を濃い目に今日に立ち向かう

楮書から行書へ心張棒を抜く

仕合せになろうといった騙し舟

来る来ない来る花ヒラが嘘をつく

林 荒介

松本はるみ

林 荒介

西山 幸

中川 滋雀

片岡智恵子

山田 高夫

仏にもつぶてにもなる石ひとつ 高杉 鬼遊
平成元年昭和のままの野良着着る

自己嫌悪蛇口をいっばいにひねる 天満三千代

ダイヤになれダイヤになれと石磨く 奥田みつ子

ここだけの話を風に盗まれる 安藤寿美子
あお虫が明日へ明日へと噛むキヤベツ 川島諷云児

寺田 裕美

黒川紫香

漬物の重しぐらいの役もらい 堀端 三男
医者を持たせて寒い日はたとと脱ぎ

横田 英詩

大切に読まれたらしい亡父の本 西口いわゑ
風の噂をもっとシビアに考える 奥山美智子

丸腰が不安で鞆提げている 田中 正坊
元氣かと医者にパツタリ出会つたり

弘津 柳慶

枯枝に花を咲かせる灰が無い 錦織 文子
異状なしされど薬は飲めと言ふ 信本 博子

会いたいというメモが来る雪しきり 矢野 佳雲

店員のセンスに任ず試着室 安平次弘道
平成と聞く甘栗をむきながら 林 はつ絵

赤川 菊野
補聴器でもとの頑固をとり戻し 舟木与根一

ティータイムみんな漫画を読んでいる

週休が二日 二日も邪魔にされ 西山 幸
土居 耕花

橘高薫風

ガン検診魔女も秘かに行つてきた

政岡日枝子

だんだんと女がいらぬ酒となり 中内 朱坊
黒牛と赤牛で知る県境 上田登志実

阿萬 萬的
齢ですな靴下さえも匂わない 谷垣 史好
衣食足りもう群衆は見当らず 牛尾 縁良

運だめしちよつとお嫁にゆきましょか 宮崎シマ子
美容院男に髪を洗わせる 佐藤 藤子

せりなすなごきようはこべら天子の計 西山 幸
正直者だらうはだして歩いてる 天正 千梢

すいとんの中に昭和が浮いている 新家 完司

致死量にいつかはとどく米も食む 松本はるみ

ラーメンの屋台へ日参するペンツ 津守 柳伸

春の水水車小屋までまっしぐら 渡辺 独歩

酔い醒めに忘れないこと甦る 堀 良江

川柳塔賞候補作品

高杉鬼遊

勉強をせぬ子に勉強室を建て 大西 文次
なに着ても着ばえせぬのに思案して

米田 芳子

大阪の語りべになる渡し舟 小林 英子
故あって皿一枚を割りました 岸 桂子

タンゴにはタンゴで揺れるイヤリング 井上たかし
齒科に行き眼科に寄つて小半日 小木 久子

あの人もこの人も逝き秋もすぎ 島路 太郎
ひとすじに思いつづけてぼたん雪

森 茜

いくつもの冬と出逢つて仏の眼 池 森子
平成へひとひらの雪冷めたくて 山根 八重

妻だからたまに夫を叱ります 滝北 博史
土地を売る話へノラが舞い戻る 舟渡 杏花

原発の電気も同じ灯を点し 中塚 礎石
猫の手つきで顔を洗っている老後

浄土まで道を計りに行つたまま 藤井 高子
土居ひでの

祝事なのに聞きわけない涙 秋元 てる
食卓の花一輪も愛ですよ 小谷美つ千

汚されにばつと出て来た美しさ 野村 静雄
浄土まで道を計りに行つたまま 土居ひでの

谷垣 史好

故あって皿一枚を割りました 岸 桂子
ああ青春 視野いっぱい虹が起つ

笛吹けば悪いやつまで蘇る 中尾まゆみ
転がった土地で静かに根を下ろす 高杉 千歩

不謹慎な笑いを溜めている木魚 上藤 多織
枝折戸のかぼさき誰もうつけいれぬ 桜沢あかり

晴れた日は味方もそばに居てくれる 森 茜

貝になる前に最後の砂を吐く 門脇 晶子
過去帳に二歳で死んだ者がいる 山口三千子
どの子にも一寸小さい亡父の靴 小林 一夫
猿回しだんだん猿を持って余し 尾宮 弘治
鈴木 良征

小出智子

この金魚僕の給料より高い 北川 一進
税金のかからぬ山の空気が吸う 渡邊伊津志
お父さんお酒をやめてありがと

彫り終えた仏と向う無の時間 立道善太郎
とんぼ帰しても故郷いいもんね 楠 昭子

西暦ですぐに言えない誕生日 豊田 巡歩
充電がたたくて憂国論を読む 堀畑 靖子
他所の花がきれいに見える倦怠期 鶴久百万両

子育ての重荷を分けてから夫婦 桜沢あかり
新 正子

そつえいはしばらく虹を見ていない

終電車詩人のような顔になる 小林 一夫

仲裁をかって出たのは庭の花 岩佐ゲン吉
寡婦として風の便りを聞き分ける 田中 輝子

異常なという診察が頼りない 東浦 砥代
うば桜などと言ってるのは誰だ 高野 宵草

太田 幸枝

板尾岳人

躓いたところで拾う母の笛 酒井 靖子
臍の緒を辿れば母の海がある 中尾まゆみ
引き金をひいてしまったイヤリング 野村 京子

ふり向けばひたすら恥じる赤い糸 宮武まつ女

直感のはずして風になる 池 森子
鬼ごっここの鬼の首筋から暮れる 秋元 てる

不謹慎な笑いを溜めている木魚 桜沢あかり
終章を他人の花が迷わせる 舟渡 杏花
油断した蛇口小声が漏れている 岩切 康子

淋しくて花屋へ蝶になりにゆく 山口三千子
髪切つて風の話の聞いている 西浦 小鹿

北風に乗せてやりたい火の女 森脇 和子
秋日和借金もなし友もなし 木村たけし
約束を信じて待った紅椿 山根 八重
妻だからたまに夫を叱ります 滝北 博史

河内天笑

我が家より立派な家具が捨ててある

少だけ妻が威張っていて平和 三輪 通彦
異常なという診察が頼りない 野村 静雄
どこからが余命でしょうか忙しい 高野 宵草

野良猫と睨み合っている無職 大川 幸子
ジャンケンポン誰かが鬼になる定め 武田 帆雀

いくつもの冬と出逢つて仏の眼 井上たかし
巢立つ日の髪たつぷりと肩にあり 池 森子

居眠りをしている母が好きになる 近藤 豊子

都会からブルドーザーがやってくる 西浦 小鹿

貝になる前に最後の砂を吐く 西浦 小鹿
卵バナナ昔の値段で出ています 山口三千子

泣いてなんかにられるもんか天高し 井上 大
自己流の体操をして今日終る 黒田くに子
アルバムとかがみの顔とくらべてる 今川三津江

新井 晶子

路郎賞・川柳塔賞の最終発表は、十月号で行います。

愛染帖

橘高薫風選

いつからか私の森に住む雄鹿

島根県 小砂

清楚とは男のもらう措辞でなし

鬼百合に鬼百合なりの恋ありき

大坂市 榎本

間歇泉地球確かに生きている

婦人俑紅がほのかに残ります

西宮市 奥田

向い風掃りはきつと楽になる

悪友が好きなら好きになる

河内長野市 植村

順番に咲く花さえも世が変える

外は春内にも春を待っている

今治市 月原

考える人へさくらが散りかかる

よろこびに酔うてはならぬカスミ草

弘前市 波多野

手風琴えくぼやさしき恩師あり

珈琲の匂いが似合う標準語

伊丹市 榎谷

青春に引分は無し甲子園

早咲きの花見冷たいところそば

奈良市 米田

小市民群れを頼りに身を守り

返事だけしっかりしている俺の子だ

唐津市 浜本

惚け病棟に這入ればすぐに惚けられる

だるまさん足を投げ出し目をつむる

米子市 政岡

まっさきに新緑運ぶ郵便屋

味方のような顔で書留便がくる

大坂市 山北

胸に抱く骨があなたというた人

巖頭に立てば小便散らす癖

廿日市市 森川

早朝のテレビ仏壇屋のコマーシャル

飲んでからラムネの玉をどう入れた

豊中市 辻川

鐘撞けば余韻の長い花の雨

花吹雪もう暮れている天守閣

岸和田市 原

仲良しと同じにしとく祭寄付

仲良しがいつてる塾へいきたがり

米子市 川上

木蓮が一度にひらく母の精だ

青森市 工藤

本日の打ち止め盃を伏せる

鳥取市 近藤

無視された証拠符になつて来ず

名古屋 越村

雨が降るから別れようとおっけなし

倉吉市 渡辺

大津生まれの鬼ときどき禪問答

パリ島にて

焦がれ来てサザンクロスに投げキスを

堺市 井上

脱ぎ捨てた靴猛々し決意見せ

芦屋市 根来

教育に勅語の出番遠からじ

豊中市 三宅

ひとり身の掌からこぼれる水の音

豊中市 滝北

さよ子

より子

甲吉

秋星

枯梢

菩句

彩子

たかし

敬

つえ子

博史

米子市 八木 千代

書きすぎぬように大事なひとへ書く
みやこわすれ増やしてみやこ忘れぬ
今はたましいの時間で月の下

鳥取県 新家 完司

まごころを分解しての哲学者
灰色の街で葉がよく売れる

和歌山市 山田 高夫

ぬるま湯に弁証法が浮きあがり
夜が明け夜がまた来て病み続く

島根県 松本 文子

恋文の中で竜巻がおきる
火縄の端握り和解をするつもり

米子市 新 正子

添い寝して何と命のいとおしい
私の影にアイロンかけ直す

今治市 渡辺 伊津志

和歌山市 堀 畑 靖子

悪性のカゼ受付けた申告期

高槻市 笠嶋

恵美子

壁と向き合えば無になる外はなし

鳥根県 堀江

正朗

彩みんな春の記憶に混ぜ合わす

今治市 越智

一水

人間は冷たい土はあたたかい

茨木市 井上

森生

気まぐれは飲んで二人の合言葉

守口市 森川

まさお

いつまでも招待席が空いている

寝屋川市 平松

かすみ

和の中に慣れて奥の手消えました

相生市 中塚

礎石

主義主張空に赤旗社旗国旗

寝屋川市 堀江

光子

故障することでロボット訴える

和歌山市 後藤

正子

雨も風もやがて一人の音となり

鳥取市 小谷

美つ千

逃げるのが下手な男の背がある

和歌山市 神平

狂虎

漂うように歩いて愛に突き当たる

高槻市 河瀬

芳子

彩つきの夢を見ました花八つ手

寝屋川市 岸野

あやめ

花びらの蠱惑に負けて触れるとき

鳥取県 土橋

螢

海からの風は女を夏にする

富田林市 藤田

泰子

私も彼も子供で砂遊び

堺市 近藤

豊子

親鳥の呼びかける声返す声

大阪市 山田

妙子

もついいかもついいかいと桜咲く

鳥取県 さえき

やえ

泣かされた水をも一度のんでみる

和歌山市 牛尾

緑良

未練かな道ひとすじが暮れ残る

姫路市 中塚

遊峰

明日への心教えてくれた亡父

岡山県 池田

半仙

八十年つけた面にもある傷み

吹田市 栗谷

春子

八十のおのこ一途にイヤホン

出雲市 板垣

夢酔

アイラブユー老いて焼かねばならぬ文

和歌山市 青枝

鉄治

妻子まで肩書ついた顔である

名古屋市長古屋

井高子

キッチンに光る私の騎兵隊

熊本県 高野

宵草

アルバムの頃の息子は好きだった

広島市 名和

喜一郎

まっすぐに故郷を目指せる渡り鳥

尼崎市 春城

年代

ある夜ふと思いい切れない世と思

尼崎市 春城

武庫坊

二枚舌昼間ゆっくり休ませる

鳥取市 武田

帆雀

貧相な大臣も居る子算室

唐津市 久保

正敏

悪弊の議事堂延銭曇り

唐津市

田口虹汀

平成やドンとは悪の代名詞

呼子大橋竣工

唐津市

浜本義美

船頭も船を繋いで車買つ

東京都

吉川一郎

ブルーグラスも目を背ける株譲渡

弘前市

真喜内 實

古靴を先にはかぬといいたむ足

豊中市

江口明光

平成と今だに書けぬ昭和ホケ

兵庫県

東浦砥代

女だった頃をたたんだ衣裳函

米子市

田中亜弥

虹の絵が今だに消えぬわたしの絵

静岡県

蘭田 猿杏

焼鳥屋お酒も春の爛になる

静岡県

渥美 弧秀

詩と音楽私の時間生きてます

鳥根県

堀江 芳子

狙の音手作りが性に合い

川西市

野村 静雄

流行の眉細くなり太くなり

橋本市

岸本 木魚

そんな税いややねんと子の遊び

奈良市

井上 大

電卓が又又売れる消費税

米子市

石垣 花子

ぎりぎりの所で薬にすがられた

米子市

寺 沢みど里

厨房に家族合わせの席がある

兵庫 倉垣 恵美
辛抱の勲章白のまがよい
黒石市 相馬 一花

二人三脚時々転ぶ夫婦仲
米子市 金山 夕子

菜の花に弾んで川もゆるみだす
有田市 生馬 芙美子

薫風をホテルの窓がこぼみいる
岸和田市 芳地 狸村

梅一輪開きりハビリ弾みつけ
藤井寺市 中島 志洋

春爛漫暗い話はお断り
弘前市 肥後 和香子

日曜のホットケーキで母になる
鳴門市 八木 芳水

おとほけの顔して隙のない男
唐津市 野田 旭恒

墳丘墓昔を今になすよしも
岸和田市 三輪 通彦

嫌われる理由が蛇に判らない
大阪市 北 勝美

近過ぎて頂上見えぬ山の宿
豊中市 みき わきみ

初代は金に二代目人に苦勞する
箕面市 椎江 清芳

皿小鉢不揃いのまま子を育て
和歌山市 田中 輝子

愛が欲しくてやんちゃばっかりする末っ子
米子市 青戸 田鶴

犬もまた絆と気付く春の別れ
八尾市 向井 しづ子

土いじり枯木の様な手を洗う
吹田市 井上 照子

かた隅で梅檀の苗香を放つ
姫路市 大原 葉香

この川がもし涸れたらと思つ日も
米子市 小村 てい子

春の海もんどり打って横になる
香川県 上藤 多織

ホテル景気続くか橋は揺れやすし
岡山県 山本 玉恵

善人の疵の深さは神ぞ知る
伊丹市 猪原 石莊

逆むけの指を甘えて妻に出し
摂津市 もちづき 遊美

花菖蒲私留守でも咲いててね
和歌山市 森 茜

憎しみがあろうか花も終る頃
和泉市 西岡 洛酔

一合に酔う一兵卒俺の顔
米子市 白根 ふみ

雑音の中和剤なら少しある
和歌山市 山川 克子

車にもよりけりそれに運転手
鳥取県 土橋 はるお

打出の小槌が一円玉を噴いている
岡山県 千原 理恵

天皇が好きですぐ後追い逝かん
岡山県 塩見 美代子

幸せの未来をさがす眼鏡拭く
八戸市 島田 昭治

仙人になろうか世の中汚れ過ぎ
八戸市 島田 昭治

出雲市 森山 健歩
射程距離相手にとつても射程距離

和歌山市 福本 英子
三步後行く癖抜けずフルムーン

堺市 高橋 千万子
客分でせかしも出来ず茶をすする

宝塚市 丸山 よし津
ペアルック打ち合う球も初夏の風

鳥取 西尾 呼風
茶道より娘ゴルフに熱を入れ

大阪市 渡部 さと美
捨て上手になつたら若くなりました

堺市 桜沢 あかり
黒子には黒のやすらぎホツとする

豊中市 桜塚 三丁目13-15
* 橋高薫風宛(ハガキに3句)

投稿先 千560

NHK川柳募集

課題「誘う」 選者 橋高薫風

締切 6月10日

(ハガキに三句以内)

投稿先 大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局「ふれあいラ
ジオセンター」川柳係

発表 6月25日(日)ラジオ第一放送
午前11時5分から

尚香のむ

小出智子選

植えてから八年になる柿の種

富田林市 藤田 泰子

ありがとう冬を飾ってくれた花

大阪市 西出 楓楽

春の海 文学的に暮れてゆく

和歌山市 田中 輝子

過去帳を疲れた鬼が繰っている

和歌山市 平松かすみ

カーテンを引く想像はご自由に

大阪市 島村美津子

じいちゃんとはあちゃんになる菊の頃

寝屋川市 吉川 寿美

アドバールン上げたい程のよい電話

和歌山市 後藤 正子

反核の署名簿がある花の寺

和歌山市 奥田みつ子

病窓の春ほろほろと散り急ぐ

香川県 上藤 多織

離れると存在感のある桜

西宮市 堀畑 靖子

飾らない言葉が耳によく馴染む

高槻市 河瀬 芳子

迷走のままで彼岸へ着くらしい

西宮市 西口いわゑ

姫だるまやさしい顔で起き上がる

和歌山市 堀畑 靖子

猿山へ来ては私をとり戻す

八尾市 高杉 千歩

水に流した耳に雑音また溜る

八尾市 稲葉 冬葉

マルキで買った渦巻きパンを知ってるかい

寝屋川市 稲葉 冬葉

覗かれている気が肩のあたりから

鳥取県 西原 艶子

拾った犬とやつと目と目が合いだした

鳥取県 西原 艶子

頼み事仏の花を替えてから

米子市 茂理 高代

先頭の旗疑いもせずついてゆく

松原市 佐藤 藤子

夫の留守つまらぬことがふとよぎる

大阪市 鈴木 節子

他人とは思えぬ人と花の下

大阪市 上江洲勝子

葬式へしつこい初夏の風邪つれて

有田市 生馬美美子

風邪ばかり引いて主治医に叱られる

高槻市 笠嶋恵美子

散り時に散り平凡を繰り返す

和歌山市 西山 幸

どれ程のことか夫の身にもなり

尼崎市 春城 年代

水入らず鳴いた鴉がもう笑う

和歌山市 田中 みね

時たまに和から抜け出る夢をみる

和歌山市 山口三千子

雨だれのようにぼつりとくる返事

堺市 近藤 豊子

置き方を変えると視野を広くする

大阪市 堀 いくの

心にもりボンやフリルつけて春

弘前市 肥後和香子

おずおずと聞くびつくり箱に春

岡山市 川端 柳子

かぼちや畠で一つ脱皮をして帰る

名古屋市 藤井 高子

ひと色が足りない虹を描き続け

和歌山市 古久保和子

老いの坂ゆつくり歩けば混んでくる

大阪市 本間満津子

ユニークなレールを敷いて走り出す

米子市 服部 朗子

春がすみ私も少し春がすみ

藤井寺市 武部 敦子

ひじき炊くおふくろの味引き継いで

八尾市 向井しづ子

ゆつくりと行こうよ寿命延びている

大阪市 稲本 凡子

み仏も遙かな道をたどられた

米子市 青戸 田鶴

みどりの風に誘われて買う白い靴

竹原市 信本 博子

人生の谷間で見栄がまだ少し

堺市 板野 美子

愛抱くと風も優しい貌つくる

鳥根県 松本 文子

還暦におんな深ぶか鏡ふく
握る手が覚えていますあたたかみ
チューリップ今年も咲いてありがとう
秘めやかに語れぬものか猫の恋
日曜の雨は鬨う気をなくす
入院へ百日草も蒔いて置き
祖母の又祖母より受けし鍋磨く
黒柿のハガキが届く花の冷え
とても一途な愛が芽生えて春たけて
子報は雨何はともあれ握りめし
ふとわれにかえることありすみれ咲く
勉強は続けなさいと子に言われ
風邪の床用事次々思い出す
はるかに想う人がいるからがんばれる
偶然の誘いは軽く乗ってみる
夜桜に問わず語りの名せりふ
針箱に亡母が生きてる へら 鉄

米子市	白根	ふみ
和歌山市	前田	美子
大阪市	神夏磯典子	
米子市	新	正子
米子市	政岡	日枝子
姫路市	中塚	遊峰
寝屋川市	井上	すみれ
大阪市	津守	柳伸
岡山県	松本	元江
和歌山市	福本	英子
兵庫県	倉垣	恵美
寝屋川市	宮崎	菜月
池田市	林	すて
鳥取市	萩原	美雪
和歌山市	桜井	千秀
吹田市	栗谷	春子
和歌山市	内芝登志代	
八尾市	宮西	弥生
和歌山県	寺田	裕美
米子市	小村	てい子
岡山市	塩見	美代子
岡山県	千原	理恵
堺市	船越	志げ子
堺市	高橋	千万里
藤井寺市	楠	昭子

田舎にもいつの間にやら喫茶店
あれ程に吹雪いた夜が嘘みたい
隙間風暮しの唄を盗まれる
桜散る珈琲館にいるひとり
思い通りにならぬ不運な紅椿
わらべ歌乗せて野をゆく春の雲
孫が来て夫の不満解けている
昭和史を友と語って泣き笑い
ことさらに神馬にかかる花吹雪
二拍子で振り子が眠り誘いこむ
若葉風練り出す阿波の遍路笠
毛皮哀れ幾つの命こもりしや
春うらら心浮き立つピンク着る

静岡市 増田 ふみ
河内長野市 植村 喜代
富田林市 片岡智恵子
大阪市 田中 弘子
有田市 松井かなめ
米子市 川上より子
米子市 小塩智加恵
青森県 福士 トキ
茨木市 堀 良江
吹田市 井上 照子
姫路市 都里 遊光
摂津市 もちつき遊美
堺市 三浦 和子

ゴシツクの一句目。「桃栗三年」の諺をうまく取り入れて、ある期待をすつきり一句に表現されました。比喻としてこの柿の種は、単なる流行語ではなく、動かぬ柿の種です。二句目。あの有名な蕪村の句を思い出してのことでしょうか、文学的にはこの作者らしい表現です。三句目。思わせ振りでユニークな句「ご自由に」と突き放したところが楽しい。想像を逞しくしましょう。四句目。「菊の頃」でこの句を一層引き立て、孫と言わないところがこの句のいのち。作者の喜びがはつきりと見えます。五句目。反核の署名という現実的な事柄と、花の寺との対照が実に鮮やかな穿ちの句。

投句先 千544 大阪市生野区勝山南1-18-10

小出 智子(ハガキに3句)

過去捨てて簡易ホテルに住む孤独
PTAの議題にされているホテル
ラブホテル女が払う愛もある
点滴が無ければホテル暮しです
ラブホテル別れ話をしています
米を研ぐ朝を忘れていたホテル
一流のホテルで詐欺にひっかかり
月面にホテル建つまで生きのびる
飯面まだ付けたまんまで出るホテル
人の世の情けを買いにゆくホテル
梅干しを連れてホテルの客となり
ホテル出てきつねうとんを喰いにく
大空を四角に切つて建つホテル
祝日のホテル不倫が詰つてる
一流のホテルに靴が怖じ気づく

住
カーテンは黙つたままでいるホテル
式挙げたホテルで別れ話する
缶詰めのホテルに独り耕目埋め
ホテル出るこれで終りだなと思つ
フォーカスのレンズが待つているホテル

人
自動ドア犬もホテルへ泊る気か
富士山を望むホテルで妻になり
天
ホテルの灯窓の数だけあるドラマ
ラブホテル出ると飯面に用はない

純 三 遊 野 弘 兼 野 遊
男 男 治 美 草 朗 治郎 美 美 美
子 男 治 美 草 朗 治郎 美 美 美

近 い

岩本雀踊子選

近火見舞選挙がらみの人も来る
ライバルが私の椅子に近くなる
子に渡す地図に近道など書かず
しあわせが一番近いとこにあり
故郷に近づき風が暖かい
愚痴を聞く一番近い妻の顔
亡き母の姿に近い齢になり
晩酌がふえ嫁がせる日が近い
遠方に居ても心の近い友
地図にない近道だつてあるはずだ
八人目の敵がうろつく至近距離
近道を朝の豆腐を買いに行く
ご近所の噂を運ぶ路地の風
少しでもあなたに近い席をとる
退院を間近と信じ指を折る
ご近所の噂遠くの人に聞く
大蔵省に一番近い喫茶店
親戚は近いが川が流れてる
入学が近く嬉しい日が続き
近道はしない真夏の蟻の列
近すぎて静かな愛がわからない
近づいた運があかんべして通り

素身郎 兼治郎 大柏 艶子 信義 洛醉 敦子 重人 有一朗 あすなろ 多織 明水 都姫子 理恵 三千子 小 鹿 白 溪子 和子 照子 清柳

父母の近さをいつも忘れてる
花道の近くで敵に狙われる
一番に近い自分を信じたい
近い道ばかり探して行き着かず
人生に近道はない立志伝
近づいて見ればピエロの素振り
神様に一番近いロバの耳
味噌汁が冷めぬ近さで煙がられ
近道をしてまで檜山には行かぬ
毒舌も近い身内の情かも

佳
どの道も近道は無いかたつむり
ほんとうの敵は身近に棲んでいる
我儘な妻の実家が近過ぎる
本心を一番近い木に吊るす
千羽目に近い鶴ほど頼られる

人
僕の矢が的の近くにきて落ちる
近道がある野良猫の身のこなし
近道を知らない夫の軍手干す
一番近い母の情が邪魔になる

天
可住 早苗 正子 正坊 朴竜 玉恵 雄々 玉恵 可住 文平 静子 倫子 惠美 保良 緑良

■訂正 5月号の本社四月旬会(79P)の「飼猫が隣の暮しと比較する」の作者名、白光子は白溪子の誤りでした。

(編集部)

初歩教室

題 — 傘

阿 萬 萬 的

今月の課題「傘」について。辞書によりまして、笠や傘は別のもですが、今回は合せて選句させていただきました。

蛇の目傘母の面影まだ残る

喜与志

物置の蛇の目と亡母の懐古録

方子

(物置に亡母の蛇の目がまだ残り)

七回忌今でも母の傘の中

治

条件をつけない母の傘に入る

美代子

下五の傘に入るは、軽く「ひろい傘」では

如何ですか。次は父の傘を

風雪から家族を護る父の傘

三千子

それぞれに気配り多い父の傘

静子

破れても骨組強い亡父の傘

サワ子

父の傘やと解った三回忌

三津江

その次は夫婦傘です。

夫婦傘時には飛ばされそうになり

しづ子

喜怒哀楽二人が傘で包み持つ

美美子

(喜怒哀楽を包む二人の傘がある)

他人にはなれぬ夫婦の傘である 清柳

ここで少し趣向を変えて、自然の中に

菖蒲池女傘での落つ滴 しんじ

(菖蒲池女の傘が絵の如く)

傾けてさせば絵になる蛇の目傘 雅子

悔い残し蛇の目を畳む雨上り 章久

花びらが日傘の上で春惜しむ ひさ子

花吹雪蛇の目の傘が欲しくなる 正子

花ぐもり蛇の目が似合う春の雨) 方子

霜除けを願ひ花にも傘をさす

ともあれ京都は蛇の目の似合う街です。 遊光

霧雨に京は蛇の目の似合う町

(五条坂京は蛇の目が似合う街) 勝美

京情緒野点のお茶の大日傘

(京の春野点へ赤い大日傘) みね子

野仏に傘さしかける菜種梅雨

旅先で雨に出逢った句もありました。 宏安

温泉地旅館の傘でツケが効き

温泉の列団体さんのスケジュール 好美

傘の列団体さんのスケジュール 信一

宿の傘広告料は自分持ち

(広告料もはいた宿の傘を借り) 喜与志

シャンシャンと鈴雨乞いの傘踊り 美恵子

傘踊り故郷想うテレビ見る

(傘踊りのテレビへ故郷ふと想う) 照子

旅の香を残した傘を窓に干す 登代

(雨女とわかつていながら旅が好き)

雨女傘の長さのバッグ買い 義

(雨女傘に合わせたバッグ買う) 明吉

そして忘れもののNO・1は傘ですが、

ロッカーにビニールの傘亦たまり 明吉

やれやれと傘網棚に忘れて来 みね

終電車にボツンと傘も淋しそう 敬

雨上り駅長室にエフの傘 高雄

忘れ傘棚に孤独に病んでいる 富恵

忘れ傘赤いリボンが巻いてます 失名

(赤いリボンがついたまんまの忘れ傘)

だからと言ふ訳ではないが、 小鹿

天気に関係なく傘持っている

(天気に関係なくコーモリを持ち歩き) 昭治

アルバイト傘は忘れずバッグに入れ

(傘は忘れずバッグに入れてアルバイト) 金吾

忘れてもいいという傘妻渡す

(忘れてもいいよと妻が渡す傘) 信一

また迎え傘が駅まで来ていると思うと

傘抱いて駅で待つ子へ盃を伏せ かつみ

寄り道は出来ぬ駅まで傘が来る 信一

(傘持って待つ子へ寄り道止めにする)

俄雨新婚浮き浮き迎え傘 繁男

(新婚さんらしくいそいそ迎え傘)

俄雨には、いろいろなことがあって

見ず知らずの傘に甘える俄雨 みね

借り傘の赤に照れてる俄雨

通り雨知らない同士軒借りる

俄雨借りた傘から縁結び

サービスに傘も貸しますママの知恵

自意識が過剰で傘に誘えない

師に傘をかけて右肩濡れて行く

くたびれた傘置き傘で甦り

傘返しに行つて雨となる長居

(傘返しに行つて長居となるおんな)

みなさんは善人ですね。相合傘となつても

相合傘不倫じゃないの夫婦です

女房と相合傘は照れ臭く

齢を知る夫と派手な傘をさす

誰も見てぬ相合傘の老夫婦

相傘に六十路の胸の血が騒ぐ

(相傘に六十路やっぱり血が騒ぐ)

ここで一寸、趣きを変えて子供達の世界を

花笠で稚児行列の御練日

よちよち歩きの孫が欲しがる赤い傘

傘と足だけが見えてる一年生

梅雨晴間傘でチャンバラする下校

傘ばかりこわして帰る三年生

童謡に僅かに残る蛇の目傘

ちよつと違つが、恐ろしいものに核の傘

核の傘とっても頼りない平和

核の傘平和日本置き忘れ

良三

美子

喜代子

結美

信義

遊峰

露芳

すみれ

すみれ

由梨

菊枝

艶子

保夫

金吾

秀香

秀香

秀香

秀香

秀香

和子

和子

和子

由梨

由梨

由梨

由梨

アメリカの傘はみ出して採めている 蜜拙

核の傘の次はお月さんの傘を

白木蓮咲いて暈き春の月

傘さすお月明日を雨だつとける

(傘をさす月があしたは雨と言つ)

お遍路さんのすげ笠の匂もありました。

すげ笠の遍路姿の行者徑

(すげ笠の遍路へかけろう立つ小道)

最後にいろいろの傘を見つめてみよう。

万歩計雨が降ります傘を持ち

(万歩計へ雨降りそうよと傘を出し)

小道具に傘をつかつてひとを避け

(傘すばめいけなない人を避けて行く)

鉄傘でゲームセットで静と動 香子

(ゲームセットで動きはじめた大鉄傘)

小川での水嵩増しを傘で見る しんじ

(水嵩見てる警防団の傘の列)

緑日のビーチパラソル人に揺れ 隆雄

(人と埃に揺れ緑日の大日傘)

金と傘貸したら返つてこないもの 義

(金と傘貸したら返らぬものらしく)

葬列の長さよ傘の大きさを 弘子

(小雨降る葬列傘の列長く)

花道を相合傘で幕は下り 明吉

(道行きの相合傘(幕は下り))

捨て猫にセーラー服の傘が寄り 清柳

綱渡り傘で調子をとるも芸

楽書の傘に嫉妬もこめてあり

骨折れた傘でわびしい夕景色

傘なくて嬉しいことに不馴れです

断りの隙を与えぬワンタツチ

パーゲンの傘がなかなか毀れない

若い気も洋傘杖で老いを知り

派手な傘さして少しは若く見せ

若き日の涙をたたむ蛇の目傘

傘立てに親子の傘が小競り合い

傘の内女の足は背伸びする

素浪人セットで傘貼る映画村

傘の滴見て雨と知る地下の街

傘の下情に濡れる車椅子

ありのままを言っただけでは詩にはなりま

せんし、川柳は仲々むすかしいですね。では

また来月を期待しています。

一乗

しづ子

和子

和香子

高鷲亜鈍さん さようなら

東野 大八

詩人藤村青一氏死去の連絡をうけた時、私は素然たる哀悼の想いのなかで、川柳詩人高鷲亜鈍の名において心からなる御冥福を祈ったのであった。

亜鈍の名は『川柳雑誌』時代、いくつかの川柳詩論の稿でおなじみで、そのなかで感銘深かったのは「水府氏の真意とする」本格川柳は、現代川柳に存在あらしめるためには——当然ながら——僕の思考する散文川柳であったということを知った。散文川柳とは詩川柳と対向する散文精神(リアリズム)による十七字数散文句をいうことになる(川雑昭35・5『柳論を吐く人達』)というくだりであった。いま一つは同じ川雑へ「須崎豆秋論」七十枚を寄稿された(昭33・6後記「三夫」)ことである。私の推測ではおそらく亜鈍さんが、失明という人生最大の悲運に逢着される寸前の、いわばこれが最後の柳論ではなかったかと思

う。

私は亜鈍の名による『詩川柳考』も『白黒記』も手にすることなく終っているが、昨年『藤村青一作品集』の美本の惠贈を受けた。その本に「傘寿記念青一」との署名紙があった。青一の字は、ゆがみにしんでいて、私の肺腑を鋭くつき刺した。盲目の詩人の、それはここからなる友誼の証ではなかったか——お互いが身障者という惻隠を離れての直情ではなかったかとも想う。

感銘深いこの本の「あとがき」を記された三木英治氏の長文によると、亜鈍こと藤村青一氏はすばらしい詩人たる詩跡の持ち主で、私の如き草味の後輩の遠く及ばざることを痛感した。

亜鈍さんと初めてお逢いしたのは、五年前の、私の東洋樹賞受賞祝賀会であった。不自由な身で、夫人に手をひかれ会場に姿を現わした亜鈍さんは、心やさしき薫風さんの一箸

川柳塔まつえ

復刊20周年記念川柳大会

日時 6月11日(日)午前10時開場

会場 松江市中原町 婦人会館

当日会費 三〇〇〇円(小宴を含む)

第一部 事前投句(出・欠席を問わず)

宿題 「相 手」 古割 舞吉選

「ふくらむ」 小西 雄々選

「 席 」 津川 紫吻選

第二部 (出席者のみ)

宿題 「横 顔」 恒松 町紅選

「才 能」 本庄 快哉選

「 味 」 久家代仕男選

「スタート」 小林由多香選

「 末 来 」 田中 好啓選

「 旗 」 大森風来子選

「 旅 」 西尾 棗選

柳話 川柳塔社副主幹 橘高 薫風氏

各題2句、席題なし、出句締切正午

ごとの食膳の一品一品を口にうけて、ニコニコ談笑されている姿は、今も昨日のように忘れることはない。この姿が私にとっては正に一期一会であった。ここにここからの哀悼を捧げる次第である。

亜鈍君を偲ぶ

大坂形水

亜鈍君が亡くなった。淋しい……。

葬式の日家族の方も言っておられた「ほんとに、お父さんらしい逝き方でした」と、朝風呂に入り、体も洗い、気持よく湯につかって、悠々と往生されるなど、全く亜鈍君らしい最後である。

六十年來の亜鈍君との長いつきあひの中には、いろいろの思い出があるが、今も懐しく思い出されるのは、今から五十余年前、職場を同じくした樋口商店時代のことである。(その当時、彼は既に詩集『櫻籬』を出版、詩人間に知られていたことを後になつて知る。)

そして、亜鈍君の主唱で、趣味、教養を兼ねた『羊』という小雑誌を刊行して、亜鈍君をリーダーに僕らは、川柳、俳句、随筆等を盲蛇に怖じずで旺んに書き、取引先などへも送り、一寸した反響もあつて、大いに得意になつたものである。

その『羊』誌、発刊の主旨を書いた亜鈍君

の「巻頭言」を今読んで見て、当時、二十九歳の彼が、いかに高い見識を持っていたかを、また商人の僕らが、彼の啓蒙に依つて、知らず知らずのうちに、文芸等にも眼を開き、古い商人の殻を脱けて行つたかを今になつて知り、一層、彼を追慕する思いが、たかまつてくるのである。

その僕らには懐しい、勉強の雑誌でもあつた『羊』誌に残る、亜鈍君の「文章」をここに紹介して、波瀾万丈とも言える一生だつた亜鈍君を偲び、心から冥福をお祈り申し上げたい。

羊の言葉

高鷲 亜鈍

本誌は樋口商店の發行になつてゐるからといつて、決して商店の宣傳雑誌ではない。

川柳や俳句を用ひて商賣の宣傳に供する程、藝術を冒瀆する者でもなく、若し商賣の宣傳をするにしても其んな馬鹿げた方法は殊更採るには及ばないと思つてゐる。私達、本誌刊行の主旨は、其様なちつぽけなものでなく、もっと大きい問題である。一体私達商賣人が

算盤を持たなかつたら、人間としてどれだけの値があるのかしらん。今だに官吏や軍人や教

職業者と比較して知位低くみられ勝たぬのは、封建時代からの商人根生がまだまだ絶たれてゐないからではなからうか。私達は私達の位置を高めるために、もっと商人を高揚しなければならぬ。商人を高揚する爲には一まづ私達も一個の人間であるといふ事を全幅的に認識しなければならぬ。

私達は商人である前にまづ人間であらうとする。其故に私達は斯ういふ川柳や俳句を勉ぶのである。そして川柳や俳句ほど、一方このやうな職業を持つてゐる者にとつて手軽で經濟的な趣味も亦他にない。川柳や俳句ほど人間性の絶對性を獲得するに便利なものはないからだ。解つてゐて解つてゐないといふ偏狭な商人は近代の商業界からは没落するであらう。私達はさういつた過去の商人を止揚し、商人の絶對性に生きやうとする。近代商人としての高邁なる人格と陶冶をもつてして、卑劣な商業界を革正するのだ。藝術が商賣の仇敵のやうに考へてゐた時代は過ぎた。日本商人も亦、日本正統の文學を樂む事によつて、世界的商人として意義づけられるのである。つとに外國の商人にして藝術の理解を持たぬ者は皆無といつて可いと思ふからである。

(昭和十一年十月記)

— 漢字・仮名づかい 原文のまま

高鷺亜鈍さんを偲ぶ

里 小路

亜鈍さんが珍しく「久し振りに一べん、小路さんと一しょに一ばいやろうやないか」と柳友一途さんに言付けがあり、二人で都合をつけ合っている矢先に突然の訃報、何とも言い知れぬ思いで愕然とした。その機を逸した数日が残念でもあり、悔まれてならない。

隣町に等しい寢屋川市三井ヶ丘に、川柳句会開催を新聞で発見、胸躍らせて早速、参加した。私と亜鈍さんとの出会いはこの日、昭和五十年五月であった。川柳不毛の地寢屋川市に芽生え、その後、会名こそ変われ、ねやがわ川柳会に発展した。ねやがわ亜鈍の周囲には、常に薫風、紫香、柳宏子の三氏を中心に、川柳塔ねやがわ川柳会が羽ばたき、育成されて来た。功労者である亜鈍さん。

四月十五日、川柳批評家藤村亜鈍氏逝く。翌十六日の告別式が、ねやがわ川柳会の月例会会当日だったのも、奇しき縁と言えるだろう。

告別式に遠く岡山から参列された盟友『川柳ますかつと』主宰の大森風来子さんが、当日下午からのねやがわ句会で柳話をされた。

その中で、旧友亜鈍とともに麻生路郎との思ひ出、反骨の共通など興味ある話を拝聴することができた。そして亜鈍さんの川柳に対する姿勢、常に感動ある川柳作句を提唱されていたことを説かれていた。

三井ヶ丘初訪問に君は亡く 風来子

昭和五十三年春、寢屋川市立中央老人福祉センターに川柳会（娛老会）を開き、私とともに老後のやすらぎにと初心者にも二回の例会を行い、現在なお盛會裡に続行、また、市立公民館では、昭和五十六年に川柳教室を開催、終講と同時に花の輪川柳会を結成、私も助手の一人として今日に至っているが、会員の中には川柳塔同人が数名生れている。初心者への指導にあのご不自由な身体であたられ、その情熱は到底、私たちには真似ができなかった。

亜鈍さんと私は十余年の付き合いで、「白波党」であった亜鈍さんと酌み交ししながら、川柳あれこれの話に花の咲くのが常と言えば聞こえは良いが、脱線しては中座もしばしばで「わしも頑固やが、小路も頑固なやつちゃ」

と、ご家族に言われていたらしい。どこか馬が合ったのかよくお訪ねしたが、ご不自由な身体のせいも、家庭では気むずかしい亜鈍であり、時には気ままな亜鈍にも見えた。

最近では、川柳作句にも数年前程の情熱は見られなかったが、これも体調のせいと思われ、今年二月頃から選句者としても第一線から退かれていた。

川柳に欠かせぬ「愛・生・住」を称え続け、川柳を志す者には、

「人生と川柳」

人生を語ることは、川柳を語ることで、

人生を考えることは、川柳を考えることです。

人生を記録する為に、川柳を作りましょう。

今日を大切に、昨日を省み、明日を希う。

愛故に、明るく、美しく、真実に。

そんな人生でありたい。

そんな川柳でありたい……と。

『詩川柳考』『白黒記』など、不滅の著書は有名であり、寢屋川市立図書館には蔵書の数多を寄贈されている。

悠々と殿りをいく身のゆとり 亜鈍

私の忘れられない句であり、亜鈍さんの我々への川柳の遺産を大事にしてゆきたいと思う。ご冥福を祈る 合掌

白波で待つて居るぞがもう聞けず

小路



父亜鈍への追憶

藤村 亜成

こころ、二年、急激に衰えの目立つた父に、往時の影は薄く、いざという時の覚悟はあるまいし、今さら、涙を流すことは決してあるまいと思っていた。その日も前の晩、いつものように薩摩白波をやり、明け方、神棚に向う前に、身体を清めるための入浴中の出来事であまりに突然の死に、葬儀を済ませた後も茫然としていた。いつか、俺は愚鈍だから、死

際には阿鼻叫喚、悶え苦しんで絶対にあっさりとは逝かんなどと言っていたのに、見事に裏切られた。一日中、言葉では説明のつかぬ感情が支配し、涙がところ構わず溢れて仕方がなく、どうしようもなかった。現世における父との終焉が、こんなにあっけなく訪れるとは、想像もしていなかった。

失明前の父は、四つの名前を使い分けていた。藤村誠一、藤村青一、香川登、高鷲亜鈍と、それぞれに父の人生を示唆する複雑な意味合いを持っている。父の部屋の書棚に今も詩や川柳関係の雑誌に執筆した切り抜きものスラップがきちんと整理され、失明前のその夜の記録に目を通せば、眼の痛みも忘れ、夜

を徹して原稿を書いていた頃の記憶がまざまざと蘇る。

宿痾の眼疾、緑内障を患いながら、三十六年、柳論『詩川柳考』を発売したが、意を尽くせぬところが多々あり、後年、何とか加筆・改訂したかった無念さを何度となく聞かされた。ことにその展開の動機となった麻生路郎論には、自信を持っていたにもかかわらず、省かざるを得なくなっただけきさつがあり、いっそう不完全な気持を募らせていたようだ。『川柳雑誌』三十三年新年号に「麻生路郎の川柳人的立場」——一行詩人に言及す——という見出しで、路郎論に触れた文章が一頁にわたって記録されているが、それ以外に父の埋もれた原稿を何度となく調べてみたが、ついに発見できなかった。

気が短くて怒りっぽく、議論が好きで、筋道を通し、安易に妥協しない父。年若い頃の息子でも、理に合わなければ容赦なく牙をむく反面、浪曲が好きで義理・人情にもろいところがあった。そんな父も三十八年、尾道へ移住し、三十九年に完全失明する前後の苦悩

は、想像を絶するものがあつた。当時を振り返ってあの辛い時期が最も懐かしく、充実していたように思えるから不思議なものである。そんな時に、詩や川柳を通じて知り合った人たちとの出逢いにより、当時の生々しい苦悶の歴史を綴った『白黒記』が生まれたことは父にとって大きな幸運であつた。一方では人々の愛によって生かされ生きている自己の認識を、身をもって体験し、その思いはいっそう神に向い、信仰心を深めていった。

四十六年終り頃、寝屋川の団地へ移転してからは、何度となく父の杖代りになり、詩や川柳の公の場に出席した。その頃の父は、何時も誰はばからず、裸そのものであつた。盲目なんだから黙って控え目にしてくれればと願っていても、億面もなく本心をストレートに出し、表裏なく率直に堂々と意見を述べるので、側にいる僕は何度、どきまじハラハラさせられたことだらう。

その頃、父の提唱で開かれた団地の小集句会も、今では立派な樹に生長し、文学を通じて実に多くの素晴らしい方達とめぐり逢い、それらの方々の愛情と支えによって生かされてきた晩年の父は、果報者であつた。そして今は只、あの時無性に流れ出た偽りのない透明な涙を、自己の意志に忠実に生きた父の証と決して忘れぬことを誓うのみである。父の生存中、永い間ご厚誼を頂きました皆様に紙面を借り、心からお礼申し上げます。

中田白李さんを悼む

吉原 紅月

白李さんのご葬儀に参列し、旧国鉄時代からの先輩として、また、私たちの「川柳あしなみ会」の元老として指導・助言と一方ならぬお世話になった白李さん、ほんとうに長い間、ありがとうございました。

私が特に印象に残っているのは、赤穂線が

第13回全日本川柳大会

日時 平成元年6月11日(日)午前10時

場所 日昇館ホテル 長崎市西坂町210-1

宿題 第一部(事前投句締切)

「男」 小林一声 選

「つなぐ」 森本清子 選

「旅」 池田可宵 選

宿題 第二部(当日出句、締切12時)

「再会」 高橋春造 選

「天気」 亀山恭太 選

途中備前の「日生駅」まで開通営業を始めた当時、白李さんは「日生駅」の助役として赴任され、お忙しい中を「日生諸島の大多府島」に、大鉄川柳会の吟行句会をお世話下さったことです。当時は寝具から食器まで島へ運び込むという状態で、島の自家発電も夜八時までのだけの送電だったと記憶しています。大阪

から水客、萬的、白湊子さんのほか多くの先輩と一夜を楽しく過ごし、翌朝、島回りも案内された想い出が昨日のように臉に浮かびます。さらに白李さんの、「ご多忙の中にも「古備前」の茶器でお茶を楽しまれるという心のゆとりには、感銘を受けました。第二の職場

として「旅行社」に勤められてからも、各地の銘石を集めたりして楽しんでおられたのを思い出します。

式済んでからの財布は嫁が持つ

信じざる女は許すものを持つ

占いを信じた足がもつれだす

一見、謹厳居士のような白李さんに、こんなユーモアと温かい人間味が滲み出ています。まだこれから川柳界のために、私たちの「川柳あしなみ会」のために活躍してほしい先輩であったのにと悔まれてなりません。今はただ謹んでご冥福をお祈り申し上げます。合掌
冥土でも白李で通すお人柄 紅月

「高い」 藏多李 選
「祈り」 高谷梵 鐘 選

各題2句各部各題とも未発表作品に限る。

会費 二、五〇〇円(昼食・記念品代共)

表彰 文部大臣奨励賞 一名

川柳大賞 一名

大会賞 十四名

大会参加のご案内

観光 6月10日(土) 12時30分 日昇館ホテル

長崎駅―大浦天主堂・グラバー園―十六番

館―孔子廟―二十六聖人―平和祈念像―原

爆資料館 費用 四、〇〇〇円(飲物付)

(定員五十名にて締切ります)

前夜祭 6月10日 午後6時―8時

費用 八、〇〇〇円

宿泊 日昇館ホテル 宿泊費 八、〇〇〇円(一室)

2人希望の場合は一人に付き、三、〇〇〇円加算)

当日(10日)前々日(9日)の宿泊を明記。また同室希望者の名前も明記下さい。

大会参加連絡先 二六五 長崎市中川三二二

三池田可宵 振替口座 長崎二四五〇

日本川柳協会

柳界展望

集録一編・武庫坊

★だいたい一番傘創立10周年

山本翠公句集『火山系』、発刊記念川柳大会が4月16日大東市立市民会館大ホールで開催。本社から八木千代氏（米子市・参事）が宿題「席」の選者として出席、

小出智子氏（大阪市・常任理事）が同題で秀句賞を獲得、「茴香の花」コンビの活躍が目立った。

座布団を一枚敷くと私の席 小出 智子

★ふあうすと川柳社では、創立60周年記念川柳大会を4月29日神戸市立勤労会館で開催。本社から西尾栗主幹が選者として出席、祝辞を述べ独自のユーモアで満場喝采。出席者三百二十名。本社同人の両氏が秀句賞を獲得した。

開発が進んで町の忘れも
の 林 はつ絵

階段を登り切れない神と
いる 春城 武庫坊

★尼崎春の川柳大会が5月7日、サンシビック尼崎で開催、次の本社同人3氏が秀句賞に輝いた。

この帯に消えない結びじ
わがある 春城 年代
女かな 細い縁が断ち切
れぬ 奥田みつ子
いざと言う時の白旗持っ
ている 河内 月子

★各柳社の1988年度の各賞は次のとおり。

川柳きやり吟社 周魚賞
鈴木哲茶・浅田扇塚坊

川柳美す吟社 年度賞
吉川義弘・中澤恵生・高木まさ子・手塚映城・松本光子

時の川柳社 ときせん賞
小山紀乃

ふあうすと川柳社
ふあうすと賞 萩原草月・
中野加代・中川一・若草は
じめ▼紋太賞 杉野まつ子

湯田ゆみ子・吉川義弘・木

本如洲

▽同人消息△

■山内静水氏（竹原市・参事）は、『川柳春秋』13号に「君、川柳は下手でいいんだ、情熱だよ」と題して執筆。また、河内天笑氏（堺市・常任理事）の作品が同

号の「一人50句」に収録。
■川柳松江番傘 誌5月号に「川柳塔鹿野みか月川柳会」の森山盛桜・土橋螢中原諷人の三氏が紹介されている。

■野田素身郎氏（倉敷市・理事）40年の公務員生活に終止符を打ち定年退職されました。永年のご勤務ご苦勞様でした。田中好啓さんからお知らせ頂きました。

▽句集刊行△
■新家完司川柳集
『平成元年』A5判九四頁（頒価千円・千二百円）

■山本翠公川柳句集
『火山系』A5判二二二頁（頒価二千円・千三百円）

大東市御供田2-21-16

▽お便り△

■久家代仕男氏（平田市・本社参事）4月1日尼緑之助氏一周忌法要に当地方同人出席ご親族の方々と親しく懇談いたしました。5月21日の追悼川柳大会には何分のご後援をよろしくお願

い申し上げます。

■千原理恵氏（岡山県・本社同人）4月末におこがまあうすと川柳社副主幹（幹）発刊いたしました。序文を土居耕花さんに書いて頂き感無量でございます。

かざ車からから淋しく廻ります

▼計報▲

■山本哲郎氏（明石市・ふあうすと川柳社副主幹）かねて入院療養中のところ4月26日逝去。弔哀悼

新同人紹介

舟渡杏花
— 薫風・紫香・はつ絵推薦

千原理恵
— 紫香・薫風・妻子推薦

松本元江
— 紫香・薫風・妻子推薦

神泉苑の雨乞いくらべ

布施 幸子

「きよの天神さん、雨でワヤどすなあ」
 「そうゆうたら、弘法さんの天気がよすぎ
 ましたわいな」

「なんせ、天神さんと弘法さんは仲が悪お
 すさかい、ハハハハ」

「ほんまどすなあ、ハハハハ」

京都には、こんなあいさつがある。

毎月二十一日は、弘法さんのご縁日で東寺
 がにきわい、二十五日は菅原道真を祀る北野
 天満宮に市が立つ。ところが、天神さんと弘
 法さんは不仲だから、一方が晴れると一方は
 雨になる、というのだが、お天気は気まぐれ、
 両日とも晴れることも、雨のことももちろん
 ある。

「停戦の月もあるんですか？ そやけどお
 二人の仲がわるいという話自体、けつたいや
 おへんか。それやし、仲のよしあしと空もよ
 うとんで関係がありますのや？」

などとこてつく人はいない。要は「おはよ
 うさん」「ごんにちわ」「お暑いことて」「寒

おすなあ」同様、つきあいをなめらかにする
 ための言葉のやりとりなのだから……。

天神さんと弘法さんの不仲論はさておいて、
 「弘法さんと守敏さん」の仲がよくなかった
 話は領けなくもない。

桓武天皇が平安京を造営した際、羅城門を
 はさんで東寺と西寺（現在は跡地のみ）が建
 てられた。同格の官寺で、八二三年、東寺は
 弘法大師に、西寺は守敏大僧都に贈られた。

「釈迦に提婆のうれいあり、弘法に守敏の
 うれいあり」とか、偉いお方にも気になる存
 在はあるものだ。王城鎮護の大役をになう東
 西の高僧どうし、ライバルを意識せぬわけに
 はいかなかったことだろう。

さて、弘法大師と守敏大僧都が、東寺西寺
 の主の座にいた翌年のこと、京都は空梅雨
 のまま夏に入り、大旱魃となった。

太古は湖の底だったといわれる京都は、平
 安遷都の前には沼地が多く、ぬかるんだ土
 地で雨に弱かった。とくに梅雨ときは困った

よつだが、かといって日照り一点張りとなれ
 ば、これまた一大事である。

今なら氣象台へ問いあわせるところだが、
 当時は雨乞いがおこなわれた。帝は、弘法大
 師と守敏大僧都を召して、神泉苑で祈禱をな
 し必ず雨を降らすように、と命じられた。

現在、二条城のそばにある神泉苑は、その
 ころは今と比べられぬほど広大だったという。
 南北四五〇メートル、東西二二〇メートル、
 池を中心に野原が広がり、豪華な御殿の立ち
 並ぶ天皇貴族のための遊地であった。狩り、
 花見、舟遊び、歌の会などが催され、歴代天
 皇の行幸数知れずといわれている。

池水は清く豊かに湧き出て、「どんな日照
 りにもかれることがなかった」と記録に残り、
 神の泉として雨乞いや病い封じの祈りの場と
 もなっていた。弘法大師と守敏大僧都は、そ
 の神泉苑で降雨の法力を競うことになったの
 である。

「では私がお先に」と守敏大僧都が申し出
 たのは、先んずれば人を制す、と考えたから
 かも知れない。すぐさま神泉苑にこもって一
 心不乱に祈りを捧げた。

すると、一天にわかにかき曇り、バラバラ
 パラと雨が降ってきたではないか。ところが
 「しめた」と気をゆるめたのがまちがいのも

と、とたんに降りやんで、あとはどう様子方を工夫しても一滴も落ちてこない。とうとう修法期間の七日が過ぎてしまつて、選手交替と相なつた。

そこで弘法大師の登場である。

厄除け大師、子安大師、種まき大師などとスーパーマンだった弘法さまは、とりわけ雨乞いが得意だったと伝えられる。不首尾の守敏大僧都に代わつて、ぜひとも雨を降らさなければと、神泉苑へかけつけた。

ところがどうしたのか、連日のきびしい修法をよそに、雲一つ浮かんでこないのである。カンカン照りもいとこで、七日目の朝が来てしまった。まだしも雨をバラつかせた守敏の方がましだ。夕方には修法の期限がきれる。大変なことになつた、と弘法大師は最後の念力をふりしぼつて心眼を開いた。そして驚いた。見渡すかぎり水神の姿がない。水神が働いてくれなければ雨の降るわけがない。「みなさん、どこへ隠れはつたのやろ」とよく見ると、「ああっ」。なんと水神一同が瓶のなかに詰めこまれ、身動きできぬありさまが透視された。しかも、さらに驚いたのはその瓶の封印の主が守敏大僧都だったのである。

(その瓶というのは、女人高野で知られる奈

良室生寺の五重塔の先っぽの宝塔だと聞いたことがある。室生寺の堂塔は弘法さまが建立したという伝えがあり、ならばあくどい守敏大僧都のやり方ではないか)

ところで弘法大師は、「万事休す」と諦めたりは決してなさらなかった。心眼、という超能力をフル活用して、修法の期限切れ寸前に、阿耨達池にたつたお一方ひそんでいた善女竜王を見つけたことに成功した。

阿耨達池は、ヒマラヤの北方にある周りが三千二百二十キロもの特大池、岸がぜんぶ金、銀、瑠璃、玻璃の四宝で固めてあるのだからビックピカ。池の水は四つの大河となつて流れたし、インド全土をうるおしているとか。

このすばらしい池の主人公は竜王中の竜王であり、さしもの守敏大僧都も手におえなかつたのだろう。と書く、善女竜王がたいした女傑に思われるが、以前仏画でお目にかつた際、「気さくなおばさん」といった感じが意外だった。かえつて威力を信じたくなつたのをおぼえている。

(では一度、阿耨達池を見物にインドへ旅行しよう、なんて考えてもちよつと無理。なにしろ仏教世界での想像の池なのだから)

ともかく、善女竜王が弘法さまの願いに応えて蛇の飛車に乗つて神泉苑へ直行、金色に

光る姿で池に入ると、さつそく都中に恵みの雨が降り注いだ。

雨乞い勝負は弘法大師の逆転サヨナラ勝ちで、善女竜王は神泉苑池に永久滞在の約束をして下さり、メダタシ、メダタシ、今も池の中におられるはずである。

以来、東寺は栄えに栄え、西寺はおとろえて亡びる運命をたどつた。という以上の物語、きつと弘法さまびいきの人が残したのだろう。神泉苑の法力あらそいの伝えに、たしかな記録はなんにもないらしい。

川柳塔社常任理事会 (5月1日)

出席者— 栗理事長ほか23名

▽西尾栗叙勲記念川柳大会の分担を決定

▽第4回川柳塔勉強会を7月10日・道後温泉

古湧園で開催することを決定

▽舟渡杏花(富山県)千原理恵(岡山県)松

本元江(同) 3氏の同人推薦了承

川柳塔用箋 (二冊二〇〇円)

送料が変りました。

一冊二五〇円・二冊三六〇円

※数量がまとまれば、「ゆうパック」にする方が大分、お得です。

本社 五月句会

五月八日(月) 午後六時

メンズフアツションセンター

連休明け早々の本社句会とあって、出席者は例年よりやや少なかったが、はじめに去る4月15日に逝去された本社相談役高鷲重鈍氏のご冥福を祈って黙禱。おはなしは河内天笑氏。初出席は大塚節子・浅野房子の両氏、今月の月間賞は高橋白兔氏が獲得。

(進行―岳人) (受付―泰子・美緒)

(記録―射月芳・月子)

出席者―天笑・柳影・勝美・公一・すすむ
照子・悦郎・寿美・柳宏子・庸佑・凡九郎・狸村・武庫坊・年代・房子・節子・小林英子・杜の・正坊・白溪子・満津子・典子・射月芳
重人・笛生・礫・いわゑ・紫香・美智子・章しげお・喜風・颯云児・白兔・悟郎・千秀・みね・章久・小路・吐来・敏・勝晴・ダン吉
仙吉・柳伸・栞・三男・薫風・文秋・萬的・史好・幸・金太・隆一・冬葉・シマ子・美幸
太茂津・昭子・美代子・翠公・智子・憲太郎
福本英子・利武・外吉・恭昌・あいき・白洋

英王子・頂留子・岳人・二三・美緒・泰子
度・雀踊子・寿子・みつ子・月子・元紀
席題「苗」 波部 白洋選

住みにくくなつたと苗が嘆いてる
お隣にあげた苗木がよく伸びる
美しくなりたくへちまの苗を買つ
苗一本一本ずつにある個性
校庭の思い出にある芋の苗
夢をかぞえるように小びとの苗を植え
休耕田苗を絶やしたツゲがくる
苗植えて夢は追わない事にする
期待した通りに咲かぬ花の苗
難関を越えエリート苗の苗のびる
トロ箱の苗床がある路地の奥
たくましく育つほつたらかしの苗
畑売ってから苗時にうなされる
苗一つどんな自分史書きなほる
歯にしみる縁を早苗持つている
あまり叱ると直ぐ曲がるうちの苗
胸底に疑心暗鬼の苗うつ
苗植えてもう算盤をはじいてる
僕に似てひょうろふ伸びる苗である
お手植への苗木平成お生さる
早苗取る唄が聞こえぬ機械植え
一応はその木になつて苗木市
グリーブの苗が嫁いだから孤独
金のなる苗がほしいとショッピング
早苗田を渡る平和な村の風

グン吉
史好
小林英子
福本英子
外吉
白兔
悦郎
しげお
照子
狸村
重人
天笑
凡九郎
元紀
外吉
幸
庸佑
史好
典子
三男
翠公
元紀
頂留子
射月芳

天王寺さんの帰る苗屋に用があり
お手植への苗が昭和を恋しが
苗植えたまま栄転した隣
苗植える手甲へヒラヒラ春の蝶
庭にまだ余裕があつた花の苗
この苗はお金がかかるランドセル
苗木には太陽きつと父だろ
まだ青い苗に大空教えよう
やさしさが過ると苗は下を向く
負け戦苗を両手に買つてくる
虫喰いの苗にも期待かけている
苗だからこそ母さんの目がきびし
心に苗を植えたあなたはいまどこに
苗植えて帰る故郷のない男
さびしくて四季咲きという苗を買
存じませんか氷河期に耐える苗
宿題すましたように青田の苗に風

美代子
寿美
白溪子
杜的
笛生
外吉
ダン吉
幸
美幸
美智子
照子
柳影
悦郎
泰子
白兔
白洋

銭湯に石けんかたかたときむい
石けんが呆れ返つた肥満体
踊浴衣石けんの香も樟脳も
石けんの泡にストレス溶けて出る
朝シャンをせぬからとぬ現代っ子
石けんが有るので女に花が咲く
石けんが良過ぎてボクの手を逃げる
作業衣へ泡も立たない洗濯機
緑日にシャボンの匂い連れに行く
飽食の世に石けんのあり余る

年代
白溪子
章
金太
悟郎
悦郎
美幸
勝美
武庫坊
白洋

席題「石けん」 山本 礫選

石けんで洗い流せる軽い罪
 女子寮のシャボン一つに姦しい
 石けんとの出会い産湯の掌の中で
 石けんも切れる定年三年目
 石けんの泡がやさしい今日の汗
 ゴージャスな気分分て泡と遊んでる
 洗剤から琵琶湖の水を守りぬく
 石けんで遊んだ娘二児の母
 体中に石けんを塗る自己嫌悪
 石けんも荷物の一つ嫁に出す
 石けんの良いのは妻とベット用
 石けんがのらない山の湯に入る
 石けんの泡が傷口深くする
 石けんと運はつるりと逃げたがる
 石けんの泡が解かせたわだかまり
 石けんの泡快晴の洗濯機
 ママ専用の石けんがあるお風呂
 石けんから香水少女脱皮する
 石けんを取り合いっこする旅の宿
 石けんが汗の祈りを聞いてくれ
 石けんで消える罪なら許される
 石けんも減らなくなった夫婦きり
 ガス漏れをさがすシャボンが暖かい
 石けんの匂いを残し逢いに行く
 石けんの匂う男に気を許す
 石けんの泡がやさしいしまい風呂
 石けんがぼつんと残っていた風呂場
 話題に乏しい石けんが置いてある
 石けんを贈り彼女と別れよう

笛生 小 路 典 子 仙 吉 美 代 子 月 子 寿 美 昭 子 み つ 子 み ね 章 紫 香 房 子 史 好 頂 留 子 笛 生 小 路 典 子 勝 晴 美 幸 正 坊 薫 風 柳 伸 柳 影 重 人 満 津 子 柳 影 白 兔 度

石けんの匂うお人を選びます
 妻でないひとの湯上りが匂う
 兼題「ランプ」 奥田 みつ子 選
 ホヤ磨く少年の瞳に明日がある
 五銭欲しくてランプ磨いた少年期
 おんなごころの中で揺れてる赤ランプ
 ランプの灯ゆらめく影に虫よきる
 ばあちゃんの民話つまっているランプ
 山小屋のランプがすこし喋りすぎ
 悲劇書くときはランプが欲しくなる
 忘れられたランプと遠い話する
 山男の最期を何度見たランプ
 ビバークで心一つになるランプ
 都会を捨てたころをほぐすランプの灯
 ランプの明かりをただいま充電中
 熱い思いをゆるやかにするランプの灯
 アラジムのランプは無いか骨董屋
 男はいつも古いランプをあたためる
 古いランプは恋を焚き付ける
 コレクションのランプばかりを見る夫
 高峰三枝子が唄えば絵になるランプ宿
 佇ちつくすテールランプに軽い悔い
 カンテラを提げてきびしい男唄
 テールランプ故郷の駅はそのまんま
 母の胸が魔法のランプでありました
 おばあちゃんが主役ランプの灯の下で
 ランプ割り吾一が路地を行くラスト
 こんなとき魔法のランプ欲しくなる
 満津子 磔 正 坊 公 一 幸 節 子 公 一 幸 月 子 幸 外 吉 太 茂 津 磔 磔 磔 幸 美 幸 満 津 子 磔 磔 幸 照 子 美 幸 美 幸 杜 的 い わ 糸 重 人 重 人 重 人 美 代 子 金 太 丹 吉 白 兔 正 坊 庸 佑

荒介 萬 的 紫 香 杜 的 綠 良 蠶
 ランプの灯むかし嘶にすぐ馴染む
 ランプの下ベースキャンは事務多忙
 山小屋のランプへ虫が来るもよし
 もの好きな主でランプの珈琲館
 虫のいい話ランプも眠くなる
 ささやけばうなずくようにランプ揺れ

第8年度『夜市川柳』募集

- 題 選 者 締 切
- 第1回「登る」谷垣 史好 6月末
 - 第2回「米」西田柳宏子 7月末
 - 第3回「遊ぶ」門脇かずお 8月末
 - 第4回「友」西川けんじ 9月末
 - 第5回「歩く」但見石花菜 10月末
 - 第6回「首」山本 磔 11月末
 - 第7回「打つ」小出 智子 12月末
 - 第8回「職」高杉 鬼遊^{90年} 1月末
 - 第9回「洗う」森中恵美子 2月末
 - 第10回「影」中尾 藻介 3月末
 - 第11回「笑う」橘高 薫風 4月末
 - 最終回「ゆつくり」西尾 栗 5月末
- 投句先 〒593 堺市堀上緑町2-1-2
 河内天笑方
 堺 川 柳 会

映画村武士もランプも生きている
ランプ消えテレホンカードの慌て様
ペンションのランプでベンを走らせる
山は夕焼ランプ吊るした小屋の窓
港町ランプの似合う店がある
向う岸の苦屋にもれるランプの灯
悠然とランプが座わる骨董屋
ランプ手に慶長小判のロマン掘る
アラジンのランプと夢で遊んでる
魔法のランプ磨いて若さ取り戻す

兼題「礼儀」 堀端三男選

先生がさきにお辞儀をしてくれた
うら表礼儀をうまく使い分け
躁の日はポストにお辞儀して帰る
自分には許す礼儀の都合良さ
飽食の皿は礼儀など言わぬ
あたたかい礼儀ライバルから貰う
大正の生れで礼儀重んじる
分校できつちり礼儀教えられ
ジーパンをはくと礼儀が別にある
詰襟の礼儀が少しきこちない
三つ指について夫が出迎える
他人の飯食べて礼儀の重さ知る
礼儀正しい年寄りにある向う疵
にぎり飯礼儀はいらぬ山の上
エックスキューズミィ女尊男卑に馴れたギヤル
二枚目の舌にも礼儀教えよう
行間のなかで礼儀を崩さない

笛生 勝美 紫香 萬的 武庫坊 年代 吐来 一三三 柳宏子 みつ子 繁男 荒介 緑良 寿美 千代 笛生 天笑 柳影 悟郎 みつ子 公一 美代子 シマ子 幸 寿子

サーカスの象が行儀良く眠る
お見合いの礼儀忘れて船に入られ
七難八苦丁稚礼儀に泣く礼場
神経を逆撫でされている礼儀
ラグビーの二軍で礼儀仕込まれる
親の顔一べん見たい娘の無礼
師の影を踏まぬ男の向う傷
さわやかに朝の挨拶子がくれる
礼儀には厳しかったと祖母の通夜
靴下の穴を気にしている礼儀
お父さんの礼儀軍人勅諭生き
土足では踏みこまないでいる礼儀
お隣は礼儀正しく肩が凝り
礼儀正しく魚を殺す式もあり
無学だが礼儀知ってる母でした
その内に礼儀を知らぬ国になる
押しつけのお辞儀が生んだおちこばれ
打ちとけぬ礼儀ぶかさに焦れてくる
ほどほどの礼儀でつなぐおつき合い
礼儀正しく民宿春を知らせて来
凡人に礼儀作法を教えられ
どん底にいても礼儀は忘れない
細い道譲って路地にある礼儀
ありがとと御免なさいを教えとく

兼題「動く」 野村大茂津選

動く手は戦野の果てへおいて来た
金がなくなると動けば動くほど
時々は動かしてみる非常口

雀踊子 しげお 章久 太茂津 天笑 小路 柳伸 福本英子 庸佑 しげお 笛生 泰子 柳影 萬的 敏 武庫坊 年代 年代 萬的 隆三 諷云児 白洋 三男

黒幕が動くとき風が生臭い
浮き沈みあっても今日が動いている
動かない時計は父の記念品
かあちゃんが動けば父ちゃん小さくなる
りーターの熱意に心動かされ
蓋ちよつと動かしてみる落し穴
動くのみな五月の風の彩
自分でも動く心と思えます
恋をして森羅万象揺れ動き
尺取り虫の動き生命を確かめる
動いたらあかんいうから意地になり
よく動く軽い財布を持つ男
好きな人来ると空気が動き出す
植輪の目へ雲はかすかに動いている
木から落ち人間らしくなる動き
夕映えに動いた嘘を責められる
少年の視野から動くねぎ坊主
人形使いが動き人形生きてくる
動いたら撃つと言う手がふるえる
目ん玉の動きを教師見逃さず
みそぎ済まずと浮気の虫がまた動く
動ける間は動きまっせと祖母気焔
よく動く姑が憎らしい時もあり
こまめに動く嫁で私が落着けぬ
動いてもどうにもならぬのに動く
よく動く男の口は信じない

動く手は戦野の果てへおいて来た
金がなくなると動けば動くほど
時々は動かしてみる非常口

黒幕が動くとき風が生臭い 浮き沈みあっても今日が動いている 動かない時計は父の記念品 かあちゃんが動けば父ちゃん小さくなる りーターの熱意に心動かされ 蓋ちよつと動かしてみる落し穴 動くのみな五月の風の彩 自分でも動く心と思えます 恋をして森羅万象揺れ動き 尺取り虫の動き生命を確かめる 動いたらあかんいうから意地になり よく動く軽い財布を持つ男 好きな人来ると空気が動き出す 植輪の目へ雲はかすかに動いている 木から落ち人間らしくなる動き 夕映えに動いた嘘を責められる 少年の視野から動くねぎ坊主 人形使いが動き人形生きてくる 動いたら撃つと言う手がふるえる 目ん玉の動きを教師見逃さず みそぎ済まずと浮気の虫がまた動く 動ける間は動きまっせと祖母気焔 よく動く姑が憎らしい時もあり こまめに動く嫁で私が落着けぬ 動いてもどうにもならぬのに動く よく動く男の口は信じない 動く手は戦野の果てへおいて来た 金がなくなると動けば動くほど 時々は動かしてみる非常口

影武者の綾なすままに動かされ
風の動きを誘うように吹く
ことなかれ主義に徹して動かない
動く方へ動く方へ従いて来た男
手も足も動く妥協はまだしない
小賢しい女が陰でよく動く
動くだけ動き空しい風という
まっすぐに動く香車の父である
さわやかに動く手足へ風みどり

兼題「面」

西尾

栞選

素直になれ素直になれと面が言う
錆びついて夫婦の面が離れない
お面はずして漢方薬を飲んでいる
お多福の面造反の帳とす
面裏に溜り続ける母の私語
面が割れ生かしておけぬ罪重ね
B面に本音を入れてあるテープ
ていねいに面取りをして京の味
面をとるシテにんげんの軽い咳
面一つだけしか持たぬ律義者
変声期君は仮面をいつ外す
面体も声も紛れず太郎冠者
子ら巢立ち妻のB面やと知る
隈取の朱に汗ひかる面あかり
ロボットの仮面をはずす退社ベル
仮面をはずして息がしやすくなりました
泥沼という水面の蓮の花
宮仕え昼には昼の面をつけ

みね 礫 白洋 重人 幸 礫 美幸 大茂津 瑞枝 緑良 千代 どんたく 荒介 東雲 シマ子 英千子 白兔 文秋 萬的 翠公 典子 節子 重人 年代 泰子 史好

夜叉の面つけた自分が怖くなる
面ぬいで自分の顔と見比べる
面打ちの自負で頑固に固執する
琴一面母のきびしい顔がある
へそくりで卑弥呼の面を妻が買い
ノッペラポーたぐさん面を持っている
御陣乗太鼓の面は世間をにらみつけ
賞められて仮面がすこしすり落ちる
留袖を着る日能面つけてゆく
昼下がり妻の仮面を見てしまつ
ボーカールフェイスできぬ男で山が好き
マザーテレサの面さし母にだぶらせる
三面鏡右も左もわたしてす
面談の時給容姿に自信あり
八面六び家ではゴロ寝しています
デスマスク軽いジョークを忘れ得ぬ
森の番人ふくろうのよい面構え
勿頸の友が庇つた陰の面
倦怠期アランドロンを購つ
コマージュル面を脱いでも汗が無い
面壁九年達磨大師と蛭蛸と
取り違えた面で出世しています
朗らかな仲間面をはずします
(清記・みつ子)

庸佑 武庫坊 柳伸 いわゑ 一二三 満津子 萬的 天笑 泰子 元紀 正坊 白洋 美代子 房枝 瑞枝 白洋 大茂津 みつ子 白溪子 章 白兔 栞

五月十七日の5周年記念川柳大会に多数ご参加賜り、厚くお礼申し上げます。
川柳サークル 卯の花

暑中見舞広告募集

本誌8月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。

同人・誌友ならびに各川柳会(句会)の紙上交流の場として積極的にご活用をお願いする次第です

今回から広告のスペースと掲載料を改定いたしますので、ご了承のうえ、左記によりお申込みをお願いします。

記

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号を掲載)

★団体 次の四種といたします。

- ① 1/2頁 六、〇〇〇円
- ② 半頁 九、〇〇〇円
- ③ 2/3頁 一二、〇〇〇円
- ④ 一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 6月25日(必着)

原稿と掲載料を左記へご送付ください。

〒581 八尾市中田二一三〇二

高杉 鬼遊方

川柳塔社会計室



各司会(川柳会)あて、本欄の取扱いに
ついてご通知申し上げますので、よろ
しくお願い申し上げます。 担当・重人

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

砂の上だろっ百万遍も書き給え
砂を積む波ひたすらにくすすのみ
一箱の砂も大事な都会の子
球圍の記念の砂が乾いている
握る砂噂ぼろぼろ抜けてゆく
亡母の砂鎮まりませと別れする
風紋や砂の神秘をひたすらに
鳴り砂がうわさを急にしゃべり出す
一握の砂はるかなるところに棲む
風止んで夢丘にどつと夜がくる
遠い日の夢が砂丘においてある
風紋の砂は思想を持っている
簡単に答を出さぬ箱の砂
オバタリアンと呼ばれて砂のごと混じる
ながりに砂は凶器の顔をする
青写真砂丘に埋めてひとり旅
砂がもえると風もゆつくりしておれぬ
気をつけねば砂の階段かもしれぬ
肉片を砂に埋めてる飽食家

より子 八重子 恵子 智加恵 朗子 やえ 正子 玲子 千春 荒介 夕子 寿々子 亜弥 てい子 日枝子 千代 瑞枝

頼まれて自信ありげな顔をする
漢方薬頼んで今日を生きのびる
頼まれた約束果たす花の種

久世町川柳クラブ 二宗 吟平報

三世代新旧メニュー忙しい
あの口を縫うてやりたい程喋り
Uターンなどときれいに舞い戻り
本読んですぐに忘れる年となり
この上は欲は言うまい共白髪
少しづつ女が消える老いの坂
もし涙出たら隠そう花束で
言わなくても世帯を持って知る娘
イヤリング女の見栄が耳で揺れ
幸せをどう表わそう波静か
道草がやさしい花にささやか
やさしかった亡母語り合っ二三忌
就職がきまりうれしい朝を起さ
合格の通知供えて香をたく
再審に勝って嬉しい日本晴れ
ロマンスのある思い出は忘れかぬ
おもい出をそつと引き出してためる
遠くなり思い出すい孤兒あわれ
移り香を永久の思い出折りたたみ
思い出を胸に抱いて海渡る
思い出は妻と歩いた長い道
思い出を心に秘めて明日を生き
一言は肚におさめている平和
いつ見ても夢よみがえる写真帳

とも子 富美子 花子 雅紅 つた子 種子 ぶさえ さわゑ 甫正 千代女 伊久栄 江山 山人 邦人 虞人 志重 保恒 半仙 静香 明子 美恵子 秀香 楽山 禅心 光水 贊平 吟平

頼まれて自信ありげな顔をする
漢方薬頼んで今日を生きのびる
頼まれた約束果たす花の種
北川柳会 神夏磯典子報

小鳥さへ餌を求めて窓に寄る

小鳥にも愛の仕ぐさのあるを見る
鶯の声もどかな片田舎
花咲かす故に切る枝惜しまない
今日一日今日一日はと八十路坂
年金で孫の祝のランドセル
箸紙に十七文字の旅日記
四海波静かであつてほし日本
平成の世も広島島の過去切れぬ
戦きが夜の寒さを深くする
切り捨ててほしい物あり消費税
息抜きに来て分らないピカソの絵
飛び鳥を落した人も塀の中
あれはあれこれはこれだと切り離し
雀にもぐすながいのはぐれてる
円高で日本狭いと海渡る
川上の暮しを思つ箸が浮き
凍て空を見上げて亡夫の星を問う
切り変えが出来ない親子の転轍機
ひと言が背筋に寒い隙間風
雪が残る峠越えれば花の里
聞か猿が補聴器買ひに出かけます
草臥れた案山子雀に馬鹿にされ
大正ロマンひととき触れる夢二展
妥協して川の流れについて行く
引っかけば古代が顔を出す地球
迷う路灯り点してくれる友
ハンターの家に巣造りするつばめ

きみ子 午郎 市郎 寿美礼 敏子 白峰 閑石 達子 温子 登美子 典子 仙吉郎 秀夫 テルミ 文子 静歩 きくゑ 公一 千恵子 新一郎 静子 純子 倫子 満津子 右近 弁次郎 舟一郎 重昭

吉岡きみえ報

練り上げた思考が情に負けている
土を練るお伽ばなしの泥の舟
点滴の速度の中で練るプラン

練りぐあいどう間違つた子がひとり
 古里の山ふとこに眠る父
 名工の鑿語り継ぐ眠り猫
 居眠りを誘う独りの春炬燵
 ひとときの眠りを誘う雨の音
 天網にもれて大悪よく眠る
 眠っている間にビノキオ鼻がのび
 いつまでも眠り続ける古時計
 矢印に向う安心旅は春
 荒波も安堵して乗る母の舟
 ふる里はいひなやっぱり安心だ
 安心は弥陀と一緒に行く地獄
 安心しもらった株が命とり
 安心の二字が余生で消えて行く
 愛がある不安はないとぬぼれる
 安心ができる指切りならしたい
 安心はならぬ猫背が曲者だ
 安心して喋る実家の掛布団
 もう一步の安心感に靴が脱げ
 もう安心心許したつくしんぼ
 安心という文字のない親ごころ
 平等を唱えた方に票がより
 平等になつたらかつく天秤棒
 平等に覆いたつもりが片ちびり
 同和とは誰が名付けたみな平等
 平等が好きで飴玉分けている
 平等に弥陀の掌にのる幸不幸
 平等に分けたが一つ余る菓子
 家事平等夫のエプロン縫結び
 菜の花もバラもすみれも春そぐ
 誰よりも信用したのに裏切られ

芳子 篤子 多賀子 昭二 房子 幸一 きみえ 桂子 宗弘 千草 鐘堂 義登 江雲 竹夫 フミ子 萬吉 寿美 芙佐子 知恵子 正朗 喜栄子 きよし 満江 嘉寿恵 操子 磯子 ノブ 勝子 青湖 軒太楼

信用が資本で伸びたこの事業
 信用が大風呂敷で総崩れ
 信用をしますます私が育てた子
 信用が出来る言葉は墓の中
 信用の二字引き継いだ古のれん
 信用のある店笑顔絶やさない
 無証文だから一枚舌を切る
 大切な信じつはあなただけ話す
 疑いづ信じつはあなただけ話す
 信用は無形の資産と子に論し
 信用がないから一人輪をはずれ
 だれを信ずる親に捨てられた子
 任される内が花でも暇がない
 信用は先代までとそっけなし
 一枚の名刺に刷つてある信用
 信用はせぬおみくじ引いてみる
 信用で押して泣いてみる保証印
 信用のおけぬ政治の舞台裏
 肩書を並べて信用さす名刺
 銀行も顔を覚えた信用度
 名声に驕り失意の信用度
 信じ合う夫婦この上なき余生
 信用は一瞬に失せるこわさ知る
 無事着いた遠い電話にする安堵
 春がすみれのお地蔵ねむりこけ
 川柳塔からつ佐々教室 浜本
 一坪の庭にも四季の花が咲く
 大輪に咲いて輝く娘が嫁ぐ
 頑固者二分で暮せる村八分
 呆けたかな風呂栓忘れお湯流れ
 旅立ちを母が見送る無人駅

愚童 牧童 一葉 紋次郎 久道 久栄 キヨシ 馨子 律子 勝水 巡歩 美代子 マス子 草丘 元之介 宗肇 桜水 リチエ まこと 秀子 慎枝 水煙 茂美 代仕男 義美報 百万両 三枝子 茂坊 紫泉 順子

勲章も金で買われて国平和
 行けば近し行かねば遠しふるさと
 ふるさとがダムの底から顔を出し
 母さんは頭ひも締めてミニバイク
 旅帰りがつと落ちつく小唄
 踏みつけたつとくしんぼうが哭いている
 消費税放湯息子は船出する
 妻病みて男厨に水温む
 川柳塔あおもり 波多野五楽庵報
 欲望が無いふりをするお坊さん
 欲望がまんまとはまる落し穴
 欲望と落ちる奈落に底がない
 欲望にかられて買った宝くじ
 欲望を満たす肩書金を食い
 ちよ ふさ子 喜久夫 万亀子 冬子 治幸 紀一 義美 一花 進 進 實 進 つとむ

佳句地10選 (前月号から)

西村早苗選

礼節を忘れぬ父の冬帽子 雀踊子
 喜びを伝える役は買うて出る ふみ
 花畑理想の色にめぐり会い 典子
 真ん中の子供で泣き癖ついている 操子
 雲一つないから冬の絵にならぬ 一路
 ころがった土地でゆつたり根をおろす 洋子
 水鏡ゆれて本音を問ひ質す 寿美
 熱弁へ水差すようにメモ渡す 花子
 人様に見せぬ涙で鶴を折る 悦郎
 母の鞭ゆるく狙いを外さない 晋吾

二股をかけてなくした玉の輿
欲望を満たして大の字に眠る
捨て難い欲望があり生きてます
まっ白な欲望だってちゃんとする
衣食住それでも満てぬ欲ばかり

川柳塔わかやま

牛尾 緑良報

今日もまたあなたまかせの税はらう
ひょいと来て古老が解いたよい思案
ふんぎりをつける潮ときこそ男
視界ゼロ老眼鏡がくもつてる
母さんが今日も払った消費税
新型も旧型もない税は税
賄賂にも忘れなはんな消費税
思案顔されると弱い男たち
思案して明日の風を見失う
煩惱無尽須弥壇に立つ思案
思案などせぬロボットに憧れる
思案つき星古いにかけてみる
消しゴムのあとに思案が窺える
その思案弱気を鴉に笑われる
嫁がせる父の愚かな思案酒
戻り寒花も疎んで思案顔
結局は一向に戻って思案
人生いろいろ思案の程もいろいろで
プロポーズされて思案に暮れる幸
天人も五衰の思案にくれるとか
諷いの視界はゼロになってゆく
愛一途視界がゼロになる恐さ
コンビ解消視界の色を塗り替える
許そつと決めた視界に陽が光る
視界からやがては消える子の翼

- 喜衛 正人 花峰 和香子 五葉庵
稚代 紫香 登志代 天彦 正博 好笑 凡九郎 三男 紀美女 太茂津 愛子 信子 照子 柳宏子 武雄 瑞穂 紀久子 克子 守 忠 桂香 恭子 萬的 輝子 結実

ボランティアの視界は不憫な子だけ見え
ニューフェイス視界良好つつ走る
毒舌を吐いて視界がかすみだす
寂しさを視界に入れて夫婦酒
こだわりを捨てると潮が満ちてくる
満潮に揉まれて男とり戻す
満ち潮へ母は出番の曆繰る
はしやき過ぎを大侮侮いてる潮溜り
潮鳴りへ椰子の実の耳起きてくる
潮時をねらって妻の機嫌とる
満ちてゆく潮がいきさつ知っている
上げ潮に乗る強運の面白さ
潮のない父で賢い子に掛かる
潮騒のリズムが夢を掻きたてる
神様に視界を借りる手を合わす

川柳大阪 中原比呂志報

ひと駒が動く怖いルーレット
鉛筆を通して吐き出す腹の虫
善人は思案どころか消費税
花道は踏まぬビエロの玉の汗
一徹を離れられない老いの背な
馬鹿になる術を探して今日を生き
丁寧が過ぎる内職儲けからず
力抜くことも覚えてきた力
母の目はすこし離れたとこにおく
離れ道三叉路に立つイヤリング
明日知らず生け簀の鯛がいらんでる
七人の敵に備える石をもち
薄情も案外効き目ありまっせ
いじめない教育祈る入學日
中・高・大みんな私学の不孝者

忠雄 隆積 静代 英男 美智子 信秋 英子 裕美 重延 寿子 白光子 豊太 凡太 緑良 喜醉 正之 本蔭棒 しげお 洛醉 希久志 雅果 重入 笑風 与呂志 亮太 鉄心 凡九郎 金太

第40回柳都川柳大会

第20回川上三太郎賞
第15回白石朝太郎賞 表彰

とき 7月23日(日) 10時〜17時
ところ 新潟厚生年金会館
(新潟市南万代町)

会費 一五〇〇円(記念品呈)
宿題 (各題2句)
「他 人」
「棒」
「踏む」
「層」
「五分前」
「誘う」
「雑詠」

特別課題 出席者のみ
「満ちる」 主幹大野 風柳選
デイスカッション
速川美竹/原飛伝応/菅原孝之
助/長谷川冬樹

席題 当日3題発表・正午締切
※欠席投句・500円同封で7月10日
までに〒956 新潟局私書箱15号
柳都川柳社へ

主催 柳都川柳社

薄情と見られる裏にある情
 まだ譲る気持にならぬ兎小屋
 笑うから本当のことが言えず嘘
 グルメにも古代石焼き鮎の味
 薄いのも禿げも白髪も居る同期
 繩のれん五時から男の愚痴を聴く
 ええかげん泥を吐け吐けりクルト
 花便り離れたくない朝の床
 石の山新空港のあけぼの
 石地蔵ひとこと声を下さいな
 焼け石に水ぞ竹下野にさがれ
 断ち切れぬ過去も一緒に離陸する

西宮北口川柳会 松本 一郎報

我勝 美津留 宙宙 天司 柳弘 敏 醉舟 もとみ 哲流 喜楽 比呂志 正坊 みつ子 佳秋 風云児 光代 英子 実 三笑子 紀雄 夜船 よし津 いわゑ きよ子 はつ絵 トミエ 千世子 白漢子 河芳子

見舞客もてなす自販の缶ジュース
 小さい庭小さい幸せある花壇
 合格の祈願の絵馬に桜散る
 二度とない日を缶づめにしておこう
 円高で石油幾缶ぬくい冬
 設計図汚して伸びる子の私語
 枯山水風につぶやく石の進路
 苦勞した掌に温かき庭の土
 進化論いずれメダカも鯉になる
 庭先に今日のノルマが置いてある
 機械では未だ折れません千羽鶴
 肩書きを解かれてからの眠り癖
 花ビラは踏まずに犬も弾んでる
 口下手で恥かしがりて輪の中に
 ペットフード猫にもかかる消費税
 青春の想いめぐらす花の下
 庭賞めるために駒下駄置いてある

静岡市川柳塔同好会 永倉 僕川報

河芳子 江美 春蘭 美智子 紫春 武庫坊 嘉矩 阿字 朋義 杜的 千津子 柳右子 柳伸 萬的 紫香 一 弧秀 晃授 猛士 金吾 正雄 たまき つね きんぬ まつゑ 静代 千代

判一つ他人となった別の顔
 別れあり出合いもあつて春の詩
 減食へ目盛りが増える異常体
 奥谷 打吹川柳会
 夫婦いて互いの仮面知りつくし
 地球の上に寝ころんで空を見る
 不美人もハート一つで神が来る
 人生の余白を埋めた夫婦旅
 五寸釘自己陶酔へまた曲り
 春の筆明るい彩を考える
 めがね屋のカードが届く誕生日
 地球上あんた一人というせりふ
 言い分が言えず拍手で押しさられ
 蓄の絵ばかり無業をくりかえし
 長生きを慰め合つて日日が暮れ
 達筆な手紙美人と決めている
 語りつく父の森から陽が昇る
 哀愁のリズム切々津軽三味
 昼下り布団を叩く音も春
 仕合せな朝の鏡拭いている
 お目出度になつて姑は甘くなり
 椿寺の庵主へ届ける炭俵
 半端者同士で長い電話口
 竹下さん七十五日待つたけど
 胃袋の中で予感が病んでいる
 逃げるのが下手な男の背を見る
 能弁の妻に逃げ場を塞がれる
 よい人に出会い心に灯がともる
 たまりかね玉葱の芽が吹き出した
 弱点を温めた毬がよく弾み
 風花に私の詩を聞かせよう

房江 久子 僕川 弘朗報 邦俊 原兆 白峰 雄々 早苗 寿美子 巡歩 善政 たつみ 柳風 典子 妻子 紫泉 温子 雀踊子 喬水 紫映 杜的 宗光 節子 美ツ千 幸子 みほの 明治 野草 小鹿

逃げ口のどこかへ男おいてきた
知らんでも知ったかぶりの出来る芸

佐川川柳

赤川

菊野報

とみお

越えてきた道を熟した年が変え

実年のまだまだ夢は太く描き

娘の下宿母の助言を置いて去に

アドバース下さる友の好い笑顔

頑固者人の助言に顔をむけ

実年の少しテレてるイヤリング

黙って座ると助言者に見えてくる

大会の助言者ばかりで時が過ぎ

若葉マーク助言尻目に動きたす

結局は妻の助言に助けられ

助言して新人類にしかられる

負けてから助言聞いてももうおそい

親切な助言かえってじやまがられ

仏壇の中で助言の亡父の声

毒舌の友の助言にある温み

師の助言胸に焼き付け大成し

やわらかい母の助言が胸を刺し

一すじに生きて実年粗大ゴミ

三幸川柳教室

桜井

千秀報

野

夢見よく朝から気分乗ってます

身勝手な男に夢を見失う

コップ酒夢見る喜劇欲しかろう

地価高騰夢はますます遠くなる

夢ばかり追うてるポケットの小銭

もう夫夢を捨てたか嘘がない

容赦なく夢塗りがえる娘の絵筆

もてた夢醒めて髭面なでてみる

いつか飛ぶ夢を見ているアヒルの子
組に刻みこんでる妻の夢

孫の絵はお庭とブルあるおうち

夢でない誰かが当たる宝籤

悪女でもない青春が戻るなら

同窓会ちよつと悪女になってみる

膝枕悪女になるもまた楽し

悪女役ばかりこなしでもてる

悪女かも知れぬ秘密を二つ三つ

冬の海悪女の面を流し去る

今日あたり悪女になってみたい酒

爪を研ぐ悪女と見えぬ片えくぼ

オクテープ上げて悪女のひとり言

夜は嫌妻が悪女に変わるから

美貌ゆえ悪女にされているオフィス

灯を消して見たが悪女になり切れず

成り行きで悪女にもなるおぼろ月

花活けて悪女のうわさ聞き流し

あるじ追う犬に見つけた処生術

優等生答えばかりを追っている

追伸を消して行が気にかかる

追いついてから現実が見えてくる

寄り道が好き今晩を追ってます

白球を追う少年の顔光る

追いかけてみて鎖の長さだけ

日銭追う父を待ってる鍋の湯気

不覚にもすべった舌が命とり

舌先にまた盗ませた姑の味

グルメにはなれそうもない舌ざわり

二枚舌ふたつ上手に使い分け

三寸の舌先武器にして女

朱夏

忠昭

啓

守

正吉

当代

重次

精子

正

利子

高夫

幸子

育子

みね

貞子

三千子

幸子

和子

保州

昭枝

靖子

敬子

正二

カツミ

鉄治

純子

愛子

茜

美代子

顔いっぱい舌鼓打つあどけなき
飽食の舌が忘れた母の味

どれを抜く閻魔迷った五枚舌

柳柳塔唐津支部

悟つてるようでお通夜の席で泣き

銀婚の夜も寝息はずれてる

だんまりの遺族を針のマイク追う

前の席すらり練馬や聖護院

喧嘩する度に近くの里へゆき

啓蟄へ蛙戸惑う冷雨降る

塵捨てする手に未だ立派に使えます

政治家と指切りだけはせぬことだ

川柳化粧檮

よつもまあ話題が尽きぬ長電話

追伸へ便りを書いた本音です

年金ですまぬ蛇口を締める趣味

父は右母は左で家守る

忙しそうに貧乏性が直らない

補聴器を外せば春の音がする

合鍵を渡して運命を確かめる

値を聞いて隣の空地あきらめる

踏切を渡れば女がもう見えぬ

もう飲みぬ誓いは灯点るまで

乗り始め乗り納めと思つ空の旅

梅の香へ万感迫る古稀の幸

愛めざす悲しい嘘を積み重ね

枝垂桜ピンクが春の庭にする

新幹線轟音まいて西東

年かいなどかく涙腺緩みがち

せつからに出て来た土筆すく採られ

おぼろ月心もはずむ先斗町

美子

幸子

智水庵

正敏報

江

四郎

幸夫

タミ

高明

朴竜

旭恒

正敏

岳詩

大鷹

越山

葉香

紅月

白李

礎石

輝月

悲代

鈴子

サワ子

遊峰

遊光

瑞穂

永楽

悟虹

好花

美恵子

水族館で見ると横目をつかう鯛
二杯酢の小さな鯛と酒を飲む

川柳ねやがわ

高田 博泉報

春遊子

今だから言える時代で責任論
無駄使いせぬとは自分だけの弁
リクルート大物だけを狙い撃ち
年とつて転ばぬ様に低い靴
年号が変つて齢を若く言う
犯人はどこに居るのかまた無罪
一徹が文字にこだわる名付親
相性はどうだつて良いご懐妊
相性がよくて手の内みな読まれ
言い訳は聞いてくれない冬の月
人間を引きずり堂々犬が行く
年号がどう変わろうと受験生
思い出がいっぱい昭和速のかず
どう見ても親とは割の合わぬもの
親が出る幕ではないと親が出る
相性の悪いコンビがよく嫁ぐ
転ぶ子に母の笑顔が力づけ
転勤のたびに荷物かぶせていく
初スキー転び方だけ上手くなり
ちち離れ出来ず親指噛んでいる
相性を無視して迷い見て迷い
海に出て父の面影見た様な
夫許すこころあたりが恩赦かも
親同士張り合いながら孫のこと
転ぶだけ転んでまりの位置決まる
子の出世親父の鼻が上を向き
ありがたい嫁が合わしてくれている
七人の敵に斬られた父の背よ

春遊子 客遊子 高雄 晴風 頓坊 玲子 曲ん手 拔智 勝美 一進 創吾 美智子 吉之助 鉦平 時子 正晴 増造 えいめい 紀代 時弘 勇太朗 一芳 三峰 さかえ 菜月 藍子 雅文 権太 なつめ 咆煌

年号にあやかりレール敷き直す
親不孝目立つおなかで詫びている
あの子には泣いたが一番親思い
お嬢さんと呼ばれうかつに振り返り
線一本で昭和が消せるわけがない
天と地の相性みだすフロンガス
植輪の目また年号が変つたよ
飼い犬に似る相性のいいあるじ
いつからか赤が気に入る好きな帯
転んでもあひそ笑いを忘れない
弁論の自由か死者にムチを打ち
鴉の声謀反すすめるわけでない
横座りして六畳が狭くなり
転んでも起きても父の顔をする
年号がどう変わろうと僕は僕
老兵に万感ありて昭和ゆく
年号が変わりマニアが騒ぎだす
坂道を転げ出したら止まらない
相性も恋愛中は通じない
平成と改まる日の風を聞く
転んでもケガせぬ子供をもっている
小羊の迷いは今日のちぎれ雲
杉の子と相性がよい春の土堤
父ともう風呂にはいらぬさくらんぼ
転んだら起してくれた隣の子
嫁もらう決心親に惚れこんで
年号さまる滔々と河流れ
年号あれど君への愛は変わらない
白さが飛んた垢のことあるみたい
新紙幣最初に手垢つけてやろ
相性が合つて裸で築き上げ

勝一 波留吉 とし 君子 良三 かつみ シマ子 淳朗 静江 春子 頂留子 あやめ まさお 房子 一途 冬葉 庸佑 三郎 光泉 博成 亜成 英王子 速水 亜也子 三千子 磯度 あいき 眉水 寛然坊

いたずらな風に転がる夏帽子
天皇の崩御も知らず父戻る
火と水の性であんじよう添いとける
年号が変わつてもまだ風邪ぬけず
三代を私も生きる有難し
川柳ささやま 遠山 可住報
事務所開き味方はかりと限らない
心安い部屋で笑いが止らない
吹き抜けた風が残さない日堵感
安心という日が来ない日記帳
たたき売り安いバナナをもてあまし
夫の背に歩幅合せる安堵感
おしどりで味方ではない投票紙
札束が味方の陣地食い荒らす
ややくそになれぬ阿弥陀の貌に会う
賛成するが責任もてと釘さされ
安らかに眠れと木魚叩かれる
入学費安い孝行だつてある
茶柱が賛成させた台所
回り椅子時に味方の弾丸も来る
賛成へホタルはみんな甘い水
賛成が言えぬ財布の底がみえ
本当の良さが別れてからわかり
合掌をして安心のある余生
本当の味方が縁の下に居る
大原川柳社 小林 妻子報
いい風が吹くかも知れぬ待つてみる
捨てるものない大正の癖がある
女関に走り書きあり母のもの
スタートに誤算があった人生語
キャンドルの灯へ娘遠くなる

雀踊子 小路 柳宏子 紫香 薰風 可住報 百合子 和子 靖子 とみ子 ヒサ子 千代子 富美 金之助 ゆうや 貞子 エキオ ひか平 つや子 テル 法斉 美智子 まさの 文平 可住 正子 あすなろ ひでの 寿恵子 みさえ

懸命に生きる姿に味方する
人生色々負い目感じぬ楽道家

電話ベル口あらそいが宙にうく
手一杯の塩でお客が盛り上がり

明日巢立つ子に星空が美しい
鈴の音も春風に乘る遍路旅

もう止そう眠れば開く明日がある
誤字当て字句箋さみしく笑つてる

春風月をふわりと持つて逃汗
沈丁花ここにもあった亡夫の影

酒の味屑書などに無関係
だあまつて通る積りがけつまずき

一円玉消費税が救い上げ
つれづれの旅に雨音風の音

計報聞く胸にずしんと来る人ぞ
サザエさん一家の平和見習おう

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

交代のきっかけさがす八重椿
罐詰にキナ臭いのがちらほらと

実力の差です歯ざしりなどしない
交代の主ますもやりクルート

歯ざしり蹴りたい石が見つからぬ
雨はげし歯ざしりしても雨激し

交代がすんなり行くと甘すぎる
フルーツポンチとても仲良く泳いでる

これまでかと思ひ絶句す寒椿
築地松は駿川平野の色で夏

罐詰に昭和の匂い詰めてあり
吾に似た子を責められず責められず

交代の鬼が仮眠の夢を剥ぐ

八尾市民川柳会

飯田 悦郎報

睦子 こふゆ

敏子 美代子

悦子 たけよ

辰江 理恵

元江 朝代

智泉 宮子

辰子 玉恵

みづえ 妻子

恵美子 はるみ

歳栄 ヒデ子

かつ子 智重子

聖子 鈴江

世似 天痴人

清泉 悦良

白汀 白汀

幻にえがいた君も背が曲がり
幻想に明け暮れ余生悔いばかり

幻の話に欲の皮のぞく
モノローの幻に逢う春風

重宝な古井戸城の隅に生き
葉桜もまたよしおらが故郷の城

革命のない城門は閉ざされる
風景に孤立している城がある

幻の城はうぐいす鳴くあたり
決戦へのろしがる高安城

倒閣のろしがる耐えている
つっぱりは狼煙少年天を見る

のろし跡あたりクジャク羽根広げ
見くびられまいとろしを上げて置く

礎石に掛け発句する目が空にらみ
飛行機の音に山の静けさ奪われる

落武者が逃げ去るように散る桜
汗ふきに追われ雑念すらわかず

高安城お倉の跡に生きる虫
山頂で千年前の風に会う

岸和田川柳会

植山 武助報

借景の味方に寺のたたずまい
善人の味方はかりで頼りない

味方から弾丸が来ることだつてある
味方無く議論が続く固い椅子

寝返りを打ちそつなのも居る味方
味方にも敵にも回る総会屋

皆味方とは限らない後援者
ひと言がすつしりとくる味方

花の裏敵も味方も入り混じる
人形と川の字ならぶ姉妹

和子 雅士

恒明 律子

喜風 柳伸

年人 泰

天笑 春堂

美幸 隆

裕子 美幸

頂留子 十四夫

白洋 浩一郎

美津留 覚然坊

月子 武助報

通彦 浪速子

一弥 白光子

寿美子 喜久子

仲良しを分かつ合否の揭示板
返り咲きする特訓へにぎりめし

ダム底になるとも知らず桜咲く
咲きかけた花が戸惑う戻り寒

ぼろぼろの辞書は私のよき味方
暖冬に寒行だれてしまひそう

本当の味方多くをかたらない
川柳塔まつえ

指切りも時の流れが遠くする
益が部屋の流れを丸くする

愚痴言つと流れてしまふいい話
手術待つ身内沈黙の時刻流れ

私の思いが流れる春の川
井戸端で噂を流す閑な人

変身をしようとして流れ追う若さ
春一番別れのテープ流す海

甲子園夢は流れる運のつき
唇を噛んで流れる子の涙

草に寝る青春汚れのこと知らず
雑草の定め刈られる明日へ伸び

雑草の根が深く他人よせつけぬ
雑草の根役になれぬカスミ草

一輪草ここにいますと白く咲く
よく見れば惹かれる花を持つ野草

草餅はほのかに母の味がする
寝転べばささやきかける草の精

静かな町が一億円でゆれている
一億の不渡り河童の皿乾く

すみえ 狸村

希久志 こう

さよ子 佳生

甘平 恒松

友子 正朗

馨志 壽美子

君江 静江

米子 小生

市雄 市雄

竹雪 昭二

芳子 代仕男

満江 愚童

秀子 美治

博子 小鹿

叮紅報

一生を汗してみても遠い億
電卓は億の位へそっぽ向く
田畑を売って億万長者出来

億の金持って疑惑の矢に射さる
億が舞うそして誰かが泣いている
迷案に一億円の大あくび
昭和史を一億の民支えたり

億の金動く日本が病んでゆく
メロデーが流れる街に足が向く
ビル街の意地をみせるか縄のれん
ニューヨークで日本人がビルを買う

ビル街は蝨灯たえぬ稲荷神
ビル街は働か蜂の溜り場で
生活の匂いはみ出る雑居ビル
慕情皆消して冷たいビルの街

愛らしいえくばが語りかけてくる
四捨五入してもえくばには見えぬ
いらだちを救つてくれる児のえくば
受付の娘可愛い片えくば

愛嬌のシンボルあの娘の片えくば
新妻のえくばは朝の投げキッス
初恋の記憶がもどる片えくば

あの人が好きかな花よとそつと活け
暖冬に桜前線急ぎ足
いらいらと時計見ながら待つつらさ
時によりうるさく思う鳩時計

逢ってきた余情へ薫る沈丁花
人生の秒針たまに狂う日も
ミセス美緒わたくし色の花咲かす

雪子
鳳 苗
早 苗
雪 美

律 子
蒼 流
静 翁

久 枝
ノ ブ
登志子
みつこ

舞 吉
舞 吉
舞 吉
舞 吉

鶴 丸
長 三
房 子

多賀子
きみえ
きみえ

三四子
美 子
千代子
雅 子

登美子
美 緒
登美子
美 緒

花時計嫌いな花があつてよい
花吹雪とかかぬ想い春はウツ
京都塔の会
松川 杜の報

移り気な蝶へ心は覗かせぬ
気紛れが急に今行くと言う電話
炊飯器教えて妻は旅に出る
氣に要らぬ訳ではないが値が合わぬ

自画像の疵は妻にも教えない
嫁がきてうちの零囲気ぬくなる
一步退くことも教えて嫁がせる
あの時は本気だったと酒を酌ぎ

少しだけ本気を小さい声で言う
ポケットのカードが気分屋で困る
小さい背で元気に弾むランドセル
ハナムーンわくわく二人で練っている

わくわくを抑えきれずにゆるむ口
気前よく大阪弁でまけてくれ
重文に指定信仰から遠ざかる
今日も又暮れてあしたを待つひとり

少し乱れた女の髪に艶と夢
白いページのまま二月過ぎ
ジェラシーも少し茶房で聞く話
噂なら良い耳で聞く事にする

あしたにはきつと暗れると雨が降る
老母いて庭の手入れも行き届き
ほめられてから風当り強くなる
存在を誇示せずそこそ家事まもる

高槻川柳サークル卯の花 河瀬芳子報
裏切りのユタの淋しい影法師
色っぽい女に裏切り癖がある

薫 風
泰 子

花代子
圭 坊

正 坊
美智子
諷云児

紫 香
佳 秋
英 子

よ志子
杜 的
白 李

武庫坊
年 代
達 子

はつ絵
水 客
巨 詩

圭 坊
英 子

実直な沢庵石が持つ主張
そよ風を呼ぶ実直な風車
実直な掌を占ひ実直な預け
実直が密かに謀反考へる

実直な大山が引いた墨の糸
実直な案山子に道を聞いている
実直な女離さぬ導火線
好きな女をうばう争いならしよ

席争うオバタリアンのバイタリテイ
かまきりは生涯争う気で構え
争いがまるで嫌いな蝸牛
争いはとても嫌いな銀の匙

遺産相続争いの種まいて逝く
争いの味くり返すまい路のとう
争つてみても遺産はたかが知れ
敗戦のデマも昭和のページ

デマだとは知らず信じた日の誤算
市場かゴデマへ一緒に買つてくる
ダムになるデマへ吊橋揺れている
影法師とふたりばつちで生きている

祖母の難くもま井戸まで付いていた
可も不可もない幸せを気付かない
貧しさが染みつき尻尾ばかり振る
晴耕雨読年金者に雨多し

ああ夫婦パントマイムのような日々
春愁やおんなひとりの膳覆い
すぐ握手したがる癖のお人好し
豊中もくせい川柳会

泳ぐのが鈍い金魚が生き残り
仏像も鈍い明かりで有り難く

俊 子
曲 手
景 治

スミ子
しげお
恵美子

山 久
ふ み
狭 杏

森 生
正 坊
上 志子

稲 子
紫 香
白 漢子

静 江
花代子
節 子

杜 的
美智子
多賀子

一 郎
諷云児
春 風
佳 秋
萬 的

飯盒で米研いだ日の軍歌集
薪で炊く米が美味しい山の宿
蘭米のおかけで一億生き延びる
童唄 祖母がリズムで米を研ぐ
いつまでも拗ねてはおれず米を研ぐ
法事過ぎ広間の空気入れ替える
険悪な空気のまま孫の歌
みな高い次元で物が売れて行く
段差にも情けをもらう車椅子
鯉のぼり隣より少し高い目に
背の高い女ばかりの職場です
高樓を苦笑して見るかたつむり
天守閣から花見下している花見
高い煙突残して廃業した風呂屋
私にはなにもくれないリクルート
高い服買つてカードの付けが来る
蝶が舞う平和な春をたたえる
春霞 山の辺峠で国見する
鯛焼きの温さを孫へお土産に
子が就職それで電器はみな日立
いい返事貰えなかつた父の靴
補聴器を外して春の音を聞く
ピカピカの一年生が弾んでる
てのひらへ祖母からもうこぼれ梅
約束を守つたシャツが干してある

倉吉川柳会

渡辺

昔句報

正坊 白漢子 福一 隆 房子 花村 圭坊 明光 つえ子 杜的 博史 富子 きく子 萬的 寿美子 慶子 登志実 明吉 露児 英子 よし子 武庫坊 典子 とく子 作二郎 昔句報 寿満湖 小生 和枝 碧水 ひろし

この野原極楽行に通る道
猫の目を借りて夜歩きして見たい
負けて勝つ夫に白旗振ろうかな
一億円ぐらいじやびつくりしないわな
家出した猫が子供を連れ帰る
野のような人とかれこれ五十年
竹藪で一億円が生えてきた
大蛇に会ってシャッキリ落ちました
停年で妻の反旗がひかるる
野にあつて心の風はみどり色
リクルートも知つておりまっすちの猫
手術覚めて自分にびつくりし
段々畑の母を手旗で呼んでいる
猫でさえ優しい人の膝が好き
バラ百本咲かすプランを練っている
女文字あけてびつくり請求書
野辺送るいつかは俺も送られる
血統書付きの猫なら貰わない
手鏡の奥にひろがる風野原
眼を病んで違う世界が見えてきた
一つだけ風になびかぬ旗がある
離縁状はびつくり箱にいれてある
知らんふりして猫の太郎の朝がえり
旅人を庇ひ続ける野の一樹
国民を騙すプランを練っている
菱形に白いカモメの旗じるし
野良猫のヒゲは自由を主張する
猫のひげハテナ何本あつたかな
川柳塔とつとり 岩原 喬水報 空財布カード一枚だけ残り 何事もカードカードで済む都会

寿朗 千代子 秋草 康志 康子 よしえ 秋人 さつき 小鹿 亜弥 柳風 はるお 満春 京子 御前 雄々 千代 瑞枝 秋女 とみお 螢 荒介 次男 石花菜 独歩 普句 秀和 砂山花

テレホンのカードは秘密聞いている
裏にあるカードのこわざ忘れまい
無理頼む女涙を武器にする
頼み事するときだけは低姿勢
頼まれた判でエレジー幕を開け
頼み甲斐ありいい返事も戻り
かたがたと頼んで出たが盗まれる
屑いちごストロベリーで口に入り
果物屋見やすい場所にいちご置き
禁断のいちご二人でいつ食べ
先頭は遙かな先を見えがくれ
本丸が遙かに見えて来た疑惑
遙かなる国の黄砂が早春を舞う
渡り鳥遙かな国のドラマ知る
南極の遙かな夫に便り書く
天国につづく遙かな道を選ぶ

尼崎いくしま川柳会 春城

触れた掌の温みを愛と信じよう
胸襟を開くと温い血が通う
口惜しさも消えた記念の銀メダル
記念樹は葉桜がムがよく見える
ルーブタイ退職記念にくれた人
ボールペンばかりがたまる記念品
百姓一揆の記念とか言う石地蔵
謄本に義母とはつきり書いてある
義理だけを抱いて心は瘦せている
義理ばかり考えずすて快く生き
義理だけで田舎に住むめ都会人
父の手帳は返せぬ義理が理めである
義理欠いて一つの橋が渡れない
義理立てる茶断ち素顔が美しい

年代報

旋風 多可志 喬水 一枝 俊路 由多香 粗粒 呼風 新風 友郎 帆雀 一步 艶子 洋平 山人 武庫坊 諷云児 佳秋 作二郎 伊三郎 正坊 萬的 杜的 眉水 ときお 文子 芳子 紫香 英子

義理一つ果たして白い足袋を干す
はのぼのと胸に画いたがきつとある
銅像に言いたいたい花が時計
充電を待たはしたい花時計

目の届く範囲で孫を遊ばせる
酌み交す猪口から嬉しい本音が
思い出が胸に住みつく途中下車
せまい庭雀のお宿に貸している

ローカル線も春で土筆が延びている
天皇の椅子考えて昭和読む
元氣回復母の叱言が又戻る

人知れずある記念日をあたためる
尼崎おはま川柳会
春城武庫坊報

酔って又妻に財布を調べられ
グループで花に酔ってる終電車
酔えば出る何時もの踊り安木節
恋に酔い遠回りする花の道

満開へ蝶ちよも蜂も酔いしれる
菜の花に我が世の春を謳う蝶
商魂が花咲く季節狂わせる
西洋流少し習って派手を着る

外目には派手なピンエロの泣き黒子
参観日派手な母さんボクはイヤ
ネクタイが派手だと白髪怒ってる
生前を派手に飾った菊の花

派手すぎがニセブランドを見せたがる
言い訳を書くとすべらぬボールペン
ひよこりと答が浮いた水たまり
耳よりな話煙草に火をつける

近所から苦情があったポチの処置
駒つなぎ川柳会
里
小路報

定人
正一
美智子
歌子
みち子
白漢子
園歩
保蔵
静夢
和友
松芳子
年代

御近所を全部集めた救急車
用意して待てば帰らぬ膳覆い
手の凍る丁稚話に馬が合い
ふたりなら凍てつく坂もいとわな
得心へなんでどうして好奇心
得心のゆくおみくじを抱きしめる
ねぎらいの言葉で一本とげを抜く
追い抜いてからの孤独を噛みしめる
向いまで焼けたが何とか助かった
救急車停まれば近所首を出す
不器用な男が洩らす花言葉
やさしさが男が洩らす花言葉
身の凍る想いでしたと生存者
政治不毛凍てつくおもいを如何せん
酒一合それで得心した機嫌
得心のゆくまで泣けとほつとかれ
利子つけて返すと妻は上機嫌
迷路から抜けぬわたしの影法師
生き馬の目を抜く方になってやろう
抜き返す力を亀は溜めてやる
切歯抱腕近所に凄美人後家
ご近所した積木の箱は無理を言う
何か用意せねばと雪崩聞いている
不渡りというよりお顔たてだけ
得心というよりお顔たてだけ
得心をさせる数字をはじき出す
ベテランを抜く事もあるおもしろさ
金で済むことなら金を用意する
楢山へ行く用意などまだしない

悟郎
曲ん手
正弘
あおい
美津枝
喜代治
正一
勝美
眉水
千雲
東三
英一
頂留子
遊美
しんじ
覚然坊
外吉
凡子
恒明
金太
比沙胡
信治
元紀
作二郎
重人
柳宏子
庸佑
月子
文秋
炎志
新造

美辞麗句仏の顔が凍りだす
天も地も凍る広野の歩哨線
得心もした苦悩のむし返し
得心しきった姿で修道女の瞳
出かける主人の空気を少し抜いておく
まだ籍を抜いてくれないめし茶腕
性悪の猫が近所を離れない
ご近所の批判をあびているピアノ
用意したタルマ片目のまま終り
用意はよいかよいかと発車ベルが鳴る
昭和閉す凍土に眠る戦友のこと
夫おもう凍てつく便り昭和基地
勘違いに気付いて電話してくれ
得心がいけない内に時間切れ
押し売りへ強い味方が住む近所
止り木の端で息抜くタイミンク

国公
善信
幸治
萬的
度
雀踊子
翠公
育園
潔
幸章
憲太郎
天笑
射月芳
柳伸
小路

翠洋会

中西兼治郎報

猫抱いてせん息の子が叱られる
表替え古い部屋にも春が来る
希望者の少ない区画がある
表替えてみたいよう妻はふけ
裏表あって此の世は面白い
エリートはいつも表を歩いている
カレイとヒラメどっちもどち表表した
一徳田抱いたところで目がさめる
春風へ抱いてる土が芽を起こす
空選び白いマフラー雲と消え
表からいろんな声が春が来る
有給の風邪は理由のおもて向き
へそ練りがかくれんぼしている本の中
抱きかかえ起そうとしても力出す

兼治郎
みよ子
正雄
絹子
すすむ
恭昌
英一
美津枝
さと美
東雲
春子
照子
為子
仙吉郎

うら表ないというのを裏返し
一年間抱えた悩み誤診なり
両親の希望通りにならぬ子ら
抱いている疑惑やさしくほぐす笑み
表ではいつでも仲の良い夫婦
水道が埋めるとガスが掘る表
その時は永わすらいをせぬことだ

川柳たけはら

小島

蘭幸報

遊

幼うすけ

小一步

小一千

小二孝

小三昌

小三史

小四孝

小五視

小五品

小五晴

小六博

中三垂貴子

シゲヨ

臣子

西合

新造

雄幸

親杏

ハマコ

照子

骨つばは自分で焼いておきたいな
責任を果たして冬の雨にあう
変形の骨あり我もボンコツか
あの人の魅力のエッセンスを少し
偏差値の糸切れた子の目の色よ
うちの子も書かされたり社アンケート
エゴかもね咲いている花を買って来る
すてきライフ心のおしゃれに短詩詠む
自動ドア！納得いかにぬ消費税

たたかいはこれからですとネジを巻く
ペダル踏む風に春の香りする
吹けば飛ぶ民へ王手の消費税
落ち椿老後のことをふと思ひ
草餅で祝う夫の誕生日
揺れる火を見ている一人ぼっちの日
そよ風に誘われ女旅立ちぬ
みの虫よみの虫のままじゃやないんだよ
消費税火を噴くようにいる一票
毒舌もさらりと流す夫婦なり
大喪の礼真珠の雨が降り
大学は卒えたがレールなんかかない
春を呼ぶ風ならじつと我慢する
園長さん今日は居眠り誰もせず
総理の耳ふと大きいなと思ふ
コーヒーの渦遠き日のロマンスよ
生々流転いつかは土になるものを
若者のお喋りが好き喫茶店
友が逝く仏の坂はつぼつと
三十一文字に託すレットロな恋もある
足払い食うかも大地踏みしめる
いの一歩今日の運勢見て出かけ

博子

貞子

美佐雄

千代美

禮子

輝恵

淑子

康子

令子

のぼら

みつ穂

白狐

節夫

房子

笑子

年子

比呂子

澄巳

澄江

滝代

大陽とコロコロ遊ぶ孫と夫
習いごと外出したい口実か
悠々とパンダのように暮らせたら
春よ春頭かすめるよもぎ餅
お気の毒奉仕作業で奇怪我され
黄金の背中に乗った鯉の夢
コンニャクに裏と表があるという
オアシスを求めて嫁は里帰り
生活のリズムを守る朝を起き
ありがと俺には過ぎた女房どの
石が重く子等に清物遠くなり
白髪になってもおしやれ考える
みんな他人でみんな笑顔をもって
七十三叶わぬ夢の夢を見る

愛子

光子

千年枝

八重美

俊夫

勲

喜美子

浪

夏喜

麻代

喜久恵

蘭幸

静水

中川

滋雀報

庸佑

白兔

凡信

善信

滋雀

シメ子

岩信

山久

シマ子

欠陥をなすり合っている上と下
ロボットに目立ちはじめた怠け癖
冷めた眼になると欠陥隠え始め
欠陥をつつくと本音とんでる
欠陥車扱いですが未だ元氣
欠陥の親子積木が脆すぎる

頂留子

勝美

三恵子

遊度

遊美

章

遊久

章

遊

遊

遊

遊

遊

遊

遊

遊

遊

遊

遊

遊

遊

遊

遊

遊

すねるから時々蹴飛ばす洗濯機
 欠陥を突かれて外す鬼の面
 煩惱を背負うと肩が凝ってくる
 与えられた宿命ですよと苦を背負い
 力こぶ一家を背負う腕と言いい
 いい恰好し過ぎて付けを背負い込み
 ここは一つ折れて息子に背負われる
 地下足袋が背負うてくれる左前
 一本のマツチが照らす闇の幅
 照る日曇る日笑ってばかりいられない
 善行を重ねて暖かい日照り
 一隅を照らしてぬくい辻地蔵
 照る日差し輝き見せて木木の青
 一灯を照らす仏の道を行く
 まごころを値踏みしている寒い部屋
 目を閉じる時人間の値が決まる
 値があつて値のない骨董抱いている
 値切つたらあつさりまけてやめにする

トミ子
 曲み子
 藤子
 文秋
 覚然坊
 新造
 寿美
 千梢
 雀踊子
 智子
 柳子
 憲太郎
 公一
 楓楽
 信治
 柳宏子
 慶三
 紫香
 美智子
 雀踊子
 代仕男
 青湖
 多賀子
 桂子
 雄々
 節枝
 峰雪
 幸子
 ナツエ

道ひとつ朝の女で惹きざむ
 この道もどこかに落し穴がある
 朗らかな女で今日を生きました
 忍耐の一生だったと老夫婦
 夫との出会いをくれた桜土手
 さくらのみ満開競う無人駅
 満開の桜へやさしい人ばかり
 桜土手花に酔つてゐる人の波
 良心をまだ捨ててない子を許し
 朗らかに過せるわたし幸せで
 散り急ぐさくらを惜しむ花の宴
 ばんばりの映えて見とれる桜土手
 耐え抜いた年輪刻む父の指
 満開の続くさくらに今日も酔う
 夜桜に音痴の歌う声がする
 結ばれた祝福に舞う花吹雪
 忍耐のつばを呑み込むのと仏
 あのお店は良心的で客もふえ
 うれしい日鏡に広い空がある
 人みんな初心忘れてゐる世相
 平成の世相倫理はどう裁く
 さくらの木戸籍簿できた花の街
 忍の字で耐えた夫婦のおたやかさ
 日本人せつせと稼ぐ職の道
 私も鏡も嘘をついている
 平成も女が強くなる世相
 朗らかな嫁だが口が少し過ぎ
 朗らかな嫁で朝から歌謡曲
 反骨の歩く道もありました
 残された余生楽しく朗らかに
 拍手のコタマに良心よみがえる

嘉寿子
 茂光
 巳千子
 梅園
 昌子
 幸夫
 文子
 鶏生
 秀子
 千里
 一葉
 武衛
 義良
 はる代
 島子
 仲子
 やす子
 常子
 延子
 百代
 翠星
 翠晶
 翠晶
 林蔵
 寿美子
 叮紅
 舞吉
 巡歩
 鶴丸
 ふみ女
 清祥

良心を丸ごとのんだリクルート
 良心が許してくれぬ過去の傷
 良心が咎めお世辞が多くなる
 近道を教えぬ父のきびしい目
 三面鏡女の業をためた過去
 忍の字を守り職場の生き字引
 金力がすっかり良心麻痺させる
 桜土手暗い世相は忘れよう
 堪忍袋妻はずーと握りしめ
 良心に託びたい嘘が日々つもの
 現代の世相で育つ児を案じ
 良心があるから反旗よう振らぬ
 人の秘密覗かれそうな夜の鏡
 三面鏡春の女は花になる
 せちがらい世相へせまる消費税
 人よりも車が優先する世相
 あまりにも良心的で案じられ
 良心といつも一緒に影法師
 ふた親の背中鏡に子は育つ
 タイミング桜にもらうプロポーズ
 友情へ感謝業桜の句座楽し
 また逢う日おしみなく舞う花吹雪

和幸
 幸一
 竹雪
 英男
 弁治郎
 千草
 文子
 花子
 為一郎
 ゆう子
 昭二
 車楽
 早苗
 克子
 ゆき子
 弘朗
 きみえ
 幾子
 正朗
 明朗
 芳子
 美代子
 一子
 節子
 重一
 ちづ
 弘子
 花子
 西村
 早苗報

行商の女高利も売り歩く
 人形の顔でないから見あきない
 夢ひとつ消して大人になってゆく
 来る来ない花占いをしてる夜
 振り向くと妻に忘れたことばかり
 善良が化かされてる消費税
 箱詰めでリンゴは遠い旅に出る
 アドバイス有り難いなと今になり
 胸に棲む亡母と一緒に聴く法話
 紅を塗る妻へ舌打ちする夫
 運に五分努力に五分のひたる策
 偶然を期待しているふところ手
 逢うことの期待来る日へ指を折り
 晴れのち曇急ぎの足に雨おんな
 指定席に私の名前書いてある
 半円を描いて、ペンをとめておく
 お化けより怖いお人がたとに住み
 野次馬のそれも混じって民の声
 肩書がとれて気楽な茶をすすり
 電話する相手も風邪で咳がとぶ
 人情の温味を抱いて立ち直り
 仕合せにまだ出逢わない影法師
 胃の傷みなおる一つの欲を捨て

富柳会 池

夢 三和 夢 三和 夢 三和
 健 歩 健 歩 健 歩
 忠 子 忠 子 忠 子
 哲 三 哲 三 哲 三
 雪 代 雪 代 雪 代
 巡 歩 巡 歩 巡 歩
 宗 光 宗 光 宗 光
 紫 泉 紫 泉 紫 泉
 裕 裕 裕
 定 明 定 明 定 明
 多 賀 子 多 賀 子 多 賀 子
 秀 子 秀 子 秀 子
 晴 月 晴 月 晴 月
 寿 美 子 寿 美 子 寿 美 子
 雪 子 雪 子 雪 子
 鉄 花 人 鉄 花 人 鉄 花 人
 愚 童 愚 童 愚 童
 弘 朗 弘 朗 弘 朗
 雄 々 雄 々 雄 々
 舞 吉 舞 吉 舞 吉
 雀 踊 子 雀 踊 子 雀 踊 子
 早 苗 早 苗 早 苗
 森 子 報 森 子 報 森 子 報
 花 子 花 子 花 子
 静 枝 静 枝 静 枝
 昭 水 昭 水 昭 水
 智 久 智 久 智 久
 勇 勇 勇
 曲 人 手 曲 人 手 曲 人 手

天狗にはなるなど亡母の夢枕
 見られたら困る手帖の丸印
 来年を画鋏で止めた忙しき
 弱点もあって天狗の高い鼻
 いつからか天狗になっていた受賞
 川柳高知 川竹
 幸せのいつかくすれる日の怖さ
 母の掌は体温計の役もする
 糸切れた風電線に晒し物
 糸ほぐす祖父善人になりすまし
 しつけ糸抜いて明日を待つ晴着
 子の咳が気になる春はまだ遠い
 結論のまえに社長の咳払い
 こんな夜は屋台恋しい赴任先
 屋台では社長も平もないお猪口
 屋台酒飲んでネオンの街に更け
 おしのびで屋台の味が盗まれる
 グルメより屋台の味が性に合い
 税務署は働く者を追いかける
 働いた割りに報いのない農婦
 人形をおんぶし母性豊かなり
 人形をいっぱい持って友がない
 玉ぐし料こんどは違憲面白し
 例えはの話で元気づけてやり

莊 次 文 美 森 花 松 千 淳 一 竹 幸 和 一 幸 功 幸 泉 和 興 一 節 菊 春 高 佳 松 風
 次 房 子 梢 柳 惠 子 枝 枝 功 泉 泉 興 一 節 菊 童 重 重 坊 風

川柳科学随筆
 水車のうた
 東井 淳 著

*筆者は東北学院大学助教授。新進の物理学者である。自然界の真理に立脚し、自然を愛する心からにじみ出た「川柳作品」と、科学知識の分かりやすい「随筆」で知られる川柳界注視の若手作家である。

*今回その作品を一冊にまとめた。貴方の句材、句想を広げるためにご一読をお勧めする。

*(A5判一七八頁上製本)
 頒価千円、送料二百六十円。(切手可)

〔頒布・発送元〕
 まいにち川柳友の会
 〒五三三七
 大阪市東成区中本三三七一
 下振替口座(大阪) 四一九三三〇五

6 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 および 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	2日(金)午後1時から 近所・ほめる・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
堺川柳会	4日(日)午後1時から るんぺん・留守・ルーツ・流転	堺総合福祉会館 南海高野線東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
八尾市民 川 柳 会	10日(土)午後6時から 坂・雑草・浮く・参加	八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後1時から ジंकス・影響・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
高槻川柳 サークル 卯の花	15日(木) 正午から 意外・誤る・ワンテンポ・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児 句会費 500円 投句料 200円(郵券可) 各題2句
富 柳 会	15日(木)午後1時から のど仏・のれん・惚気	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
南 海 川 柳 会	16日(金)午後6時から 好き・地方・原則・部分	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳 塔 わかやま	18日(日)午後1時から 迫る・狭い・席	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
川 柳 ねやがわ	18日(日)午後1時から 相談・手品・ストレス・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町6-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
もくせい 川 柳 会	19日(月)午後1時から 陸・面影・同じ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(月)午後6時から 飽食・問題・洋菓子・労働	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
川 柳 東 大 阪	24日(土)午後6時から ひとり・歴史・豊か・姫	東大阪市社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
駒つなぎ 川 柳 会	26日(月)午後6時から 隅・腕・姿・客	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
※ 川柳塔まつえは11日(日)復刊20周年記念川柳大会のため70頁参照		

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(締切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

本社6月句会

日時 六月七日(水) 午後六時
会場 メンズファッションセンター三階

東区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

おはなし

兼題 「惜しい」

「地囃」

「歩く」

「円」

「西尾」

「栗選」

「宮口」

「吉岡」

「美房」

「美選」

「板尾」

「岳人」

「吉川」

「美選」

「美選」

「美選」

会費 五百円
席題 二題 当日発表
各題三句以内厳守

★投句は柳箋(4cm×19cm)に1葉1句。
各業ごとに裏面に必ず氏名明記。
投句料 310円(62円切手5枚)同封のこと。

本社7月句会 7月4日(火)

兼題 「似る」 「メロン」
「浜」 「天才」
川 柳 塔 社

●募 集●

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栗選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風選
茴香の花 (3句・女性) 小出 智子選
「強い」 川島 諷云児選
「山」 遠山 可住選
「雑巾」 羽津川 公乃選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栗選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風選
茴香の花 (3句・女性) 小出 智子選
「牛」 宮口 笛生選
「謝る」 松本 今日子選
「ブラシ」 神平 狂虎選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友に限らず、どなたでも投句できます。

暑中広告案内は81頁に掲載

社 告

「愛読ありがとうございます。本社は『川柳塔』誌代を昭和五十六年四月以来、八年間にわたってすえおいてまいりましたが、その後の頁数増加などにもなう諸経費高騰のため、六月号から定価を改定させていただきます。

新定価は、六百元(送料51円)とし、半年分は三千八百円(送料共)、一年分は七千五百円(送料共)となります。

川柳塔社

定価 六百元(送料51円)

半年分 三千八百円(送料共)

一年分 七千五百円(送料共)

一九八九年五月二十五日印刷

一九八九年六月一日発行

編集兼 西尾 巖

印刷所 藤原 童心 社

〒545 大阪市阿倍野区三丁目二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (三六五)六一六九一四番

振替口座大阪8-1333六八番

Ⅱ 編集後記 Ⅱ

☆またまた本社相談役の高
驚亜鈍氏が亡くなってしま
われた。川柳塔の重鎮が相
次いで幽明郷を異にされる
ことは誠に悲しい。東野大
八氏に知らせたら、追悼文
を書けというのだろうか？翌
日にはもう原稿が到着した。

☆亜鈍氏は「川柳雑誌」に
詩人としての立場から、詩
川柳考など様々な評論を寄
せられ後進を啓発された。
理論はやや難解で初心の私
は戸惑ったものだが、文章
からもバイタリティーに溢
れた氏の人生の特異性が感
じられた。その特異な人生
の軌跡と川柳界に尽くされ
た業績は、今後語り継が
れることだろう。

☆亜鈍氏は、昭和三十九年
の東京オリンピックの競技
をテレビで見ていて、突然
目の前が真っ暗になり失明
されたらしいが、私には、
その後、尾道で麻生家の墓
と一緒に探して歩いた思い
出がある。福善寺という寺
だったと記憶するが、立派

な臥龍の松のある境内の墓
域の限に、それを見付けた
時の感慨は今も鮮やかだ。
「盲人の手をひく先を道お
しえ」の句は、そのときのお
所産で、夕暮の極楽寺で詠
んだ「夕桜盲人鳩の餌をこ
ぼす」「夕桜琴木の布に包
まれる」の句とともに拙著
「肉眼」に掲載した。

☆居を寝屋川に移されてか
らは、三井団地に川柳の一
粒の種を播かれ、今の川柳
「ねやがわ」に発展した。
亡くなる前まで車椅子で句
会に出席、川柳を愛された
お姿は誰の胸からも消える
ことのない尊いもので、今
頃は路郎・葎乃尚先生や豆
秋さんの元へ急いでおられ
るに違いない。ご冥福をお
祈りする。

☆句評リレーは、好評なの
で続けたいのだが、評者の
都合や郵便事情のため遅れ
がちとなり、今回もメンバー
の出入りとなった。メンバ
ーの四人が、起承転結をわき
まえ、スムーズに所論感想
を展開するのは至難のこと
のように思える。句の流れ

と同じに、評の流れがあり
そのことでも亜鈍氏が慕わ
れてならない。
（薫）
▼いままら改めということ
でもないが、以前から川柳
界の高齢化問題をよく耳に
したものである。俄 万智
の「サラダ記念日」が爆発
的人気を博した頃には、特
にその問題を身近に感じた
のではないだろうか、彼女
の二十四歳が短歌界の年齢
を代表しているように錯覚
されて、ひとり川柳界のみ
が老化の一途を辿っていた
のではない。

▼人は誰でも年をとるもの
である。生きている限り戸
籍の年は無限である。年だ
けが自慢になるものではな
い。年齢の若さだけを問題
にするよりも、いついつま
でも精神的な若さを喚起持
続さすべきではないだろう
か。

▼八尾市公民館における去
年の川柳講座、受講生三十
四名の平均年齢は六十三歳
であった。それは単なる数字
であって、川柳にとってマ
イナスではなく、プラスだっ

た思っている。それは教
室における各人の眼の輝き
から感じられたことで、視
野を移せば他の短詩文芸の
教室においても同じことだっ
たかもしれない。しかし、
川柳即人間的な発想からす
れば、十七音字表現を基本
とした、その他の自由さは、
意識下で求めていた魂に響
いたのではなからうかと思
う。六十余年の人生経験を
豊かに開花される手答えを
感じたのである。何十歳か
であつてもよい、川柳との
出会いによって花を咲かせ
てほしい。
（き）

●『職業としての編集者』
という本が岩波新書として
刊行された。雑誌『世界』
の初代編集長として知られ
る吉野源三郎（故人）の回
想記である。戦前から出版
編集者として活動し、日本
の出版史に独自の足跡をの
こした骨太のジャーナリス
トの著述をまよめて読み、
つよい感銘をうけた。

●「元来、出版とは英語で
パブリケーションといわれ
るように、パブリックなも

の、公共のものです」と自
らの仕事にきびしさを課し
た彼は、『世界』の編集後
記で編集者の役割について
「現代における精神的生産
の助産婦」と記している。
●この本の巻末にかかげら
れた解説によると、「吉野
氏は、『ロンドン・タイム
ズ』の編集長であったウィッ
カム・ステイワードの言葉を
方について、時に編集者があ
りた。それは広い知識とわか
りの早いこと、青臭くない
判断を持つことが必要であ
り、何よりも生き生きとし

た好奇心に満ちて精神が弛
緩していないことが大切で
ある、という内容であつた」
とのべている。

●長年、ささやかながらも
編集の仕事にたずさわり、
いまま細々とかわわつてい
る私にとって、耳のいたい
ことはかりである。気力と
やりにおとろえ、とかく投げ
やりになりがちなのごころ
だけに、どんな仕事もおろ
そかにできぬと答うたれる
思いであつた。
（正）

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成元年五月二十五日 印刷
平成元年六月二十一日発行（毎月一日発行）

KIRIN

21世紀へ乾杯

本格派。
旨さの辛口。

アルコール度数高め
キリッとしまるドライ。

キリンビール株式会社

キリンドライ

標準的の小売価格は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。



5つの個性・5つの色味!!

アイスキャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



なんば戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店
京北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
ぞごう百貨店
京阪モール店

サンストア中之島店
サンストア淀屋橋店
アベノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店

なんば新川店
虹のまち店
ドーチカ店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店



大阪・なんば



TEL 641-0551